



524
407



始



文學博士

南條文雄校閱

立花俊道譯補



シケル氏
佛教大綱

大正
3. 8. 27
内交

東京 東亞堂發兌



H. Kern

序 言

一、本書の原本は和蘭國ライデン大學前教授 Heinrich Kern 博士の *Manual of Indian Buddhism* と云ふもので、『印度アリヤン言語考古學叢書』の一部として一千八百九十六年ストラスブルグにて刊行されたものである。原名の通りなれば『印度佛教摘要』などと譯すべきかと思ふが、元來「印度」の二字を冠せるは本書が右叢書の一部として出された故で、中に説けることは必ずしも印度佛教の一局部には限らないやうに思ふから、單に『佛教大綱』と呼ぶこととした。

一、本書は目次を一見しても解る通り、佛教に關する問題は殆んど残らず網羅して居る。先づ第一編に於ては佛教の聖典、聖典附屬の文學及び佛教興起時代印度に於ける思想を概説し、第二編にては釋尊の傳記を初めから終りまで委曲に説明し、第三編にては科學哲學としての佛教を論じ、第四編にては佛教々團の制度組織及び崇拜の對象物、最後の第五編に於ては佛滅後より現今に至るまで印度、錫蘭及び尼波爾其他の地方に於ける佛教々會史の梗概を説明してある。即ち佛教に關する諸種の問題は總て一通りの説明を與へてあると云つて宜しいのである。

一、斯の如く該博なる諸種の問題を網羅しながら、何れも一通り徹底せる説明を下せるは本書の一特色として算ふべき價値十分なりと信ぜられる。佛傳の如きも普通西洋の佛教學者のや

うに所謂高等批評など些も之を試みることなく、錫蘭、緬甸、尼泊尔、西藏等の佛教國にて蒐集し得たる材料に依據し、傳説のまゝの傳記を案排したのは又敬服に値することである。

一、本書の吾人に裨益する所は單に之のみでなく、又その無數の脚註を附せる點にあるのである。本書に説明敘述又は論評せる事項は他の學者の場合に於けるが如く、佛教に關する一箇の問題を捉へ自己の頭腦を以て漫然之を批評したるものとは大にその選を異にする所がある。言ふ所論する所一々典據により、而してその典據は一々之を舉げて讀者の参照の便を計つてある。

一、原書の本文は勿論脚註も一項も残らず之を譯し、每章の終りに附して、本文と参照するの便を計つた。但この脚註には梵文巴利文は勿論のこと、獨佛羅露希臘西藏の文字まで混つて居るが、之等は露西亞の佛教學者にして目下此地に佛教研究中なるオットー、ローゼンベルグ氏を煩はして大方解釋を加ふることを得た。

一、南條先生は多忙の御身なるにも拘らず、遂に書をケルン博士に寄せて翻譯の許諾を求められ、且つ翻譯成るに及びて校閲の勞を取られしは譯者の深く感謝する所である。本書の茲に譯本として世に現はるゝことを得たるは全く先生の賜物である。

一、ケルン博士は翻譯のことを快諾され、且つ寫眞一葉を惠まれた。卷頭に挿めるは即ちそれで

ある。特記して感謝の意を表す。

一、譯語は多く在來のものを用ひ、新たに案出することは努めて之を避けた。梵語巴利語・佛教及び哲學に關する専門語の譯は『哲學大辭書』に據り、他は入江祝衛氏の『詳解英和辭典』を參考して適宜に譯語を附した積りである。譯語に就いて同氏より得たる懇切なる助言に對しては譯者の深く感謝する所である。梵語の轉譯に關しては荻原雲來氏より亦懇切なる示教を得たり、記して同氏及び前記ローゼンベルグ氏に感謝の意を表す。

一、本文中に挿入せる原語二種なるは、前者は梵語、後者は巴利語である。一種なるは或は梵語なるあり、或は巴利語なるあり必ずしも一定せず、之は原文に従うたのである。

大正三年七月

於上澁谷僑居

立花俊道記

ンケル氏佛教大綱目次

第一編 緒論

- 第一章 聖經……………一
- 第二章 聖典附屬の文學・古譚的半史的事件を記せる書・宗教詩……………二五
- 第三章 佛教興起の年代・當時の印度思想及び理想……………三五

第二編 佛傳

- 第一章 下天・托胎・降生・幼年期・青年期……………四〇
- 第二章 未來の豫言・迦毘羅衛逾城・出家……………四九
- 第三章 遍行生活・難行苦行・魔王戰闘・勝利・佛果獲得……………五七
- 第四章 成道の初七週日・說法及び五乞食僧の濟度・他の得度者・魔王の誘惑・三迦葉・火聚喻經・頻毘娑羅王と會す・舍利弗目犍連の歸佛……………六五

目

次

二

第五章 迦毘羅衛入城・羅睺羅難陀の受戒・佛王舍城に還る・阿難陀及び他の諸釋種の出家・給孤獨・毘舍佉……………八〇

第六章 菴婆波利・耆婆・佛毘舍離に赴く・釋迦拘利兩族間の争鬪・淨飯王の崩御・比丘尼入團の許可・識摩の歸佛……………九一

第七章 諸外道師狼狽す・佛天界に上り摩耶夫人に阿毘曇を説く・僧徒舍へ下降・戰遮・僧伽中の軋轢・佛曠野中に棲む・歸還・稼人の喩話・其他の事件・善覺の責罰……………九九

第八章 アーラギー夜叉・阿難陀の選任・菴囉摩羅の濟度・孫陀利殺害・給孤獨の女……………一二二

第九章 提婆達多と阿闍世・阿闍世の歸佛・釋迦族滅亡……………一二七

第十章 最終年の事故・阿闍世王と伐地族・佛王舍城を去る・波吒梨子城への旅行・恒河渡過・菴婆波利・世尊病に罹る・毘舍離城淹留・舍利弗目犍連入寂・准陀家の供養及び之より起れる病・拘尸那揭羅著・阿難陀の教誡・善賢の歸佛・般涅槃・遺形火浴・舍利配分……………一二五

第三編 佛の教法

第一章 根本原理……………一四〇

第二章 生體の要素・業・解脱の道……………一五三

第三章 精神練習……………一六五

第四章 宇宙組織・生物の分類……………一七六

第五章 阿羅漢・辟支佛及びその特性……………一八五

第六章 佛及びその特性……………一九二

第七章 菩薩及びその資性……………二〇三

第八章 道德説……………二一三

第四編 僧伽、禮拜の様式

第一章 印度の寺院組織・教戒・苦行の法則……………二二八

第二章 入團許可・沙彌・受戒……………二三九

第五編

教會史梗概

第三章 衣服及び用度・住處・食物及び藥劑……………二四七

第四章 波羅提木叉・教戒法……………二六六

第五章 崇拜の對象物・遺物……………二七六

第六章 諸種の聖殿・塔・殿堂・像……………二八六

第七章 菩提樹・正覺座・神聖なる足跡及び地點・輪相……………三〇三

第八章 聖日・祭禮・毎五年の集會・年々の會議……………三一

第一章 第一總會(結集)……………三一八

第二章 第二總會(結集)……………三二四

第三章 波吒梨子城の總會(結集)……………三四三

第四章 阿輸迦王の治世……………三五〇

第五章 諸外國に於ける佛教の傳播……………三六二

第六章 阿輸迦王已後迦膩色迦王に至る時代……………三六八

第七章 迦膩色迦・闍爛陀羅に於ける總會(結集)・大乘教の興起及び發達・錫蘭に於ける分派……………三七六

第八章 四哲學派・優勢なる大乘・印度に於ける教會の衰微……………三九二

第九章 錫蘭教會史の續き・バラークラマ第一世及びその後繼者・印度の密教・排斥せられたる佛教徒尼波爾に逃る……………四一一

目次終

ンケル 佛敎大綱

文學博士 南條文雄 校閱
立花俊道 譯

第一編 緒論

第一章 聖經

佛敎家の聖敎學はその基礎を聖典の上に置いて居る、聖典を全部集めたものは専門的に三藏 (Tripitaka, Tipitaka) と稱するもので、毘奈耶 (Vinaya) 修多羅 (Sutra, Sutta) 及び阿毘達磨 (Abhidharma, Abhidhamma) の三である。三藏と云ふ名で傳はつて居る有ゆる聖典集の中で、巴利語 (Pali) の三藏は錫蘭正統派の長老 (Thera) 即ち分別説家 (Vibhajjavādin) の是認せる説を表はし、形の全體能く整へる點に於ては唯一無二のものである、而して之を構成する各部の關係年代に

關して少くも或程度までは批評的論究を爲し得べしとは十分知られ居る所である。

律とは名稱そのもの、示せる通り、主として教戒并に之に關聯せる諸問題を述べたものである。律の發達に就いては吾人オルデンベルヒ教授(Prof. Oldenberg)の『大毘』(Mahāvagga)の序文中極めて有益なる暗示を看出す。教授の結論は古代佛教文學史上繼起せる事柄を左の如き表に約説してある(一)『波羅提木叉』(Patimokkha)の由來。法六學(Dhamma literature)最初の發端(二)『波羅提木叉』註書の編成、この註書は『毘崩伽』(Vibhāṅga)中に含まれて居る(三)『毘崩伽』編輯され、『小品』及び『小品』(Cullavagga)編成せる、經文學(Suttanta literature)の主要分の起原(四)毘舍離(Vesālī)に於ける結集(西紀前三百八十三年前後)(五)王舍城(Rājagaha)に於ける結集物語の起原、律文最後の一節の編成(六)佛教々團中の分派、論藏の起原(七)波吒梨子城(Pāṭaliputta)の結集、『迦他跋踰』(Kathāvatthu)。

古い北傳々説の殘存せるものを今日吾人が知れるよりも更に深く知るに至つたら、或細項の上で吾人の意見を改むべき必要生ずるかも知れぬが、茲に掲げた條項は總て正確なる推理に據り且つ全く實らしいやうである。

經藏は律藏よりも更に廣大にして雜駁なるものであるが、之は漠然と多少教理に關する諸種

の問題に就いて述べたものと云つて好からう。その尼柯耶(Nikāya)〔阿含(Agama)〕五部の區分は既に『小品』十一章一節及び八節中に出て居るが、別々の書は擧げてない、吾人は唯『長阿含』(Dīghanikāya)の最初の二經の名に出會するのみである。同じ章中にて吾人は五阿含の原文は第一結集の際阿難陀(Ānanda)の助けを得て復誦され、阿難陀は何處と云ふ處、誰に關してと云ふその人、及び何の爲めに各經は説かれしやと云ふその原因に關して證説したことを聞くのである。第一結集の物語的性質を離れてはその話は眞たるべき理由がない、何故と云へば經の開卷の式辭は「如是我聞」(evaṃ me sutaṃ)である、之は世尊の教を口傳から知り得たもの、口でなくば云へないものである、世尊と同時代の弟子は斯う云ふ風に云ふものではない。この式辭の律文にないのも注意すべきであらう。概して教戒上の法則は教理の書よりも大變早く仕上げられて居たと想像することが出來やう。

第五阿含中の諸經の年代に就いては幾何程でも明確に斷言し得らるゝことは少い。されど諸經の内容は異れる時代に屬せりと云ふ、是丈のことは明白である。先づ『本生物語』(Jātaka)を云ふとすれば之等通俗物語の多數は大變古い、或物語は佛教そのものよりも更に古いと云ふとは殆んど疑ひなきことであらう。この宗派第一發展の時からして説教僧等の之等の物語を教の急

用に應じて改作し教訓の目的に用ひたことは必ずしもないことではあるまい。バルント(Bharnt)及びサーンチ(Sanchi)に於ける彫刻から見れば『本生物語』は阿輸迦(Asoka)の時代では佛教學の一部と思はれて居たやうである。^(七)

四阿含中の諸經及び『小阿含』(Khuddakanikāya)の諸書の比較年代に關して人が如何考へやうとも、經藏大半は大體丈多分西紀前三世紀には既に存在して居た。パブラ(Pahra) (パイラート Bairāt)の碑文中に擧げてある名稱を見分けるは困難の伴ふものであるが、少くとも一經『妄語に關し羅睺羅戒經』(Tāghulovāda concerning falsehood)は『中阿含』(Majjhimanikāya)一卷四一四の『妄語に就いて羅睺羅戒經』(Rāhulovāda on Musāvāda)と同一なるは明白である。

「五尼柯那の」(pacanekāyika, pañcanāikāyika)と云ふ語のあるは五阿合集の存在を豫想するものだとはいエーレン(Bühler)の指摘する所である。併しビエーレンのこの言は有ゆる宗派に當てはまるものではないと云つて置くべき必要がある、是れ吾人の知れる範圍内では經藏を五阿含に分けるのは上座部(Theravāda)よりであるから。^(十) 諸阿含の細別に就いては上座部派の中でさへ不一致の點があつた。^(十一)

論藏は『小品』中には全く擧げてない。この事實は論藏は毘舍離結集の後に成れりと云ふ斷案^(十二)

を保證するに足る、加之論藏の性質はこの斷案を更に強くする。「論部の編集者は阿含中に詳しく論じてあるやうな問題のみを採つて、佛教々理に關する多數の細項の順序及び案排に關しては幾らか違へて以て多少純然たる學者的専門的方法に之を論じたやうである」^(十三) 實際出版になつた原典は唯分類及び定義の列擧である、北傳文書中「論母」(Māṭṛkā)を「論」と同一義に用ふるは道理あることである。オルデンベルヒの語を用ふれば「毘舍離の結集と波陀梨子城の結集との間に初めて分派の起源を見、この間は亦論文學 (Abhidhamma literature) 發展の時期であつた」。

北方佛敎徒中諸派の聖經——全く正確なる語と云ふよりも寧ろ便利なる語を用ひて——は巴利聖典中にその類經を有し、大乘敎徒の「新」聖典に屬しない丈の所では、知られて居るものは唯その一部分のみである。先づ第一彌沙塞部(Māṅśāsaka)の支那傳の律、ピールは之を簡短に解析してオルデンベルヒに通知したことあるが、之を西藏傳の大説一切有部律(Mahāsāravāstīyādin)の拔萃と比較したる後、『大品』の編者オルデンベルヒは下の如き斷案を引出した「諸部の律は總て同一根據に基けるものであつて、材料の案排は何れにあつても皆同じいものである、原典に入れ交せてある物語の大部分は殘らず一致する」^(十四) 『毘崩伽』を組成する要素中物語の部分は最後に加へられたことは上に指摘した所である。之等の物語は諸派の異説の起つた時代

よりも更に早い時代に加へられた。最初の兩結集の物語——之は巴利律中最後の編成に係る部分たるは明白である——でも彌沙塞部律及び大説一切有部律の中で全く同一箇所に見出されるものである」。

茲で彌沙塞部及び大説一切有部は共に正統派上座部の分系であつて、正統團の支派を形造ると云つて好いことが認められやう(一七)。されば彼等の律の上座部の律に極めて密なる類點を有することは勿論のことである。併し是れだからとて、總ての律傳は分裂せる大衆部 (Mahāsāṅghika) の諸傳をも併せ、共に同程度の類點を示すと云ふことにはならない。大衆部は最初の結集書を改作し、律及び五阿含の上に添削を加へたと云ふ、彼等の反對側の偏頗なる證言を別にして、吾人は大衆部黨中少くも一派丈は律と言ふ語を特別に用ひたと云ふ事實を擧げることが出来る。大衆部の支派たる出世部 (Lokottaravādin) に屬する書梵文『大事經』 (Mahāvastu) は序言の後に左の如き表題を見せて居る。(一八)「聖大衆部家、説出世部家、中部地方人の誦出に係る律藏大事經の初め」。本書の内容は拙く案排してあつて、菩薩の物語的傳記より抜き來れる節、本生物語、釋迦族の前史等より成れるのみであつて、教戒に關する事柄は少しも中に交せてないから、之を律書として類別するを見るは不思議である。(一九) 何故と云へば巴利の律も物語の部を含めること

餘程多くはあるが、その中一として此處以外の所でならば經藏中に入り相な問題ばかりを含んでる書とてはないからである。(二〇) 支那の典籍に隨へば『大事經』は大衆部に取つては法藏部 (Dharmagupta) の『出家經』 (Abhinīṣkramaṇa-Sūtra) 一切有部 (Sarvāstivādin) の『普曜經』 (Alita-Vistara) を表はせる書である。(二一) この言葉は正確を缺いて居る、何故と云へば本書の今上に擧げた諸書に符合すと言ひ得らるゝ點は、菩薩の歴史をその佛果を成するに至るまでのことを明かせる部分のみにあるからである。全體から見ると『大事經』はその内容は大體に於て正統諸派の集中に見ると同じく、但その案排は全然違つた方法に隨ひ、或は全く方法なしとも云ふべき書である。之は又他の點即ち多數の佛を呼ぶ上に於て正統諸派の原典とは違つて居る。(二二) 斯う云ふやうな呼び方は方等諸經 (Vajrapya-Sūtra) の其と大變似て居るもので、之が阿輪迦治世後の一時代を劃することは殆んど疑はれぬことである。『大事經』の言語及び文章を他の文獻と比較すれば、その編成の時代は巴利聖典の年代と方等經の年代との中間であると云ふ印象を残す。

他の原典の存在せぬので大衆部聖典の案排に關する吾人の意見は甚だしく制限されざるを得ない。玄奘の言によれば大衆部の舊經典は五種あつて、經 (Sūtra) 律 (Vinaya) 論 (Abhidharma) 雜集 (Sainyukta) 陀羅尼 (Dhāraṇī) (或は禁咒 Vidyāhara) 藏に分れて居た。吾人はこの言葉の價

値を量るべき手段を有たない。

ビュルヌーフ (Burnouf) は何處かに、ホゼン (Hodgson) の尼波爾集中律書を見ないのは不思議であると云ひ、且つ律は實は『阿婆陀那』(Avadāna)之を表はせるものと見て、この事實を説明せんと試みて居る。この意見には西藏經藏中『阿婆陀那』は巴利聖典中に於けると同じく經藏の一部を成して居ると云ふ反對が來るかも知れぬ。ホゼン集中に——『大事經』を除き——律原典のないのは尼波爾に於ける佛教の狀態からして譯なく解釋が出来る、尼波爾では僧院生活は疾うに制度の實を失つて了つて居た。

北傳の經藏は支那譯となつて保存されて居る。西藏傳から來た多くの經題も吾人の知れる所であつて、この中幾分例之かの重要な『大般涅槃經』(Mahāparinirvāṇa-Sūtra)の如きは、多少完成せる譯本となつて居る。之等舊經典の眼目とせる事柄は多少改訂の上方等經中に入つて、新經典即ち大乘經典の一部を形造つて居る、之に就いては頓て後に至つて述べるであらう。

論部の書は巴利聖典七部の論書と符合するもの支那譯中に殘存する。數多の典據中に之等論書を大概佛の名高き弟子の作としてあるのは大變不思議である。如何ばかり原文に手を入れてあるかは一疑問であつて、之は巴利論部の原文を支那譯と比較し得るもの、唯解決し得る所であらう。

ある。世親(Vasubandhu)の『阿毘達磨俱舍論』(Abhidharmakośa)の如き作は聖典文學には加はらない。

眞實三藏と稱し得るもの、方等諸經に材料を供したことは夥しいものである。大乘家は方等經を總て作つたものでないとするも、少くも之を採用し且つその新聖典中に編入したものである。外形上方等經は編作の方法の違つて居ると語風の變つてゐるとで古い經典と辨別されて居る。方等經の中では吾人は各書極つて散文の數節あり、後に韻文の一節出るを見る、この韻文は大體に於て散文の反復に過ぎず、或場合では又散文物語の源であることもあらう。散文體で書いた部分の用語は一種の梵語であり、韻文即ち偈頌(Gāthā)の部分は一種不明なるブラークリット(Prahit)で、必要の韻律の許す限り幾らか見苦しく梵語にもじつたものである。吾人の意見によれば散文は正式に或ブラークリット文から梵文に譯したものだ云ふには少しの疑ひもない、之は比較的易い仕事であるが、反之偈頌を梵語に轉することは大概の句を全く改作しなくては出來難いことである。何故に且つ何時梵語はこの原語に代つたか。現在の所では吾人はこの翻譯は時代の要に應ずる爲め決行されたものと想像するより以上のことは出來ない。諸種のブラークリット語は總て廢語となつて了つた、これその共通の運命である、然るに梵語の

研究及び實用は、科學・文學・教化の通用語として、アールヤ人(Arya)ドラヴィダ人(Dravidia)間の繫索として、印度到る處に維持されて居る。何時梵語はその優勢を恢復したか。勿論漸次に恢復したのである、併し吾人は時代の範圍を何程たりとも確かには之を定むることが出来ない。されど吾人は迦膩色迦(Kaniska)治世中の結集の直ぐ前か後かに聖經を再興するの要感せられたりと暗示して置きたい。

或方等經は實質の上では甚だしく舊經典に似て居る。例之『普曜經』の文句全體殆んど語々巴利聖典中に出て居る。大抵の場合同種類の書は更に著しい特色を示して居る。總て佛教徒の共有せる傳説の源は、非正統派諸宗の間にあつては事項の追々加つた爲め、増加したと云つて好からう。新しい神話的實在者觀世音(Avalokitesvara)文殊師利(Mandisa)菩薩の如きもの現はれ、過去現在未來の諸佛は釋迦牟尼佛(Sakyamuni)と同様尊崇され祈願される、而も釋迦牟尼佛の像は塗抹される所ではない、前にも増して美しく嚴飾されて居る。^(三三)

吾人の知れる方等經は總て大乘經とその資格を決めてあり、新聖典即ち大乘聖典を成して居る。^(三三)支那の典據からして吾人は大乘經典たるに相違なかるべきは彼の『普曜經』は本當は一切有部に屬することを知るからして、大乘家はその己れの主義に適當する小乘諸宗の作は——吾人

はこの原典は幾らか添削を蒙つたに相違なしと信せざるを得ぬが——之を採用するに躊躇しなかつたと推さるを得ない。

大乘教の興起と關聯せる年代上の問題は餘り廣大にして附帶的に之を論ずることが出来ない。茲では唯大乘經典極樂莊嚴經(Sukhavati-Vyūha)即ち『無量壽經』(Amitayus-Sutra)は西紀百四十八年より百七十年の間に初めて支那語に譯されたと云つてあることを記すれば足りやう。若しこの記が正確であり、且つ又迦膩色迦王の下に行はれた結集の頃生れた龍樹(Māhātīra)は大乘教の創建者であると云ふ傳説も亦正確であれば、前に記した經は新宗派で編成し又は採用した第一の書中その一であつたに違ひない。實際龍樹はこの運動の創始者ではなくして寧ろ最も才智に富み且つ勢力ある指導者の一人であつたかも知れない。^(三七)

陀羅尼を聖典中に持ち込んだのは大乘家のしたこと、云つてある。玄奘は大眾部はその宗の一番初めからして陀羅尼藏を持つて居たと云ふが如何にして彼と此とを調和すべきぞ。玄奘のこの説は眞實ならずと全然之を否認しないとすれば、吾人は大乘家は陀羅尼を案出したのではない、唯その教の一部分として、之を適用したに過ぎぬと云ふ斷案に歸著するに至る。大眾部及び大乘家の傾向間には實際或種の關係の存するを示すものが幾らもある、之はこの書中後

に至つて指摘すべき機會が來るであらう。されば支那旅行家玄奘の印度に往つた時印度に流通して居た傳説を比較上信用するに足らずとするは輕率であらう。陀羅尼は『法華經』(Saddharma-Pundarika)の如き原本の漸次に増大したものであると云ふ事情明白だからとて、是よりも前式辭の別々に存在したことを斷然否定するには至らない。

陀羅尼はその性質顯教的(exoteric)のものであるが、之よりも後に發生したものは祕密眞言教(esoteric Tantra)である。密教文學の十分なる發達は佛教の衰微と同時にである、この密教文學全體に關しては吾人は讀者の本問題の典據を参照せんことを望んで以て満足せざるを得ぬ。

聖經全部を三藏に區分する外、南方及び北方の佛教家は主要なる項目に隨ひ共に部(Aṅga)に區分することを知つて居る。之等諸部はその數九あつて名目は左の通り、

- 一 經(Sūtra) 或問題に關する一連の物語又は韻文を集めたるもの
- 二 重頌(Geya) 韻文散文を混ぜるもの
- 三 記荊(Veyākaraṇa) 説示、之はこの教に従へば論藏全部、偈を有せざる經及び他の八部に含まれ居らざる有ゆる他の佛語
- 四 偈頌(Gāthā) 純然たる韻文

五 自説(Udāna) 散文又は韻文の熱誠なる言辭、この教にては「喜悅の感應の下に輯めたる詩句と結び合せたる經」

六 本事(Itivuttaka) 「如是佛説」の語に初まる百一經を集めたるもの

七 本生(Jātaka) 佛の前生中その一の物語

八 未曾有法(Abhutadhamma) 奇妙不思議なる状態に關する説話

九 廣破(Vadalla) 經の一種にしてその意義の如何に關らず、愉快なる情緒及び満足を感じたる後出したる疑問なりと云ふ。

北方佛教家では時によると之と同じ數を見ることもあるが、更に普通なるは十二種法説(Dharmapavacana)を擧ぐる、ことである(一)經(Sūtra) (二)重頌(Geya) (三)記荊(Vyākaraṇa) (四)偈頌(Gāthā) (五)自説(Udāna) (六)因縁(Nidāna) (七)譬喩(Avadāna) (八)本事(Itivuttaka) (九)本生(Jātaka) (十)方等(Vaipulya) (十一)未曾有法(Abhutadhamma) (十二)優波提舍(Upadesa)。若し因縁、譬喩及び優波提舍の三を引き去る時はこの列名は錫蘭人の其と一致する。因縁及び譬喩は巴利聖典中にも十分示してあるが別部としては算へてない。方等のことを云ふと、「之は諸種の法と義即ち現世の利(義)及び未來世の利(法)を得る種々の手段を論ずるものである」。之等は

方等經と共通の名目を有するに過ぎぬ故、巴利の廣破と同一視するも無難であらう。優波提舍は明かに祕密教を説けるもので、眞言教と同じく原始佛教の圏外に存するものである。

上記の考究に關聯して吾人は茲に聖典の原語の問題に少しく言及するを止むるを得ない。オルデンベルヒ教授の言を用ふれば、内容の點に於て「巴利傳のものは假令原始の傳でなくとも最古の傳たることは是まで示し來つた所である」、併し方語の一點に關しては「之は原始の經典とは違つて居る」、この經文の根本の組成部分^(四四)は摩揭陀(Magadha)の語で述べてあつたこと疑ひなしとは確かに主張して好からう。巴利の原始的出所に就き意見は色々違つて居るだらうが、之が^(四五)摩揭陀の語を表はして居らぬことは今では一般に認められて居る。一番尤もらしい意見は、巴利は羯餞伽・案達羅(Kalinga-Andhra)に起つたと云ふ其である。^(四五)『小品』(五篇三三)中、吾人は佛の人は誰もその己れの方語で佛語を研究するを得と許し給へるを見るが、この重要な文よりして吾人は聖經の印度の到る所に流布された時「確かに之等は摩揭陀國語で印度の各部に交附されしに非ずして各地方特有の方語で交附されしものと推斷して好からう」。假りに之を眞なりとしても、梵語又は梵語化した某語となつて吾人に傳はり來つた北方の譯經は——縱令畢竟は摩揭陀國語の初めに遡るにしても——中間の一段階を通過して來た、換言すれば摩揭陀

語は他の地方語に代られたと想像するを妨ぐるものは何もない。或時代では聖經を出來る丈梵語化するが得策だと思はれたともあるが、印度に於ける事件の經過及びその文學上の發達からして、何故に之が斯うであつたかは直に了解することが出来る。佛教徒が梵語を科學的に研究すればする程その文書は正確になつた。中世梵文學で聞えた名は佛教派の著述家の名である。梵語の著々發達せし優勢力は錫蘭ですら認むべきである、何故と云へば後代に出來た碑文は措いて問はず、吾人は法顯^(四六)の記によりて本島に於ける彌沙塞部の律藏及び他の原典は梵語であつたことを知るからである。

(一)巴利文の律書は Mahāvagga(大品) Cullavagga(小品) Sutta-Vibhāṅga(修多毘崩伽)及び Parivāra(波利婆羅)と云ふ表題で全部オルデンベルヒ教授によりて刊行された(一八七九—一八八二年)

(二)同書序文一五頁以下を見よ、東方聖書一三卷リスデビヅ、オルデンベルヒ兩教授序文、東方聖書一〇卷前付二九頁以下マクスミュレル教授 Dharmapada(法句經)序文參照

(三)オルデンベルヒの意見に對するミナエフの批評參照 Recherches sur le Bouddhisme(佛教の研究)一篇六一—六七頁

(四)即ち 1 Digha-Nikāya (長阿含) 2 Majjhima-N. (中阿含) 3 Saṅgīyutta-N. (雜阿含) 4 Aṅguttara-N. (增一阿含)。之等四尼柯那はまた Agama と稱せらる。是れ北方佛教家常用の語である。5 Khuddaka-N. (屈陀迦或は小阿含)は Khuddaka-pāṭha (屈陀迦波多) Dhammapada (法句經) Udāna (偈陀那) Itivuttaka (伊帝目諦迦) Sutta-Nipāta (須多尼波多) Vimānavatthu (毘摩那事) Petavatthu (卑多事) Theragāthā (涕羅偈陀) Therīgāthā (涕利偈陀) Jātaka (本生) Niddesa (尼提舍)或 Mahānidāsa (大尼提舍) Paṭisambhidāmagga (波致參毘陀道) Apadāna (阿波陀那) Buddhavaṃsa (佛種姓經) Cariyāpīṭaka (若用藏)を含む。Saddhamma-Saṅgaha (正法集)二七頁を見よ、チルダーズ辭書五〇七頁參照

(五)王舍城結集の信すべきことはロツクヒルの主張する所である、Life of the Buddha (佛陀傳)前付七頁、ミナエフの佛教の研究二篇三篇參照

(六)之はまたワシリーフの意見である、Der Buddhismus (佛教論)一七頁、教理文學最初の發端に就いてはオルデンベルヒ序文二四頁參照

(七)S. d'Oldenburg 一八九三年 JRAS (王立亞細亞協會誌)三〇一—三五六頁、Hultzsch の DMG (獨逸東洋協會雜誌)四〇及 Indian Antiquary (印度古物家)二一の二二五頁以下、ビニーハ

緒

論

聖

經

Votive inscriptions from the Sanchi Stūpas (サーンチ諸塔より得たる祈願銘文)(Epigraphia Indica (印度刻文研究)二の八七頁)、『The inscriptions on the Sanchi Stūpas (サーンチ諸塔の銘文)』W. Z. (維那東洋學術雜誌)七の二九一頁、On the origin of the Indian Brahma Alphabet (印度婆羅門字母の起源に就いて)一七頁、A. St. John の On the Sāma-Jātaka (サーマ本生物語に就いて)一八九四年王立亞細亞協會誌二一頁、Mahāvastu (大事經)二の二一〇頁の The N. version titled Sāmaka-Jāt. (シヤーマカ本生物語と名くる北傳)等を見よ。巴利傳と比較して バルハト本生物語の齟齬の點に就いてはミナエフの佛教の研究一篇一四〇頁以下を見よ

(八)例之 Assalayana-Sutta (一八八〇年ピツセル刊行)、此經の中には印度の階級制と希臘人に階級制のなきことを比較してあるから、之は西紀前三世紀以前に編集されし筈はあるまい、併し他の經は更に古いかも知れない

(九)引用同書一七頁

(一〇)參照 Barth の Bulletin des Religion de l'Inde (印度諸宗教告示)一八九三年—九四年一頁(分冊)

(一一)チルダーズ nikāyo の條を見よ

(一一)七論より成る Dhammasaṅgani (法僧伽) Vihāṅga (毘崩伽) Dhātukathā (陀兜迦他) Puṅgalapaṇḍitī (遍伽羅拏那抵) Kathāvatthu (迦他跋踰) Yamaka (耶摩迦) Paṭṭhāna (鉢叉) 是れ、全部を概説せるものは Abhidhammattha-Saṅgaha (阿毘曇義集)で一八八四年の JPTS (巴利原典刊行會誌) 上リスズビツ教授によりて刊行された

(一二)モリス刊行遍伽羅拏那抵序文中同人の語、前付八頁

(一四)例之 Divyāvadāna 一八頁一三三頁、ビュルヌーフ緒論四八頁三一七頁を見よ、ロツク

ヒル佛陀傳一六〇頁參照

(一五)引用同書前付三四頁

(一六)Tripiṭaka(三藏)と云ふ語は之を大乘教典を含めたものに當てはめると本當は誤稱である。Mahāvīryapāṭi(翻譯名義大集)六五節では三藏及其細分は正しく大乘の聖典書類とは區別してあり、大乘聖典の表題は擧げてある。大乘家は三藏を否認せず、之を承認した、三藏の大家自身の聖典に對する關係は舊約全書の新約全書に對すると稍々似て居る

(一七)The Asiatic Reviews (亞細亞評論) 二〇號 Osoma Körösi 特に四五頁以下による。JA SB(ツムホーン亞細亞協會誌)の一〇一六頁及 Huth の Die Tibetische Version der Nāhsargika-

prāyaścittikadharmas (尼薩耆波逸提法の西藏傳)一八九一年參照

(一八)序文前付四七頁

(一九)ツムホーン亞細亞協會誌一の二一六頁參照、西藏 Dulva (律藏)の區分は Vinayavastu (毘奈耶事) Prātimokṣa-sūtra (波羅提木叉經) Vinayavibhāṅga (毘奈耶毘崩伽) Vinayakṣudraka (小毘奈耶事)及 Vinayotataraṅgaha (毘奈耶上書)である。翻譯名義大集六五節參照

(二〇)Dīpaṅśa (島史)五の三二以下。Bodhivaṅśa (菩提樹史)九六頁

(二二)大事經(セナー刊行)一卷二頁

(二三)本書の一部即ち Avalokita-Sūtra (所觀經)は疑ひもなく經である、然るに之は二の三九七頁中に波利婆羅即ち附録と名けてある

(二四)之は西藏の律にも當てはまる、但併し西藏律は單に教團の規則を記することにのみは携らず本生・記荊・經及自説の多數を含んでから、其性質は大事經の其に近い。ロツクヒル佛陀傳前付六頁參照

(二四)セナー大事經一卷序文三頁、ビール Romantic Legend(釋迦佛傳奇物語)前付五頁、ワ

シリーズ佛敎論一一四頁

(二五) 稱名は「唵過去未來現在の聖大佛一切諸佛に皈命す」と之である。同時代の佛の諸方に多數ありと云ふ理論は Kathāvaththippakaraṇaṭṭhakathā (迦他跋論註書) 二一の六によれば大衆部諸宗派には普通である、隨て原始時代から佛教に屬せぬとしても此思想は古い

(二六) ジュリアン 譯玄奘傳記一卷一五八頁三卷三七頁

(二七) 緒論三八頁

(二八) ベンゴール亞細亞協會誌一の三八四頁

(二九) 長阿含說者の阿波陀那を聖典中に入れなかつたことは真である(チルダーズ nikāyoの條を見よ)、併し阿波陀那の律に編入されたに就いては何等の疑ひもない。エドワードミュレルの Les Apudanas du Sud(南方の阿波陀那)第一〇東洋學會報告一卷一六五頁參照

(三〇) 全部は四阿含即ち長中增一及雜阿含に分れて居る。ワシリーフ佛教論一一五頁。ターラナータ四二頁に記せる Kasūriyāna の Khundaka-Nikāya と對の物であるか否かは未決のままに置かねばならない

(三一) ロックヒル一二三頁以下

(三二) ワシリーフ佛教論一〇七頁、ビュルヌーフ緒論四四七頁、ターラナータ二九六頁、翻

緒

論

聖

經

譯名義大集六五節。書の表題及著作者と見做されて居る人は

一 發智論(Jhāna-prasthāna) 迦旃延又迦多衍尼子(Katyāyana 或 Katyāyaniputra)作

巴利 Paṭhāna 比較

二 法蘊足論(Dharmasāṅgaha) 舍利弗(Sāriputra)作 巴利 Dhammasaṅgāṭi 比較

三 界身足論(Dhātukāya) 富樓那(Purṇa)又世友(Vasumitra)作 巴利 Dhātukathā

比較

四 施設足論(Prajñāpatisūtra) 目犍連(Maudgalyāyana)作 ワシリーフでは Gosīha(牛

舍)の Amṛtasūtra(不滅論) 巴利 Puggalapaññatti 比較

五 識身足論(Vijñānakāya) 提婆設摩(Devakṣema 或 Devāsarman)作

六 集異門足論(Saṅgītiparyāya) 舍利弗或拘絺羅(Kauśhīla)作

七 品類足論(Pṛkuraṅgapāla) 世友作

最後の三書は巴利の Vibhaṅga, Kathāvatthu 及 Yamaka と對のものであるかも知れず又さうでないかも知らぬ、之等の中或書は玄奘も亦記せる所である、玄奘傳記一卷一〇二頁一〇九頁一二三頁、二卷一一九頁二〇一頁二九二頁

- (三三)ビュルヌーフ緒論一〇三頁
 (三四)ビュルヌーフ緒論一一六頁以下
 (三五)之等經典の表題は翻譯名義大集六五節に出してある、此中少數のものが出版された、ワシリーフの佛教論一四五頁以下参照。或表題はまた九種 Dharmas の表中に出て居る、Dharmas とはホゼンンに取りては Dhammaprayāyas の略語である、論文集一三頁四九頁参照、Pajendralāla Mitra の The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal (尼波爾の佛教梵文學)(一八八二年)、一八七五年の王立亞細亞協會誌上カウエル及エゲリングのホゼンン集目録、バンドールのケンブリッジ集目録参照

(三六)マクスミュレル及南條博士刊行 *Sukhāvati-Vyūha* (極樂莊嚴經)前付四頁、他書翻譯の年代はビールの佛教三藏及南條博士支那譯三藏目録中諸所に出してある

(三七)更に詳しい物語はビュルヌーフの緒論五四一頁、ワシリーフ佛教論二四二頁一七七頁以下を見よ

(三八)東方聖書二二卷緒論二二頁を見よ

(三九)ビュルヌーフの緒論五二二—五七四頁、ワシリーフ佛教論一四四頁一八四頁以下、ワ

ツデル *Buddhism of Tibet* (西藏の佛教)一二九頁以下、幾多の密教の書はカウエル、エゲリングのホゼンン集目録中に入れてある、ビュルヌーフ同所、ホゼンン論文集三八頁三九頁参照、濕婆教的密教の尼波爾祕密佛教に及ぼせる影響に就いては Barth 印度の宗教二〇一頁を見よ

(四〇)既に上一七頁中に指示した S. d'Oldenburg の貴重なる論文 *On the Buddhist Jātakas* (佛教本生物語に就いて)——之は元と露語で一八九二年の *Napiski* (露西亞帝國考古學會東部報告)に出たのを一八九三年の王立亞細亞協會誌三〇一頁以下に譯載——に本生物語に關する著書の解題目録が澤山加へてある、バドラカルバーヴダーナ及本生鬘に關する同著者の他の露語の論文は *Buddhist Legends* (佛教古譚一八九四年)及 *Remarks on Buddhist Art* (佛教藝術略評一八九五年)である

(四一)諸定義は *Sumatgala-Vilasini* (長阿含註)一卷二三頁以下に出て居る、チルダーズ同項目及同處に引用せる著者を見よ

(四二)梵文妙法蓮華二品四五偈四四偈参照

(四三)ワシリーフ佛教論一〇九頁、梵文法集名數經六二及註、ホゼンン論文集一四頁、ビュルヌーフ緒論五一頁以下、*Iryukta* の項目は四十二品より成れる經文によりて表はされて居る

(ピール)の目録一八八頁)、此經文は其第九品と Itivuttaka 第百品との間の如く事實上の一致は少いが共通の特質を有つて居る

(四四)ラッセンは既に正當に陳述した、Indische Altertumskunde (印度考古學)二卷四八八頁(四五)此問題は十分オルデンベルヒに討議されて居る、同書四七頁以下。されど Westergaard の Ueber den ältesten Zeitraum der Indischen Geschichte (印度歴史の最古時代に就いて)八七頁及 E. Kuhn の Beiträge zur Pāṭiśāstratik (巴利文典附録)七頁、此處では今一つ憶説を提出してある、摩揭陀語及巴利語に共有なる語 palibodha は阿輸迦王勅令第五の Girnar 文では palibodha に代へられて居ると云ふ明白なる事實は巴利語の故土は西部印度には求むべきに非ることを證するに足る

(四六)レング譯法顯傳一一頁、オルデンベルヒ教授の抱ける疑惑は(大品前付四三頁)明かに上座部は本島に於ける唯一の佛教宗派であると云ふ假定に基けるものである

第二章 聖典附屬の文學・古譚的半史的事件を

記せる書・宗教詩

聖經の註解・概説・論説等の形をなせる附屬文學を生み出したのは自然のことである。この種の文學の量は南北雙方共なく莫大のものであるから茲では唯最も著名なる作物中數者を論評し得るのみである。

南方より始むれば吾人は先づ『アッタカター』(Attakatha)を有する、之は三藏諸部の註書の一組である。錫蘭傳説によれば『アッタカター』は第一結集で定められ、次の兩結集では復誦され、摩晒陀(Mahendra)は聖典と共に之を錫蘭に傳持し、且つ錫蘭語に譯した、但し西紀前一世紀の無畏王ワッタガミニ(Abhaya Vatagāmini)の治世中初めて之を書寫し西紀四百二十年頃佛音(Buddhaghosa)は之を巴利語に復譯した。斯う云ふ記事は教理上の作話と眞理とを混淆したものであることは容易く之を見ることが出来る。併し西紀三百年頃『島史』(Dīpavamsa)を書いた時『アッタカター』と云ふ名目の下で半宗教的性質の註書を集めたもの、存在したと云ふ是丈は十分確かになつて居る。されど吾人はその諸部分の關係年代に就いては尙暗黒中に居

る、而して吾人は西紀三百年以後佛音か他のものか加へたり變へたりしたのを看分けるに足る程の論材を有たない。『大統史』(Mahāvamsa)に據れば佛音は『アッタカター』全部を翻譯したと云つてあるが、この中の語は十分確定せる或事實と矛盾する。『勝義燈』(Paramatthadīpani)と稱する『涕羅偈陀』(Therīgāthā)及び『涕利偈陀』(Therīgāthā)の註書及び或他の註書は佛音の作でなくして建志城(Kāncīpura)の護法(Dharmapāla)の作である。更に又佛音のその『善見律毘婆沙』(Samanta-Pāsādikā)中に名を擧げて『島史』を引用してゐることも注意しなければならぬ。『アッタカター』はこの史書よりも古いことは明白であるから佛音の作は唯の翻譯であつた筈はない、或は佛音は之等の引用文をその原本中に看出したに相違ない、而して若し左様だと『アッタカター』の或部分は『島史』よりも後に出來たに違ひない。

錫蘭物語の絶對的に眞なるや否やに就いては幾らか疑あるにも拘らず、聖典書類の重なる巴利註書及び佛教々條百科全書の一『淨道論』(Vissuddhimagga)も佛音の作としてある、之は信じて好からう。佛教神學及び宇宙論の小百科書」として特書してある一書は『サーラサンガハ』(Sarasāṅgaha)である。『迦他跋論』(Kathāvatthu)の註書は諸宗の教理に關する多くのことを含んで居る。

彌蘭陀王 (Milinda) と佛教聖者那伽犀那 (Nāgasena) との間の談話の體裁を爲せる教理論は『彌蘭陀問經』(Milindapañhā) と名くる書である。⁽¹⁰⁾ この書の年代及び源泉は確かには分つて居ない、併し種々の理由から推すとこの書は基督紀元の初めよりも後に出來たに相違ない、而して中に聖典より引ける引用文は總て巴利聖典から來て居るが、この書は印度の北部で作られたに違ひない。

概説書の部類に屬し多少僞分子を交へた作で更に古く出來たものから引いて來た反覆文を含んでゐるものは『アナータワラ』(Anāgata-vāṇisa) 即ち未來諸佛の歴史、『サツダムマサンガハ』(Saddhamma-saṅgaha) 及び錫蘭語の原本を譯したる『マハーボーヂワラ』(Mahābhōjivāṇisa) である。同じ言は百三條の物語を集めた『ラサワーヒニー』(Rasavāhinī)、『ダーターワラ』(Dātāvāṇisa) 及び『チャケーサダーツワラ』(Chakkesadhāvāṇisa) にも當てはまる。教會條例の概説書中多く用ひらるゝ『羯磨儀軌』(Kammavācā) である、而して史書『島史』、『大統史』及び『サーサナワラ』(Sāsana-vāṇisa) は共に錫蘭佛教會史に取り極めて重要なものであるから、特別の注意を拂ふべき價がある。巴利書類及び著者に就いての趣味ある評論は『ガンダワラ』(Gandhāvāṇisa) に載せてある。

佛を讚歎した詩中に吾人は『パツヂヤマツ』(Pajjamaṭṭh)を有する。今一つ教訓的性質の宗教詩は『サツダムモーバーヤナ』(Saddhammapyaṇa)である。

言語學的研究・文典・辭典及び文法論等を目的とせる作は茲では黙過し去る。

佛教北方學派の文學上の活動は上座部の其に劣ることはなかつた。併し古い原典は全く滅びたか、さもなければ唯譯書として存したか、或は大に面目を改めて吾々に傳はつたかである。殘存せる註書及び論の中で、一番古いのも迦膩色迦の下に行はれた結集の後に出來た、而してこの際纂集された經律論の註書に關して玄奘の吾人に語る所は總て物語的第一結集に關する普通一般佛教傳説の反響に過ぎない。論藏の註書『毘婆沙』(Vibhāṣā)は大凡この時代に起源する、何れにしてもこの書は世親の『阿毘達磨俱舍論』よりも前である、而して世親は基督紀元第六世紀に出世せる人で多くの他の大乘經典の註書を書ける人である。『俱舍論』は亦多くの著者に註を加へられた。『瑜伽論』(Yogaśāstra)即ち『瑜伽師地論』(Yogācāryabhūmi-śāstra)は哲學的性質の他の書と共に無著(Asaṅga)の作としてある。陳那(Dignāga)は論理の書『集量論』(Pramāṇa-samuccaya)を書いた。多少論争的性質のもので之等と同類の書は澤山ある、併し吾人のその内容を攻査することの出來ぬ限りは之を列擧するは用少きことである、その著者に關しては不合

理な傳説があつて吾人のこの問題に深入するを控へざるを得ざらしむる故、之は尙更のことである。或名高き人等やその作は吾人後に至り第五編に於て之に言及するの機會を得るであらう。

北方佛教家は敬虔的又教訓的文學とでも類別し得べき諸種の文學の上にて優勢を示して居る。されば彼等は聖典學又は聖者傳より取れる問題を趣味深く復説した故、彼等の文學的作品には高い位地を與ふべきものも少くない。馬鳴の『佛所行讚』(Buddhacarita)聖勇(Ārya-Sūtra)の『本生鬘』(Jātakamālā)クセーメンドラ(Kṣemendra)の『アワダーナ、カルバラター』(Avadāna-kalpata)の如きは總ての點に於て尊い作である。『ヂツヤローワダーナ』(Divyāvadāna)の名の下に知れて居るのは物語的半史的教説を集めたもので、言語及び文體は左程精鍊されて居ないが、等しく亦人心を惹くものである。この貴重なる集編は迦膩色迦以後の時代で現今の形に作られたに相違ない、何故と云へば『ディーナーラ』(Dināra)と云ふ語は印度の貨幣の名としてこの中に幾度も出してある。『バドラカルバーワダーナ』(Bhadrakalpāvadāna)及び『アワダーナサタカ』(Avadāna-Sataka)と稱する物語書は唯拔萃又は翻譯から知られてゐるのみ。

是まで世に公にされた模範的宗教詩は中世梵文學隆盛時代の產物たる徵象を帯びて居る。寂

天(Sāntideva)の『菩提行經』(Bodhicaryāvatāra)は眞實敬虔なる精神を表示せる詩で、第一に位すべきものである。形の上では殆んど之と同じく優雅であるが、創意と暖かき感情とを全然缺乏せるものは文法家月護(Candragomin)の詩書『シツシヤレーカ』(Sisyaleka)である。釋獅・觀世音等の讚歌は唯目錄又は折々出る引用文から知られ居るのみ。

- (一) 印度局圖書館の巴利聖典及其註書の寫本は一八八二年の巴利原典刊行會誌(五九―八五頁)にオルデンベルヒ之を書き載せ、The Bibliothèque Nationaleの集本の目錄は同誌三二―三七頁にフェール之を發表した、同誌同號に出せる Frankfurter 並に L. de Zoysa の目錄、Frankfurter の Handbook (手引書)前付一五―一八頁にて原本の解題、一九頁にて譯書の解題を見よ
- (二) チャルダズに列擧せる表題は *Atthakathā* の條下を見よ、正法集五六頁、ミナエフの佛敎の研究一篇二五八頁 *Gandhavarisa* より取る
- (三) 島史二〇の二〇、大統史二〇五頁以下、長阿含註一卷二頁、正法集五二頁以下、スベンスハーデーの *Eastern Monachism* (東方寺院組織)一七一頁、*Manual of Buddhism* (佛敎概論)五〇九頁以下參照

- (四) エドワードミユレル刊行の勝義燈序文及上に引ける典據參照
- (五) ハーデー佛敎概論五一―二頁參照、カーベントターの作れる内容の拔萃は一八九〇年の巴利原典刊行會誌及第九東洋學會報告一の三九二頁 A. C. Warren 參照
- (六) K. E. Neumann の *Das Sārasaṅgha ertes Kapitel* (サーラサンガハ第一章)の原本及譯本(ライプツヒ一八九一年)六頁を見よ
- (七) *Kathāvatthupakkaraṇaṭṭhakathā* 一八八九年の巴利原典刊行會誌上ミナエフ刊行
- (八) *Milinda* は Menandros と同一人と思はれて居る、其梵語形は Ksemendra のアヴデーナカルバラター第五七、一五偈中の *Milinda* である、ターラナータ二三頁の *Minara* も此名の異形らしいでもない
- (九) Trenkner 刊行(一八八〇年)、東方聖書三五卷(一八九〇年)にてリスデビツ翻譯
- (一〇) 此問題はリスデビツによつて其譯本の序文中に討議されて居る、此書の兩支那譯に就いては E. Specht 及 B. Lévi を見よ、第九東洋學會報告一卷五一―五二九頁
- (一一) 一八八六年の巴利原典刊行會誌上ミナエフ刊行
- (一二) ストロング刊行書の序文八頁を見よ、同處に著者及年代の問題を論じてある

(一三)初めの四話は *Anecdota Palica* 中に *Spiegel* の刊行する所である(一八四五年)、残りは一八八九年の獨逸東洋協會雜誌二九七頁以下にて *Konow* 之を刊行し、第七章は *Pavolini* 之を刊行す(一八九四年)

(一四)一八八四年の巴利原典刊行會誌上リスデビツ刊行及 *M. C. Swamy* 刊行(倫敦一八七四年)

(一五)一八八五年の巴利原典刊行會誌上ミナエフ刊行

(一六)ナルダーズ同條を見よ

(一七)一八八六年の巴利原典刊行會誌上ミナエフ刊行、同人佛教の研究一篇二五七頁參照

(一八)一八八七年の巴利原典刊行會誌上 *Goonaratne* 刊行

(一九)一八八七年の巴利原典刊行會誌上モリス刊行

(二〇)有益なる解題目錄一八八三年に至るまでの分はフランクフルテルの手引書前付二〇頁二二頁中に出してある、錫蘭語の或貴重なる著作物の簡短なる記事はハーデーの佛教概論五一八頁を見よ、若干の巴利註書論說其他のものは正法集一章及ガンダヴァンサ中に列擧してある

(二二)玄奘傳記二卷一七二頁

(二三)ワシリーフ佛教論二一〇頁二二五頁二二二頁。玄奘傳記二卷一一五頁二卷二七四頁。

ターラナータ諸所散出。マクスミュレル印度誌三〇二頁三〇八頁以下參照

(二四)玄奘傳記一卷一一四頁一一八頁。玄奘の阿毘達磨俱舍論をも無著の作とするは奇である、之は多分ターラナーター一二二頁の *Abhidharmasamuccaya* (阿毘達磨集論)と同一物である(二四)名ある中世學究的作者に就いて是以上の評論はワシリーフ佛教論二〇〇―二二二頁にある。西藏集中の註書は *Osoma Kōrosi* の亞細亞研究二〇の四〇〇頁以下を見よ―此大綱中に參考すべき辭書及之に類する書は茲に特記すべき要がない

(二五)カウエル刊行。支那譯は東方聖書一九卷ピールを見よ。第一品は一八九二年の *Journal Asiatique*(亞細亞雜誌)上佛語譯と併せて *S. Lévi* 刊行。參照 *A. Barth* の *Bulletin des Religions de l'Inde* (印度諸宗教告示)(一八九四年)分冊一六頁、*Leumann* の維那東洋學術雜誌八の一九三頁 *Some Notes on Agyaghosa's Buddhacarita* (馬鳴の佛所行讚の註數條)

(二六)一八九四年のザビスキの *Oldenburg* を見よ、アヴターナサタカはフェールの一八七九年の亞細亞雜誌上 *Le livre des Cent Légendes* (百喻話書)ミューゼギマー年報一八號中其譯

文参照。支那語にて之と同じ集め物は *Contes et Apologues Indiens* (印度の物語及寓話)(一八六〇年)である、ジュリアンは是から一見本を發表した

(二七)ザビスキ一五卷一五六—二二五頁にてミナエフ刊行、一部分は一八九二年のミューゼオン誌にて I. de la Vallée Poussin 佛譯。同時代の印度教的情緒の影響を指示するものとして注意の價あるは二節八偈中に見る左の如き文句である

「我は諸上士を護念す、信心を以て我は汝等の奴僕とならん」

A. Barth の印度諸宗教告示分冊二〇頁参照

(二八)ザビスキ四卷二九—五二頁、貴重なる序文を附してミナエフ刊行 *Wenhsa* は西藏原文を加へた

(二九)例之、カウエル、エグリングの目録二九—三二號の如き。ビュルヌーフ緒論五五七頁参照。觀世音祈禱文の雛形はザビスキ二卷一三〇頁、佛の祈禱文は二三三頁、共にミナエフ出版、後者は Harsadeva 王の作としてある

第三章 佛教興起の年代・當時の印度思想及び理想

印度年代記の不定の状態にある爲め、吾人は佛涅槃の正しい年代を十分確實に定むることは出来ない、併し吾人は佛教の興起は大凡ウパニシャッド(Upanisad)時代の終末と一致することを斷言して宜しい。佛教々理そのものから推せば吠檀多(Vedānta)の學理は——『婆羅門經』(Brahmaṇa-Sūtra)の煩瑣的形式の上で、はないが——十分なる發展を遂げて居たことは明白である。瑜伽の實行は教義上吠檀多の一部ではないが、吠檀多家には別段排斥否認さるゝことなく、而して之は佛教時代でも後日『瑜伽經』と稱する概説書を著した鉢顛闍梨(Patañjali)の時と殆んど同じく發達して居た。業説輪廻説の既に深く通俗の道念に根ざして居たことは、この立場が靈魂の存在を全然否定する佛教心理學と極々明白に衝突するにも拘らず、佛教は之を保留した程であつた。

佛教興起の時代、より眞面目なる印度人の抱いて居たやうな精靈的渴望及び人生觀は一見した所では極めて暗澹たるものであつた。最も多く吾人を感じしむるものは、力を込めて云つてある人生老死の恐怖——佛教家の好んで呼ぶ通り——である、永久の回生、隨つて災禍の反覆

の信仰によつて厚くせる恐怖心である。當時のサドカイ教徒を除き、有ゆる宗派は人生は重荷である、純然たる害悪であると云ふ説に一致した。されば總て人は世間的存在再生輪廻から離れんと努力する。總て人は再生を逃るべき手段あること、解脱の道あること、その道は生得の無智に勝ち至高の真理を獲得する上に存在することを信じて居る。併し至高の真理とは何ぞや。茲で意見は區々になる。或一派吠檀多の如きは真理とはその最上(三)の意味では至高精神即ち最上我(Paramānman)と個體精神即ち個人我(Patyagātman)命我(Jivatman)との本質的合一であると主張する。他の一派數論家(Sāṅkhya)の如きは精神は本質的に物質とは違つて居り、本質的には穢れなく且つ永久的に残留するものであるが、物質の爲めに阻害されると説く。精神のやうなものは何物も存在せずと否定する佛教は勿論最上我の概念を排斥し四聖諦(Aryasatyāni)の公式の上に至高の真理を見るのである。

吠檀多及び佛教の神祕的超越的組織の上でも合理的數論(Sāṅkhya)瑜伽(Yoga)及び尼夜耶(Nyāya)の上でも印度人の人生に對する見解は厭世的と思はるゝこと稀でない。印度人は唯何分か厭世的だと云ふのだから、この評の眞なるには限りがある。その劇の上で最後の局面が若し幸福な局面であれば、彼等は極く悲劇の局面でも敢て反對はせぬと同じく、彼等は人生に於

ける有ゆる類の慘事を是認する、併し同時に彼等は生存再生と稱する害事を免るゝことを得——而も比較的容易い手段で——と信する、彼等は解脱の道の確實な師中その人に師事して居れば足る、斯る師は印度では乏しいことはない。而してまた供給は需要に比例すと云ふ法則も之に當てはまる。

- ~~~~~
- (一) 佛教年代に關する難解の問題は後第五編に至つて論ずべし
 - (二) 長阿含一卷三四頁、逼伽羅扮那抵三八頁、之に就いては結末に至り更に云ふとあるべし
 - (三) 吾人は「眞實の眞理」と云ふ語を用ふることを避けた、と云ふのは大抵の印度の宗派に取つては眞實と云ふものは唯相對的實行的眞理たるのみで、更に幻影的現象 *Māyā* に變じ行くべきものであつて、至高の意味に於ける眞理 *sat(有)* to *śūnya(有中有)* の反對であるから
 - (四) 此場合に必要のないウバニシャッド及數論に關する更に細いことは吾人讀者の *Pathi* の印度諸宗教六四—八六頁中の説明の參考を望む。参照オルデンベルヒ一八九五年十一月の獨逸評論に於ける「吠陀の宗教及佛教」、Jacobiの「佛教の起源」(ゲツチンゲン學術報告一八九六年)

第二編 佛 傳

三八

佛傳聖典の中から拙き出されるやうな佛陀の傳記は奇怪不思議なもので、佛教圏外に立てるものは何人と雖も多少その真正を否まざるを得ない程である。不信者中の少數者はこの傳記の中には古代神話の作り替へがあると思ふ程まで進んで居るが、それほど根本的でない他の不信者はその奇怪にして神話的なる分子より成れる物語を剝いたら中に實傳的核子を看出すことが出来やうと云ふ意見を抱いて居る。彼等は批評的小細工を行ればそれで以てひどく原物に似た形像を作り出し得と信する傾きがある。批評的攻考の價値を否認することもなく、尙又傳説的史傳を色々と改作せるものに對し、その理非に論及することもなくて、以下吾々は至上尊の行狀中主要なる事實を簡約に説明するに止めねばならない、至上尊(The Sublime Being)は總て佛教徒たるものゝその主薄伽梵(Bhagavat)(有福者)且つは有ゆる法の本源と認め敬ぶもので、自ら宣ふ所によればその佛陀となられる前數萬世の間慈悲の情よりして有情を生有の苦患から救出さんとせられたものである。かゝる佛陀の傳記は理想的意義の上から眞實であると云うて宜しからう。或程度までは吾々はスペンスハーデー(Spence Hardy)の「吾々は傳承せる傳説中

の古語で満足せねばならぬ」と云ふに同意するが、彼が之に附言して「累代そが積集した有ゆる蓄積物で……」と云ふには和することが出来ない。何故と云ふにこの蓄積物と思はれて居るのは聖典の中に存するものでその聖典たるや涅槃(Nirvāṇa)の時期とは幾世と云ふ程隔つては居ないからである。

三九

第一章 下天・托胎・降生・幼年期・青年期

前生で三十波羅蜜を行じて後一切智の佛陀たるべき運に達したる菩薩 (Bodhisattva) は兜率天 (Tusita) 上に出生せられた。茲に諸天神の人類を濟度せんことを勸請するに對して承認を與ふる前菩薩は五種の必要なる詮索を行はれた、即ち(一)その出現の時機に就いて(二)州に就いて(三)國に就いて(四)種族及び家族に就いて(五)己れを産むべき母及びその母の壽命の果つべき時に就いてと。菩薩は適當な時機が來て居ること、諸佛は閻浮提州 (Jambudvīpa) 中部國 (Ma-

dhyaśśa) に生るゝこと、諸佛は婆羅門 (Brahmana) ・刹帝利 (Kṣatriya) 二族の一に生れ出ることを見られ、二族中刹帝利が勝れて居るので菩薩は迦毘羅衛城 (Kapilavastu) なる釋迦族 (The Śākya Clan) の王淨飯王 (Suddhodana) の兒たることに決せられ、最後に妃摩訶摩耶 (Mahāmāyā) はその母たるべく而してその降生後七日にして母妃は沒せられるべきことを見られた。菩薩は帝釋天 (Indra) の樂士歡喜園 (Nandanavana) を去つて摩訶摩耶の胎に托せられた。

迦毘羅衛城の阿沙荼月 (Asāḍha) 祭禮の最終の日に摩耶妃は夢に、一白象の形をなして黄金山の上に徘徊しつゝあつた菩薩の北面から來つて己れに近づきその胎に入つた……やうに……思

佛

傳

はれた。斯くて菩薩は托胎せられたのである。

翌朝妃が國王にその夢の事を語られると國王は夢を判斷する婆羅門等を喚ばれた。彼等は妃の胎には將來輪王 (Cakravartin, a Universal Monarch) 若くは佛陀となるべき一子の宿れることを申述べた。

懷胎の間四大天王 (Cātummahārājikā, the Four Great Kings) は菩薩及びその母に總て障害なきやうに保護を加へた。分娩の時期近くや妃は天臂城 (Devahraḍa, Devadaha) なるその兩親を訪はんことを望まれた。藍毘尼園 (Jumbhivana) に達せられると妃はその林園に入りたき心を起された。神さびたる一本の沙羅樹 (Śalavṛkṣa) を見てその一枝を捉へんと手を延ばされると枝は自ら下に垂れた。妃の之を捉へて立つて居らるゝ中太子は誕生せられた。四天王は太子を受取りその手から人間へと渡した、然るに太子はその手から下りて地上に直立し四方を見渡して七歩進みたる後勢よく聲を揚げて「我れは世界の第一者なり」と叫ばれた。一同は太子を迦毘羅衛城へと御連れ申した。

菩薩と同じ日に羅睺羅 (Rāhula) の母耶輸陀羅 (Yasodharā) ・車匿 (Chanda, Channa) ・迦留陀夷 (Kaludāyin, Kalodayin, Udayin) ・健陟馬 (Kanthaka, Kaṅṭhaka) 及び阿難陀 (Ānanda) も生れ、同時

に菩提樹(Bodhi-tree)及び四箇の寶瓶が生じた。

北傳では同時に頻毘沙羅(Bimbisara)・波斯匿(Pasenjit)・波羅殊提(Pradyota)及び優陀延那(Udayana)の四王出生したと云ふ、之等は皆佛傳中に現はれる王達である。

菩薩の降誕は三十三天界に大歡喜を惹起した。仙士迦羅(Kala)〔又阿私陀(Asita)とも云ふ〕提婆羅(Devala)偶まこの歡喜の狀を見てその故を問ひ慶事のあつたことを聞いて淨飯王の所に往き太子を一目致したき由を申述べた。太子を連出すと太子は提婆羅を拜せずしてその脚を仙士の結鬘の上に置かれた。仙士は座を起ちて恭しく太子に稽首し國王も亦之に倣うてその兒の前に拜伏された。大仙は未來を豫見して太子は後日佛陀となられるであらう。して己れはそれ以前に没するであらうと知つた。彼は爲めに心を痛めて泣いた。自ら享くる能はざる幸福をその親族の一人に享けせんが爲め、その甥なる那羅迦(Nalaka)の所に往つて淨飯王の宮に太子が誕生せられたが太子は三十五歳にして佛陀となられるであらう故、彼に出家をせよと勧めた。それで那羅迦は沙門(Samana)の生活に入りその後大師の消息を聞いて來つて教團に入り阿羅漢果を成じて遂に涅槃に入った。

誕生後五日にして太子に悉達多(Middhattha)と云ふ名を命じた。その式に參列した諸婆羅門

佛

傳

の中八名の名高き占相者が居たので國王はその兒の將來の運を卜せんことを請はれた。七人は太子が輪王となられるや佛陀となられるや之を判知することが出来なんだ。獨り第八の年若き僑陳如(Kaṇḍiyya)のみは兩者中後者こそ實とならんと豫言した。この僑陳如は後五群の衆(Paṅcavargiya, Bhadravargiya)の一人として誓願を立てたる彼の僑陳如である。

國王はその兒の世を捨つるを防がんと心を勞し太子を動かして世間の快樂を通れしむるは何物ぞと問はれた。答へは老人・病者・死屍及び出家と云ふ四種の凶相とあつた。王はやがて出來得る丈の注意を拂つて之等の相の何れも太子の眼に留まらないやうにせられた。

太子は美しき供人等に傳かれその姨母にして繼母たる波闍波提僑曇彌(Prajāpati Gautami)より特別の看護を受けて成長せられた。或日國王は耕田式に出られたことのあるが守人等は太子を野に御連れ申し一閻浮樹(Jambhūtika)の蔭に臥榻を設けた。黄金の犂を把れる國王の様子に心惹かれて守人等は獨り菩薩を置去りにした、すると菩薩はその唯一人なることを見て起つて結跏趺坐し第一に入られた。他の樹の蔭は總て廻つたがこの閻浮樹の蔭のみは變ることがなかつた。守人等還つてこの二種の奇瑞を見之を國王に白した。國王は大急ぎにやつて來られてその兒に平伏し「兒よ、之は我が汝に對する第二の禮拜なり」と云はれた。

(二五) 北方所傳には太子初めて學校へ行かれその不思議なる才能を以てその師毘舍密多羅 (Vishā-mitra) を惱まされたと言ふ談がある。

十六歳に達するや太子は善覺 (Suprabuddha) の女兒にして己れの從妹に當る耶輸陀羅と婚せられた。

青年の頃菩薩は色々勇ましい藝を仕上げられたものである。太子は無雙の射手にて強力あり且つ有ゆる技術に達して居られた。總て勝負事には釋迦族中の第一で提婆達多 (Devadatta) の如きも釋迦族の一人であつたがその自負心強き胸中にはこの當時既に猜忌の種子が蒔かれて居たのである。

(一) 佛教概論一三九頁

(二) 聖典中連絡ある佛の傳記のやうなものは何もない、Lalitā-Vistara (梵文普曜經) は誤つて斯う云ふものと思はれて居るが、其實菩薩の地上に降つてから魔王と勇ましく戦ひ之に勝つた後、正法國土を宣言するに至るまで、其の英雄的經歷の物語である。之は菩薩を詠する叙事詩の性質を有つて居る。之と同様のことはビールの東方聖書一九卷前付一六頁以下に列挙する支

那の原典にも當てはまる。馬鳴の佛所行讚の本當の部分は普曜經と殆んど同延である。吾人の知れる傳記で完備せるものは聖典物語を編輯したものであるが作文としては比較的新しい、ピガンデーの瞿曇佛傳物語の根本巴利典據、錫蘭語の Pāṭāliya Ratnadharmarāja の西藏佛傳 (シーフネル抄譯)、ロツクヒルの Bkahl-Heyur (三藏) 及 Bstun-Heyur (註釋) より取れる佛傳傳、Bhadra-kalpāvadāna 等皆其通り

(三) 以下の話は主に本生物語序品 (一八八〇年リスデビツ、一八九五年 Chalmers 譯) 一の四七頁以下に基けるものである。比較の爲めに参照を與ふるは普曜經、大事經一卷一四二頁以下及一九七頁以下、二卷一頁以下、ハーデー佛教概論一四〇頁以下、ピガンデー一卷二〇頁以下、ロツクヒル佛傳傳一四頁以下及他の諸出所である

(四) 兜率天に住み兜率天を降りしことを證言せしものは佛自身である、増一阿含二卷一三〇頁、而して Chalmers によれば中阿含の第一二三 Achariyabhūta-Sutta (未曾有經) にも亦之あり (一八九四年王立亞細亞協會誌三八六頁)

(五) 佛教の中部地方の境界線は大品五篇一三の一二を見よ、之は正當に中部地方と呼べる、地方の東にある。之は實際は Prāgdśā (東部地方) である。印度歴史の如何なる時代でも東部

佛

ヒンヅスターンのアリヤ種印度人の中心點と思はれたとは地理學上あり得べからざるとである
 (六) 摩耶は何故に死なねばならぬか、其理由は本生物語一篇五二頁に記してある。ピガンデ
 一巻二七頁及大事經一卷一九九頁、二卷三頁參照。異つた理由は普曜經一一二頁に擧げてあ
 る。第三の説明——但此話の神話的根據は少々不明である——は佛所行讚二の一八偈である
 (七) 普曜經六三頁、托胎は毘舍佉月滿月の日、月の Pusya (弗沙) 即ち Tisya (帝沙) 星に當れ
 る時であつた、大事經も同じ星宿を示して居るが月の名を略して居る
 (八) 托胎はバルハト彫刻第二八畫に表はしてあり Bhagavato kamiti と記してある。ミナ
 エフ佛教の研究一卷一四六頁參照

(九) また Bimba (頻婆) と呼ぶ、ポーデヴンサ二〇頁、而して北傳にては Gopa (瞿波)、例
 之シーフネルの西藏佛傳二三六頁二四五頁、普曜經一五五頁、同書二七〇頁參照、此處にては
 耶輸陀羅を Yasomati (有稱者) と呼ぶ

(一〇) 北傳に據れば彼は佛の從弟にして甘露飯王の子である、例之シーフネル西藏佛傳二六
 四頁、ロツクヒル佛傳一三頁。不思議にもピガンデー一卷三六頁には普通南方の傳説に反し
 て同様の記事を載せて居る、リスデビヅ佛教五二頁。大事經二卷一五七頁にては阿難陀の母は

傳

期年・青・期年幼・生降・胎托・天下

ミナ(女鹿)である(是れ實際は枳娑羅多彌キヤソラクタミと同一女である)

(一一) シーフネル西藏佛傳二三五頁、ロツクヒル佛傳一六頁

(一二) 大事經でも亦其の通り、二卷三三頁、併し普曜經では Narantta (那羅達多) 一三五頁
 一二七頁

(一三) 參照須多尼波多一二八頁那羅迦經 (Nalaka-Sutta)

(一四) 北方の書類では亦 Sarvarthasiddha (一切義成) と云ふ。新に生れた王兒を祠堂へ連
 れて來ると、此處で諸神像——或は他の話の記する所では——女神 Abhaya (無畏) は王兒の足
 下に稽首した、普曜經八品、大事經二卷二六頁、ロツクヒル一七頁

(一五) 上の話は云ふまでもなく偽作であるが、普曜經一〇品に出て居る。シーフネル西藏佛
 傳二三六頁參照。彌蘭陀問經二三六頁に Visāmītra と同義の語 Sabhāmitra を太子の教師と
 して記してあるは奇である。

(一六) 大事經二卷四八頁には Mahāman (摩訶那摩)、普曜經一七九頁には Dandapāni (執
 杖)、南方原典では執杖は善覺の兄弟である、ハーデー佛教概論一三七頁。或北方の典據では善覺
 は摩耶の父である、併し大事經一卷三五六頁では摩耶夫人は Sāhā (須菩提) の女である。リス

(一七) 普曜經一二品、大事經二卷七四頁以下、西藏佛傳二三七頁、ロツクヒル佛陀傳二二頁、
ハーデー佛敎概論一五三頁參照。巴利原典では提婆達多は耶輸陀羅の兄で善覺の子である。
ハーデー佛敎概論二三一頁。彼の母はGomtiである、例之小品七篇の三、併し西藏佛傳二三七
頁では提婆達多は甘露飯王の配である。

佛

傳

第二章 未來の豫言・迦毘羅衛逾城・出家

時は追々と經ち菩薩は榮華の中に有ゆる歡樂を盡して日を送られた。

或日のこと太子は馬車に駕し御者車匿を連れて遊樂園へと赴かれた。諸天人は太子の大覺を
成せらるべき時機の近づけることを知つて太子に四種の凶相を示さんと決した。諸天人中の一
人は老耄衰弱せる人間に姿を變へて居た。太子は車匿に「之は何人ぞ」と問はれ、車匿答へて申
すには「彼は老人で御座ります、して生きとし生けるものは誰も彼の様になるべきで御座りま
する。心を動かして太子は疾くくと宮に還られたが、淨飯王は太子の斯く急ぎ歸られた理由
を聞いて懊惱益々甚しく宮殿の四圍なる衛兵を倍せられた。

後日太子は同じ事情の下に諸天人がその威力を以つて作り出した病者を見られた。太子は同
じことを問ひ同じ答を得、感激して歸られた。國王はその兒の爲めに歡樂の法を増し、更にそ
の衛兵を殖された。

程經て一日菩薩は遊樂園に馬車を進めらるゝ折死屍に逢はれた。御者のこの際申し上げた答
は前よりも更に菩薩を動かした。急いで宮殿へ還らるゝと王はその用心を倍增せられた。

四度目に菩薩車を遊園に進めらるゝ折諸天人の計略によつて一人の沙門を見られた。その威儀正しき態度は太子の心に深刻なる感動を與へ、そが出家であることを聞かれたる時直に太子は世を遁れたいと云ふ強き心を起された。この度は太子進んで園に入られ茲に一日を費された。一浴を試みたる後太子は衣服を著けんが爲めに石上に坐せられた。

この時帝釋天はその座席の暖まるを感じた、之はその領土に危難の生ずる確かな徴象である。菩薩のその日の中夜に宮殿を逃れ出で大出家を仕遂げらるゝことを見て彼は毘舍羯磨(Visvakarma)に命じ遊園に往いて天衣を以て悉達多太子を莊嚴せしめた。

毘舍羯磨はその命に従ひ太子の面前に來つて天人の式法によりその髪飾の結目を整へた。斯くて菩薩は所有ゆる華美にその身を裝うて車に乗られた。丁度この際耶輸陀羅が男子を擧げたと云ふ報道を得られたが、之を聞くや菩薩は「羅睺羅生じたり、繫縛出で來れり」と申された。夫れで淨飯王の命によりて兒に羅睺羅と云ふ名を與へた。

太子が大莊嚴を爲して城門に入らるゝ時、一人の年若き婦女枳婁瞿多彌(Kisa Gotami)はその宮殿の上階から太子の入城を眺めて居たが聲を放つて云うた、

「げにも幸なる哉母たる人、げにも幸なる哉父たる人、げにも幸なる哉妻たる人、斯くの如き夫

の」。

この言葉を聞いて菩薩は冥想の境に入られたが、その心は既に邪念より遠つて居たので、眞の幸福は貪瞋癡の情火を消して初めて得らるゝものであると覺られた。「彼は予に善き教を與へたり」菩薩は申された「予は涅槃の安樂を求むべし、して予は今日この日子が家を捨て且つ世を通るべし」。よつてその頸から高價なる頸珠を取り外づし謝意を表する爲め之を枳婁瞿多彌に贈られた。

悉達多太子はその室に入つて臥榻の上に横臥せられ、一群の麗はしき嫁女等は太子の心を慰めんが爲め唄ひ舞ひ且つ種々の技を演じたが、太子は之を見て些も楽しむことなく頓がて睡に入られた。嫁女等は失望して皆眠つて了つた。暫しの後太子は目を醒して四圍を見廻され眠れる婦人等の忌はしき様を見て益々嫌惡の念を起され、大出家(Abhiskramana)を成じたま望は倍増の勢を以て太子の心中に起つた。太子は起上りて御者を呼び馬の支度をするやう命せられた。

車匿が駿馬韃陟の支度をしてる中、菩薩は羅睺羅母の室へ赴かれ、戸を開いて耶輸陀羅妃がその一手を幼兒の頭上に置いて眠れるを見られた。妃をして目を醒させなば出家の妨害とならん

ことを恐れ、太子は静かに宮殿を退かれた。出で来るや否や太子は丈高き白馬(しろ)の所に往つて之に打乗り車匿にその尾を捉へよと命せられた。城門は守護神の威力によつて開かれ斯くて太子は遁れ出られた。

五二

この時魔王(Mara)は空中に現はれ出で、一七日の後轉輪聖王の顯位菩薩の身に來るべしと云うてその佛陀となるを妨害せんとした。されど太子はこの世の權威を目的とされねば誘惑者の云ふことに耳を假されず、魔王はその目算破れて以後影の體に隨ふが如く意地悪く太子に追隨し機に至るを待つて居た。

太子の都城を去られたのは阿沙荼月(Aśvini)満月の日であつた。或る道程を進んだ後太子は首を回された、此處は「韃陟歸還」の祠を建つべき所とある。太子は大々の華美莊嚴の中に國中を通過せられ、天人の一群は炬火を點じて太子に伴ひ空は「雨時の初めに於ける雨滴の如く」帝釋天より降り來る花を以て滿されて居た。

斯く花々しき從屬を伴ひ三十由旬進みたる後太子は阿兜摩(Anoma)河に著せられた。馬諸共に河を跳び超え、馬を下つて車匿に告げて云はれた「予が嚴身の具を取り馬を引いて還れ、予は是より行者とならんしす」。

此處で菩薩は思はるゝやう「予がこの長き房毛は沙門には適はしからず」と。太子はその劍を取つて髪を斷ちその冠珠と共に空中に投げて云はれた「予若し佛たるべくんば之は空中に留まれ、然らずんば地上に落來れ」と。髪は冠珠と共に上つて空中に支へられたるまゝ留まり帝釋天は之を金笏の中に受けて三十三天の冠珠殿中に奉安した。

又太子は思はれた「この美しい迦尸衣(Benares clothes)は沙門には適しない」。往昔菩薩のジヨーチパーラ(Jyotipala)と稱した頃その友であつた大梵天使ガチーカーラ(Ghatikara)がこの時現はれ出て沙門の持つべき品物、三衣その他のものを菩薩に献じた。菩薩は新らしき服を著け車匿に迦毘羅衛城へ還つて雙親に宜しく申せと命せられた。御者はその命に従つたが馬の韃陟は悲哀に堪へず失神の餘死んで了つた。死して後同名の神となつて天界に往生した。

(一)普曜經一四品、佛所行讚三品二六偈以下及五品一六偈以下參照

(二)本生物語序品の編者は此處(一篇五九頁)で Mahāpadāna(大本經)に照し合せて居る

(三)本生物語一篇五九頁には語を加へて「長阿含の説者は太子は總て四種の相を同日に見たりと云ふ」と云つてある。ロツクヒル(同書二二頁)が想像するやうに、馬上野外に乗り行き或

五三

衰れむべき鋤取れる勞役者を見る太子と之とは何の關する所もない、此一段は後にロツクヒルの據所とせる佛所行讚五品の中では第三第四兩凶相の中間に来る

(四)大事經二の一五九頁及西藏佛傳二四〇頁(バドラカルバーヴダーナニ參照)では太子逾城の夜に起つたのは出産でなくして懐胎であつた。佛所行讚二品四六偈には時日を出してない、此處では羅睺羅は *Rahula* (*rahnava*) (羅睺の敵即ち月の顔) と云ふ形容語で特示してある。西藏佛傳二四五頁に羅睺羅の誕生は毘舍佉月満月の日の月蝕の際魔羅が敗北をした、之と同時にその事實を參照せよ。同一瞬時に甘露飯王の子阿難陀も生れた。バドラカルバーヴダーナ九では羅睺羅は西藏佛傳に於けると同様其托胎の後六年にして生れた

(五)此女の話は勝義燈一九五頁以下、涕利偈陀二一三—二二三に出してある。法句喻經一一八頁二八九頁三八七頁、増一阿含一卷一四の五參照。大事經二の一五七及バドラカルバーヴダーナ三五では此女を *Mita* (女鹿) 阿難陀の母と呼んである。西藏の物語で混雜したのではロツクヒル二三頁の *Mitā* (鹿生) のやうなもの、佛所行讚五品三四偈には名を記してない

(六)此詩中「幸なる」で譯した原語は *nibhuta* で *Nirvāṇa* は *nibhuti* (*nirvīti*) と同義の語である。チルダーズ同語の條を見よ

佛

傳

(七)更に詳しい記述は本生物語一篇六一頁及普曜經二五二頁を二五二頁の女嫌ひの自白と併せ見よ。佛所行讚五品四三以下、大事經二の一五九參照

(八)北方文献は太子の其處を去るに先ち孝順なる兒として其父の許しを求めらるゝことを記する挿話を入れて居る、普曜經一五品、大事經二の一四一。佛所行讚五品二七—三八偈參照。挿話は力ある文句を含んで居るが餘り適切でない

(九)本生物語序品一篇六二頁には一本生物語註によれば「羅睺羅此時生れて七日なり」との註を加へ、併し此意見は他の註書には見えずとして排斥して居る。再び異なるは北方諸傳説である、(四)の註を見よ

(一〇)此馬、首より尾に至るまで丈十八肘であつた

(一一)普曜經二五七頁では太子の意志を阻止せんとするは魔王にはあらずして車匿である。

Windisch の魔羅と佛陀二〇五頁參照

(一二)即ち太子托胎の時

(一三) *Kandakaniyatana* 此祠堂は普曜經二七七頁には擧げてない、併し車匿が別れた地點 (*Chandakaniyatana*) に建立された祠堂は擧げてある

(一四)中部地方では雨は六月の終り頃に降り初める

(一五)大事經二の一六四では稍々異つて居る、同書に Anupiya とある所は明かに摩羅國の Anupiya と同じ。普曜經二七七頁參照

(一六)普曜經二七八頁では殿の名は Uddipratiralanā(納冠殿)とある。此遺品はバルハトの版畫一六には Sudhammā Devarahā(善法天會)に置いてあると特示され Bhagavato Cūḍamaḥo(世尊の冠祭り)と呼んである。カニンガムの原書一八九頁參照

(一七)兩友人の經歷は大事經一の三一九以下を見、彌蘭陀問經二二二頁以下、法句喻經三四九頁を參照せよ—大事經二の一九五、普曜經二七六頁、佛所行讚六品六〇偈では菩薩は獵夫、實は獵夫の形を裝へる天子の袈裟と其衣とを交換する

(一八)此駿馬の死及神化は大事經二の一八九以下に更に詳しく語つてある。此典據及普曜經二八二頁に據れば毘陁は迦毘羅衛城へ歸つてから死んだ。天上界に於ける其多幸なる状態に就いては毘摩那事八一頁を參照せよ

第三章 遍行生活・難行苦行・魔王戰鬪・勝利・佛果獲得

斯くて菩薩は遁世者の生活に入り阿菟比耶(Anupiya)の菴羅林(The mango grove)中に七箇月を過された。此處から一日の中に摩揭陀國(Magadha)の首都王舍城(Rājagṛha)に赴き茲で食を乞はれた。之を見て城民等は菩薩を天神か人間か將又何者であるか分らず驚異の念に打たれた。國王洗尼(Seniya, Srenya, Senika)頻毘沙羅王(Bimbisāra)は殿樓から大人(Mahāpurusa)を見てその臣屬の者等に、往つて彼の人の素性を確め來れと命じた。臣屬の者等は、菩薩の既に十分の食物を得て城を出で槃荼婆岩(Pandava)の下で一坐懸命骨折つて粗末な食を取つて居らるゝを見た。使者の返つて之を王に報するや、王は直に大人の坐せる所に赴いてその國土全部を捧げんと云つた。併し菩薩は己れは最上佛智を得んと望んで一切を抛擲したものであると云つてこの思切つたる献納物を辭せられたので、國王は佛となつては願くは先づ我が國を訪はるべしと請うた。

王と別れて後菩薩は先へと進まれ、頓がて二人の名高き哲學の師たる阿羅藍迦羅(Alara, Kāśyapa)及び羅摩(Rāma)の子なる鬱陀迦(Uddaka)の所に來られた。二人の者より諸禪(Samā-

Patti)の次第を學ばれたが、之は佛果に達すべき道でないことを直ぐに見て取つて大精勤(Mahāpādhanā)に従事せんと心を決せられた。この志を遂げんが爲め菩薩は優樓頻羅林(Uruvilva)に赴かれた。五群(Pāṭavaṅṅīya)の衆即ち憍陳如及び他の四人の乞食等は菩薩は久しからずして佛となられるだらうと信じて居たので菩薩に會し、菩薩の所に住むことに心を定めた。

精進六年の後菩薩は最深妙の禪定(Dhyāna)を修し且つ最嚴肅の苦行を爲さんと心を決せられた。過度に斷食を行はれたので菩薩は瘦せて骸骨のやうになり、遂には弱つて或日の如きは氣絶して倒れられた位である。或天神は「沙門瞿曇は死せり」と云つたが、他のものは又「之は阿羅漢の常狀なり」と申した。而して又久しからざるに悶絶せる菩薩は正氣付かれた。

菩薩は苦行は佛果に達すべき道でないと思つて以前通りに再び食を取られた、爲に彼の五人の僧徒等は菩薩に對する信仰心を弛ぶるに至つた。それでは彼等菩薩を棄て、波羅奈城(Bārāṇasī)に近き鹿苑(the Deerpark)の仙人墮處(Rṣipatana, Isipatana)に去つた。

その時優樓頻羅に須闍多(Sūratā)と稱する一人の長者の娘が住んで居た。毘舍佉月(Viśākhā)の満月の日に須闍多是聖樹に供物を捧げんが爲に朝疾く起きて牛の乳を搾つた。種々の奇瑞を見て須闍多是心嬉しくその召使女富樓那(Pūrā, Pūṇā)を遣はして聖樹の下を掃はせた。

その前夜の後分に菩薩は五種の夢を見られ、是に由つてその日の中に佛となるべき確信を抱かれた。夜明に菩薩は食を求めんが爲めに出で、その光明を以て東方を照しつゝ、聖樹の下に坐せられた。富樓那は菩薩の光明を放たれ、その身體より發する光の爲めに全樹金色に變せるを見た。富樓那はその主婦の所に走り歸り、主婦は乳糜を金器に盛り聖樹の所へ携へて之を大人に献じた。之と同時にガデーカーラが献じた木鉢は消失した。菩薩は金器を携へて尼連禪河(Nairājanā)の岸邊、善設(Supatthita)と云つて無量の諸菩薩が覺果を成ずるの日に浴せられた所へ往かれた。一浴して後菩薩は無量の諸佛が著けられた阿羅漢の服を身に纏ひ東方に面して坐し、次の七日の間は他の營養物を攝取せられぬので食物を四十九分し總て之を食ひ盡された。その食を終へてから菩薩は金器を流に投じ左の誓言をせられた「予若しこの日に於て佛たるべくんばこの器流を上り、若し然らずんば下り行け」。不思議なる哉、金器は遠く上つて行つて龍王迦羅(Nagarāja Kāla)の宮へと沈み下つた。この金器は過去三佛の器に打ち當つて音を發した。それで迦羅は新佛の出世を知り得たのである。

夕刻菩薩は菩提樹の方へ進まれた。途中菩薩は吉祥(Svastika, Sothīya)と名くる一人の草刈男に逢はれ、彼は菩薩に八束の草を献じた。この供養物を受け方角を檢分した後菩薩は諸佛の

座たる東方に往き西に面せられた。茲で地上に一握の草を敷き十四肘の座を設けられ次に左の誓言を發せられた「假令予が皮膚、予が筋骨は壞れ予が生血は渴るゝとも、圓覺を成せざる間は予はこの座を去らし」と。

この時のことであつた、魔王は「悉達多太子は我が領域を逃れ出んとして居る」と考へ戦を爲さんがためにその從屬を呼び集めた、己れは帶山 (Grimakala) と云ふ象に騎り攻撃を指揮した。それが餘り凄じいので菩薩に隨いて居た諸天神等は恐れて逃げ去つた。獨り大士は諸波羅蜜を信じて臆せず居られた。そこで魔王は烈風を吹き起し續いて岩石武器熱灰炭火の雨を降らせたが皆効がなかつた。

企劃總て徒勞に歸したので惡魔は大士に近づき呼んでその座を去れと云つた。「魔王、汝は世を利し智慧を得んが爲めに汝の生命を捧げたることなし、この座は汝の有に非ず。この言葉に激せられて、魔王は大人を目掛けて武器を投げたが其は變じて花環となつた。魔軍は再び攻撃を開始したが、彼等が菩薩に對して投じた岩石は花朵と變じた。菩薩は必勝を確信し勵聲して云はれた「座は予が有なり」と。次に惡魔の方に向つて「己れの功勳に對して證人を出せ」と迫られた。魔王その從屬の者等に指圖すると、彼等は大聲を擧げて主王の慈悲深きことを證言した。

魔王は「悉達多、誰か汝が施與の證人たるものぞ」と問うた。菩薩は大地にその證人たるやうにと申されると大地は唸り聲を揚げたので魔軍は畏怖し象帶山は膝を屈して大士を敬禮した。敵の軍勢は所有ゆる方面に逃げ散り諸天人は欣々として「魔王は敗れ悉達太子は勝てり」と叫んだ。龍神及び他の諸天神は勝軍歌を歌ひつゝ、菩提座に近づき來つた。

大士不敵の軍勢を破られた時太陽は尙地平線上にあつた。その夜の初分に宿世の智 Parivāṇī-vasa, Pubbenivāsa) を得、第二分に於て天眼 (Divyacakṣus, Dibhacakkhī) を得、第三分に於て因果連關の智を得られた。菩薩の心の中に十二因縁を順次逆次に思念して居らるゝ中、世界はその基礎に至るまで十二回震動し、菩薩降誕の日に於けるが如く極めて不思議なる現象現れた。斯かる不思議の中に菩薩は正遍智を成じ總て諸佛の唱ふる喜領を唱へられた。

(一) 此物語の更に詳しい説明は須多尼波多七二頁及其註書中に出て居る。詩談普曜經二九七頁は大變に長い

(二) 兩教師に就いては佛自身の物語を見よ、中阿含一卷八〇頁以下。普曜經三一九頁以下參照。北方諸書では事件の道筋が稍々異つて居る、普曜經二九四頁、大事經二の一九五、佛所行

讚一〇—一二品を見よ。北方所傳の教師は Arāḍa Kālāma 及 Udraka(誤つて Rudraka) Kāma-putra である

(三)其組織は長阿含の Mahāpadhānasutta(大精勤經)中に示してある、増一阿含二卷一六頁及チルダーズ Padhānam の條參照

(四)佛自ら中阿合一卷八〇頁二四五頁以下に其烈しき苦行と其結果たる衰弱とを述べて居る。普曜經三一九頁以下、セナー印度刻文標註三(像)參照。此處に指示せる禪定は中阿合では appānaka 普曜經三一四頁三二四頁、大事經二の一二五では āsphānaka と名けてある

(五)本生物語序品では之が菩薩の此名で呼ばるゝの初めである、然るに普曜經では阿羅藍は此名で呼んで居る。此名の起源に就いてはビュルヌーフ緒論一五五頁を見よ。瞿曇家は Aṅgira(阿儼羅婆)の一小分であるから、佛はまた阿儼羅婆とも知らるゝ。佛の他の名稱の一は Aḍhya-bandhu(日親)である、是れ釋迦族は日系大種族の一氏族であるから。參照須多尼波多七三頁「氏では日種、生れでは釋迦族」

(六)今一つの傳説は摩耶の其子死せりと云ふ(僞)報を聞いて哀しむことを記する、普曜經三一四頁以下

佛

傳

(七)此女の父の官稱は本生物語、大事經、普曜經、佛所行讚では Senāni, Senāpati(軍帥)又は Gopadhīpa(牛司主) Grāmika(村長)である。此一番後に擧げた聖典外の典據の中で、此女の名は一二品一〇六偈では難陀婆羅、一七品九偈では須陀多である。婆羅と云ふ名は普曜經三三一頁にも出て居る。此女の供養、次いで菩薩の道を進まれ勝利を得られたことは兩度出している、大事經二の二六四以下及二九九以下。普曜經一八一—二二品、佛所行讚一〇六頁以下參照

(八)大事經二の二六五參照、三〇七頁と四〇〇頁とに違へて二度繰返してある

(九)普曜經三六二頁の一節參照

(一〇)惡魔の通名は巴利では Māro pāpimā(魔羅波旬)で、之は吠陀原典中の Mitriviḥ pāpimā(死、害惡)と同義の語であつたやうだが佛教家には害惡の化身となつた。魔王と死との關係は更に涕羅偈陀四一一偈中之を Macourāja(死王)と同一體なりとして例示してある。大事經には pāpimā の代りに pāpiman 或は pāpīyan(二の二六四及二六八の如き)と共に出してある、後なる形は普曜經にも用ひてある。之と同義の語で南北兩原典に能く知られて居るのは Namuci である。魔王の Smara(愛神)と同じと云ふことは魔王は最高欲界の主であると云ふに基いて居る。されば普曜經四二七頁には Kāmeśvara(欲王)と名けてある

「欲界に於て魔羅波旬は主長なり上首なり婆舍跋提ワシヤワルチなり」(三七五頁)。佛所行讚一三品二偈參照。また Windisch の魔羅及佛陀一八四頁以下を見よ。

(一一)普曜經四〇四頁に據れば魔王は其第一の不首尾な攻撃の後菩薩を誘惑せんが爲め其女子等をやる。彼は後日其策略を繰返す、巴利原典は吾人が後で見ると通り矢張り此に入れて居る。他の位地の變換は大事經二の三二二及佛所行讚一三品二偈以下に出る。

(一二)大事經二の四一七では軍勢は日の出に破られた

(一三) Pratihāsanaṭṭhapaḍā 巴利では Paṭiccasamuppāda 此組織は大事經一の一、普曜經二二品、大事經二の二八五及三四六に敷衍せる通り、下第三篇に至つて説明を加へる。ピガンデーの典據には四聖諦の概念をも加へて居る、普曜經四四七頁、大事經二の三四五頁も同様。四真理四公理は中阿含一卷四八頁中に詳しく示してある

(一四)大品一の一參照、同處の詩句は又大事經二の八八、四一六以下と參照

(一五)本生物語序品一の七六頁、法句經一五三及四偈の註中教理上の説明を見よ。「思想連關」の説明はリスデビツ教授の佛敎一〇〇一一二頁に出て居る。大事經二の二八五に出してある喜頌は更に平易な語で同じ意を含んで居る。

佛

傳

第四章 成道の初七週日・説法及び五乞食僧の濟度・

他の得度者・魔王の誘惑・二迦葉・火聚喩經・

頻毘娑羅王と會す・舍利弗目犍連の歸佛

圓覺を成じたる後佛世尊は解脱の樂を享受し、且つその前生毘散多羅 (Visantara, Vessantara) として行つた功德行を思ひつゝ、同一座に留まらせられた。諸天神中或者は世尊のその座を起たれぬのを見て、世尊はその日の事を終られしや否やを疑つたが、世尊は彼等の心を知つて空中に昇り一(三)の不思議を行つて彼等の疑念を晴らされた。やがて世尊は少しく東北の方に向つて立止まり一週日の間瞬くことなくして一方を見て居られた、此處は後「不瞬者の祀」(The Shrine of the Unblenching One)となつた。此の處とその舊座との間に東から西に世尊は一の歩道を設けられ、之を往返して七日を費された。この歩道は「行歩の寶祠」(The Jewel Shrine of the Walk)として知れ渡つた。第四七日に諸天神は西北の方に一寶舎を構へた。茲に世尊は七日を過して阿毘曇藏 (Abhidhammapitaka) 全部を通説せられた。

菩提樹邊に四七日を過したる後、第五七日には羊牧 (Ajapala) 榕樹の下に至り法を思議しつ

つ坐せられた。間隙を看出さんと欲して常に世尊に追隨した魔王が戰敗の餘悲悔の念に堪へず坐して居たのは實にこの時のことであつた。その三女愛・樂・欲は父の苦悶の理由を聞き、その妖嬌を以て聖者を擒にせんと約した。彼等は世尊に近いて誘惑を試みたが世尊は彼等に些の注意をも拂はれない。遂に世尊は「立ち去れ、斯かる勞は欲情を制せざるものに對しては或は效あらん、如來は既に貪瞋癡を除きたり」と宣ひ二偈を唱へさせ給うた。この計劃に失敗して三女は父の所に歸つた。

此に七日を費やしたる後世尊は文隣陀^(五)(Mucalinda)の所に往かれると降雨中龍王はその蟠局と鎌首とを以て世尊を防護し奉つた。一七日の後世尊は羅闍耶多那樹^(六)(Pajāyātana)の所に赴かれ、此處に又一七日間留まらせられた。

七々日の最後の日、世尊の羅闍耶多那樹の下に坐し給へる時偶々帝梨富婆^(七)(Tapussa)と跋利迦^(八)(Bahlika)と云ふ二商人五百の貨車を率ゐて鬱迦羅^(九)(Utkala)から中部地方へ旅行して居た。昔し之等商人の親族であつた一天神彼等の車を停め、世尊に菓菓と蜜とを獻せよと教へた。二商はその教に従ひ世尊の面前に往いて「世尊、我等を惑みてこの食を受けさせ給へ」と申した。如來はこの供養物を受くべき器物を有たれなかつたが四方の守護神は忽ち天上から來

つて各々一箇の青玉製の鉢を獻じた。世尊は之を受け給はぬ。彼等は又外に四箇の豆色石の鉢を奉つた、すると世尊は之を受け「皆一とならせよ」と命令の語を用ひて四鉢を一となし給ひ施物を受けて之を食し給うた。

世尊のその食を終らせ給ふや二商は拜伏し左の語を以つて信仰を告白した「佛及び法に歸依し奉る、世尊今日よりして生を終るまで我等を在家の信士(Upasaka)として容れさせ給へ」。斯して二商は最初の在家信士となつた、當時僧伽(Sangha)は尙未だ存在しなかつたので彼等は二種の信條を述べた(Drevaika)丈である。その信仰を告白したる後彼等は世尊に後日禮拜せんが爲め何物か頂戴致したしと申した。世尊は頭髮二三を與へられた。是れ後日二商がその故郷に一聖祠を建てその中に遺身として奉安した所のものである。

如來は座を起ちて羊牧榕樹の所に歸られた。時に如來の心中にその自ら證悟し給へる法は甚深微妙にして他に説示すべきものではないと云ふ考が起つた。併し娑婆(Sahaloka)の主大梵天(Mahabrahma)は世尊若し久しく法を説くことを肯じ給はずば世は迷路に陥るべしと知つて、世尊の坐し給へる所に赴き救の道を示し給へと迫つた、流暢なる語を以て之を述べたので願は遂に容れられた。

佛は今その心の中に誰に先づその法を示すべきやを考へられた。阿羅藍のことを思はれたが一天神の教によつて舊師は一七日前没せしことを知られた。次に鬱陀迦を思はれたが亦一天神の暗示によつて、彼は前夜没せりと云ふ決論に著せられた。で世尊の思は五人の乞食僧に轉じた、彼等は暫しは忠實に世尊に事へたことがある。世尊はその心の中に彼等が今波羅奈城に近き鹿苑中に住んで居ることを知つてその所に赴き正法國土を建設せんと決心せられた。更に數日の間菩提樹邊を徘徊し阿沙茶月(Asadha)満月の日に出發せられた。

途中世尊は邪命派(Ajivaka)の一僧優波迦(Upaka)に逢はれたが、彼は世尊の敬愛すべき外貌を見て如何なる僧團に屬するや且つその師は誰なるやと問うた。之に對して世尊は己れの遍智と尊貴とを揚言し、正法國土を建設し、暗中に摸索しつゝあるこの世界に於て不滅(涅槃)の鼓を打たんが爲めに波羅奈城に赴きつゝある意を述べられた。

曠時世尊は鹿苑に達せられた。五人の者共遠くより世尊を見るや互に語つて云ふに「友、此に沙門瞿曇來る、彼れ常人の生活に歸り總て眞摯なる努力を廢棄せり。我等は恭敬の相を以て迎へざるべし。されど彼は良族の出なるが故に座席の禮遇を受くるに堪ふ」。之が彼等の約束であつた。併し世尊の近づき給ふや彼等は思はず立ちて恭しく世尊を迎へた。佛となれることを

知らずして彼等は或はその名を以て或は「友よ」と云つて世尊を呼び掛けた。併し世尊は「汝等、斯く我を呼ぶ勿れ、我は如來なり。我れ汝等が爲めに法を説かん、汝等若し之に従はば既にこの生に於て最上の淨果を得ん」と申された。

己れの云はんとする所に意を留めるやう五人の者等を納得させて後、世尊は第一の説法をせられた。此に世尊は、世を遁れたるものは俗世的快樂を追ふこと及び無用の苦行を行ふこと、云ふこの二種の極端を避けねばならぬ、而して人を正智と涅槃とに導くものは如來所證の中道であると述べられた。更に示さるゝにその中道(The Middle Course)とは八正道(Astāngiko Margā)である。次に四種の原理(Aryasatya)即ち諦理を説明せられた、其は苦・苦の因(集)・苦の滅・及びその滅に達する道とこれである。その説明の中に橋陳如は眞實の智慧を得て、初めを有するものは總て終りあるべきことを悟つた。之れに因つて橋陳如は涅槃道の第一果(預流果)を得直に比丘戒を受けた。翌日婆敷(Vaspa, Vajpa)は濟度され、次の三日の間に跋提梨迦(Bhadrika, ddiya)・摩訶男(Mahānāman, -ma)・及び阿説示(Asvajit, Assaji)の三人は次々に濟度された。第五日に世尊は皆に對して「所有ゆる物質的・精神的現象界の空なること」(Anattalakkhaṇa-Sutta)に就いて説教されると、その結果五人の衆はその心に於て不淨より離れた。

斯くてこの時世に六人の阿羅漢があつた。

その頃波羅奈城に富有なる長者の兒の耶舎(Yasas, Yasu)といふ青年があつた。曾て耶舎は悉達多太子が逾城の夜に見られたのと同じ眠れる女樂師等の様を見たことがある。嫌忌の念を起して耶舎はその家を逃れ出で歩を鹿苑の方へと向けた。世尊は耶舎を見、且つ彼に聖者たるべき機根あるを認めて、彼を呼び預流果を得せしめ翌日阿羅漢果を得せしめられた。

間もなく耶舎の父は信士として佛教に入つた。彼は三重の式辭(Tevārika)によつて歸依を唱へ信仰を告白したる第一の優婆塞である。耶舎の母及びその妻も亦信女となり、その後久しからずして耶舎の朋友五十四人も教團に入り阿羅漢果を得たので時に世に總て六十一人の阿羅漢があつた。

雨期并にその莊嚴なる終結即ち自恣(Pravāṇā, Pavāṇā)の後、世尊は「往け、比丘等、周遊し説法して」と云うて六十人を夫々違つた方面に遣はされ、己れは優樓頻羅(Uruvilva, Uruvelā)へと往かれた。其處へ赴く途中世尊は魔王の誘惑に勝ち賢人衆(Bhaddavaggiya)を濟度せられた。優樓頻羅林には優樓頻羅迦葉(Uruvilvakāśyapa)、那提迦葉(Nadikāśyapa)・伽耶迦葉(Gayākāśyapa)と云ふ名で知れ渡つた三人兄弟の結鬘拜火(Jatila)の隱者が住んで居た。種々の奇蹟

を現じて如來は三兄弟并びにその弟子等を濟度せられた。残らず彼等を伴うて世尊は象頭山(Gayāsīna)に赴かれ茲に熾然(Adittapariyāya)の説教をされたがその結果聽衆總て阿羅漢果を得した。

象頭山に近き所に暫し滯留された後世尊はその數多き從者と共に所々周遊せられ、道を王舎城に近き杖林(Tatthivana, Yastivana)の善設祠(Supatthiha)の方に轉せられた、是れ曾て頻毘娑羅王に對して爲したる約を履行せんが爲めである。

佛の來著されたことを聞くと、國王は數多の婆羅門居士と共に急ぎ杖林に赴いて佛の足許に拜伏した——佛の足は車輪の相が著いて居て多量の光明を放つて居た。諸婆羅門等大沙門が優樓頻羅迦葉の弟子であるか、或はその反對であるか、何れかと疑ひつゝ立つて居ると、世尊はその所思を徹見して長老を喚んでその發心に就いて陳述致せと命せられた、そこで迦葉は拜火を棄てたことを述べ且つ「世尊は我が師、我は世尊の弟子なり」と申した。次に迦葉は空中に昇り、この不思議を以て群れ居る人に己れ如來に服せることを十分納得せしめた。されど世尊は「唯今我は迦葉を服せしのみならず、過去世に於ても彼は我が爲めに服せられたり」と云ひ、その際『摩訶那羅陀迦葉本生譚』(Mahānāḍakassapa-Jātaka)を語り四箇條の教訓を以て之

を結ばれた。説教の終りにその座にあるもの殆んど残らず初果を得し信仰を告白した。此を去る前に國王は世尊を翌日の正食に請した。

翌朝世尊その弟子等と共に王舎城に入らせ給ふ時先に一人の婆羅門——實は婆羅門の姿をした帝釋天——現はれて極めて高い調子で佛法僧の讃歌を唄うた。

摩揭陀國王その賓客に接するや、極めて篤き禮法によつて世尊の御手に水を濺ぎ佛の主宰し給へる僧伽に竹林園(Vaṅṅvana, Veluvana)を獻じた。佛はその供養を受けその衆と共に園内に居を定め給うた。

この時王舎城内に外道の普行沙門刪闍耶(Sañjaya)と云ふものが住んで衆多の門弟子を擁して居たがその中に舍利弗(Sariputa, Sāriputta)目犍連(Maudgalyāyana, Moggallāna)もあつた。

或朝舍利弗は阿説示が乞食に廻れるを見、長老の舉止に心動かされてその師は誰なるやと問うた。阿説示はその師は釋族の大沙門なることを答へ且つ之に附加して己れは未だ教の精しき説明を與ふることを能くせない、されど教の要點は次の式辭に含まれて居ると云つた。

因より生ずる之等諸法の、因を如來は説かせ給へり、而してまたその滅をも、大沙門は示し給へり。

この偈を聞くや舍利弗は預流果に達し、之を目犍連に復説すると彼も亦歸依者となつた。二人はその師刪闍耶を棄てた。目犍連は一七日にして舍利弗は二七日にして阿羅漢果を得、共に佛によつて二大上弟子の位に揚げられた。その拔擢は他の弟子達の嫉妬心を惹起したが世尊は前佛の下に起りし類例を引いて彼等の不滿の理なきことを證せられた。

(一) 最後より一つ前の生。毘散多羅の話は有ゆる本生物語の中で一番人に好かるゝもので、緬甸及西藏では演劇の題材となつて居る、ワツデル西藏喇嘛教の佛教五四〇—五五一頁。ハ―デー佛教概論一—六頁以下参照、法顯傳譯一〇六頁

(二) Yamaka-pāthariya Yamaka 此語には色々の註が出て來たが、吾人若し誤れるでなくば之は一種の謎語で「手品、魔術」の意のyogaを暗々に言ひ表はしたものである、yamaka(兩、雙)はyoga(連合)と殆んど同義であり、yuga(對、軛)と全く同義である

(三) 世尊の滯留された所々の話は小品一篇一—五では違つて居る、即ち一菩提樹 二羊牧榕樹 三文隣陀 四羅闍耶多那 五羊牧榕樹、中阿舍一卷一六七頁参照。普曜經四八八頁以下では其次第一菩提道場 二全宇宙に互れる長歩行 三菩薩瞬かざる眼を以て菩提道場を見る 四

東海より西海に至り短歩行をなす 五文隣陀 六羊牧榕樹 七Taryāṅga(多羅耶那樹)

(四)彼等の名は巴利では Tanhā(愛)Arati(樂)Raga(欲)である、更に詳しくは須多尼波多一五七頁、雜阿合一卷二三四頁、增一阿合一卷三頁を見よ。普曜經四九〇では三女は Tisa(愛)Arati(樂)Rati(快)、佛所行讚二三品三偈では Tisa(愛)Piti(喜)Rati(快)である。此挿語は大品にはない

(五)普曜經四九一では *Mucilinda*。之は山、湖、龍及樹木の名として出て居る

(六)梵語の *rājātana* にあたる。普曜經の *tāryāna* はブラークリット語と思はれて居る *raja-* *yana* の轉訛したのかも知れない

(七)普曜經には *Trāpusa* と大品のやうに *Bhālīka* とを出し、ピガンデー一卷一〇八頁の通り兩兄弟としてある。本生物語序品に *Tārasu* とあるは確かに間違ひである。大品一篇では此出來事は更に早かつた、併し同様羅闍耶多那の近くであつた。大事經の挿語の編輯に就ては ミナエフ 佛敎の研究一卷一五八頁を見よ

(八)大品一篇四の式辭は「長時我等の安樂幸福の爲めに」である。普曜經四九五では本生物語序品と全く同様「慈念を垂れて」とある

(九)二人は二事を誓へる優婆塞となつた

(一〇)緬甸人及錫蘭人の各々此遺身を所有すと主張する争點に就ては リスデビツ の歴生譚一〇頁註を見よ。大夏(Bactria)の一都會でも同じ要求を提起したと云ふことをも足して好からう。玄奘傳記譯一卷六六頁、ミナエフ 一卷一六一頁参照

(一一)更に詳細に且つ詩的に語れるは大品一篇五、中阿合一卷一六七頁以下、雜阿合一卷一三六頁以下、普曜經五一四以下。南北兩傳説の一致は此處では大變近い。吾々は唯巴利の *Brahmā Sahampati*(娑婆の主梵天)に對し普曜經には常に *Sikhi Mahābrahmā*(尸棄大梵)なることを注意する、併し *Sahampati* も例之六九頁三四二頁(翻譯名義大集一六三節参照)に出で *Sahapati* も四九頁に出て居る

(一二)物語の此部分及此續には普曜經五二三以下、佛所行讚一五品八七偈以下、ロツクヒル 三七頁以下を参照せよ

(一三)而して「法輪を轉じ始めん」と。 *Dharmacakraṇa pravartayitūni* の兩譯共に可。されど佛敎家は常に此辭句を標象的意義に取ることを注意して置かねばならない、バルハトの版畫一三及三一に車輪を描き出してあるので證明さるゝ通り、之は昔しも此通りであつた。印度刻文

二の三二二参照。第三の意味は *Dvādasakāra* (十二様) の如き形容語から出て来る——之は十二因縁而してまた多分十二分をも暗示するものである——「微妙甚深」とは「法界全部」の其である。斯う云ふ關係で *Dharmacakraṃ vartayati* 或 *pravartayati* は「法の全部を開示すること」と譯しても好からう

(一四) 世尊入胎の日で又其遍行生活に入られた日である。毘舍佉の満月と阿沙荼の満月との間には八週間あるから「數日」とあるは一週日でなくてはならぬ

(一五) 大品一の六の偈、中阿合一卷一六九頁、普曜經五二六を見よ——優波迦に就てはピユルヌーフ緒論三八九頁、フェールの *Études Bouddhiques* (佛教の研究) 一五—一七頁

(一六) 大事經一の三五九以下に出て居る此名稱の起原に關する物語は之が梵語の *dhava* ではなくしてブラークリットの *dhava* なることを豫想せしめる

(一七) *avuso* は本當は「貴君、尊師」の意である。之はチルダーズが言へるやうに全く變化せぬ語ではない、併し *ayasmāt* (*ayasmāt*) の呼格も亦大數を呼び掛くるに用ひられる、例之須多毘崩伽四篇八の八を見よ。格の形は *adivās* (石又箭石にて甲へる) *Dhāvas* (有祥者) に於けるが如く吠陀の *vās* と一致す

(一八) ピールの 東方聖書一九卷一七四頁参照

(一九) *astāṅgiko* (*aryasāṅgiko*) *mārgah*, *atthāṅgiko maggo* (賢聖八正道) 卽一正見 二正思惟 三正語 四正業 五正命 六正精進 七正念 八正定、大品一篇六の一八、長阿合一卷一五七頁、中阿合一卷四七頁以下、雜阿合二卷一〇六頁、普曜經五四〇以下、*Kāraṇḍa-Vyūha* 四六節。

翻譯名義大集四四、法數名集經五〇参照

(二〇) 是よりして彼の異名を *Añña-* 或 *Aññata-Kopūṭina* (阿若憍陳如)、文法に合はない梵語で *Aññāta-Kaupḍinya* と云ふ。参照、*Jeti-vana* でなくて *Jetavana*。正しくは *Aññāta-k.* 翻譯名義大集四七節

(二一) *Sotāpatiphalā* チルダーズ *maggo* 及 *sotāpatti* の條下を見よ、ピガンデー 一巻一五三頁参照

(二二) 聖職授與の式辭は「來れ、比丘、正法は好く宣說せられたり、聖き生活を營め、苦患を滅せんが爲めに」

(二三) 耶舍物語の場は拘尸那羅に置いてある、東方聖書一九卷一八〇頁、併し ピールの 釋迦佛傳奇物語は大品と一致する

(二四)大品一篇一一及一八、ロツクヒル佛陀傳三九頁。本生物語序品八二頁には些も此事を記せず

(二五)北傳の五人の賢衆(Bhadravargyas)——南方の五人衆——とは違つて居る。併し西藏の典籍には「幸群」即ち賢衆六十名に就いての同じ話が出て居る、ロツクヒル四〇頁を見よ

(二六)之等の奇蹟に關して詳しくは大品一篇一五—二〇に出づ、西藏佛傳二五〇頁以下、東方聖書一九卷一八四頁

(二七)大品一篇二一、東方聖書一九卷一八六頁

(二八)シーフネル西藏佛傳二五四頁には Rohrhain des festen Caitja とある。Rohrhain は Yasivana の譯の積りであるか否かは疑はしい。若し左様だとすれば Yasivana と Venuvana と同じであつたか或は混同されたと見えやう。祠堂の名は巴利の Supatittha に對する Supratistha たること明白である。ロツクヒル四二頁

(二九)大品一篇二二、本生物語序品八四頁、須多尼波多四〇五—四二四偈。Windisch 引用書二三四—三〇三頁參照

(三〇)ロツクヒル四三頁、東方聖書一九卷一九三頁參照

(三一) Sāriputra 或 Sārisuta 又 Upatisya (Upatisa 優波帝沙)とも呼ぶ、目犍連の又の名は Koṭṭha (拘利多)である、大品一篇二四、法句喻經一二〇頁、西藏佛傳二五五頁等を見よ、此等には兩友の刪闍耶の門人とならざる前の物語を出す。舍利弗は法句喻經の引用した所では婆羅門女舍利サリの女である、西藏佛傳も之と一致するが鳥の sarī と sarika とを混同して居る。優波帝利及拘利多と云ふ名稱の起原は引用した諸書には異つたやうに云つてある。Sāriputra と同義の Sāradvatiputra のことは西藏佛傳引用箇所及ビュルヌーフ緒論三二二頁を見よ。ロツクヒル四四頁及同所に與へたる參照文を見よ

(三二)彼は阿羅漢たるにも拘らず

(三三)此信仰告白の目的に就いて立派なる議論はホヂソン論文集一一一頁に出て居る

(三四)法句喻經一二五頁以下。ロツクヒル一一五頁、東方聖書一九卷一九六頁參照

第五章 迦毘羅衛入城・羅睺羅難陀の受戒・佛王舍城に還る・阿難陀及び他の釋種の出家・給孤獨・毘舍佉

如來の竹林園に留らせ給ふ時淨飯王の許に、その兒既に佛となつて王舍城邊に住へりと云ふ消息が届いた。老王はその兒を迦毘羅衛城に召さんがため宮臣の一人に衆多の從者を附けて送つた。使臣は出立つて世尊の正に法を説き給へる時竹林園に達した。その結果宮臣及び從者等は總て阿羅漢果を得、戒を授けられんことを求めた。その願は容れられたが、阿羅漢は俗事には冷淡であるが爲め彼等は國王の使命を傳ふことを閑却した。

淨飯王は幾度も他の使者を送つたが九度までその使節に同様の事が起つた。遂に王は黑優陀夷(Kaludāyīn)に思ひ當つた。彼は菩薩と同日に生れ且つその遊相手であつた。優陀夷はこの任務を引受けることゝなつた、但後出家することを許さるべしと云ふ條件の下に。國王はこの約束に同意したので貴人優陀夷は王舍城に去り世尊の説法し給へるを聞いてその先任の人々の如く阿羅漢果を得した。

世尊は雨期の間波羅奈斯に近き所にて安居期を過し、次に優樓頻羅に往つて此に三ヶ月間駐

まらせ給うた。報沙月(Pausa, Phussa)満月の日に王舍城に往き此に二ヶ月間駐まらせ給うたので波羅奈斯を去られし以來既に五箇月過ぎ去り、優陀夷が著して後一七日にして寒季(hemanta)は過ぎて了つた。波勒婁那月(Plāguna, Phaguna)の満月の日春期の所有ゆる美觀を装うて來つた時優陀夷は之は佛がその族を訪はるべき好時季であると考へた。彼れ世尊の所に往き盛んに著色して春期の愉快なること、旅行を思ひ立つに恰當の時期なることを述べ立てた。世尊の如何なる目的の爲め斯く面白く旅行の事を言ひ立つるやと問はれると、優陀夷は答へて「世尊、世尊の父君世尊を見んと願はる、父王を訪はせ給へ」と申した。佛申さるゝには「好矣、我れ父王を訪ふべし」と。

如來は大數の僧衆に伴はれ二箇月で迦毘羅衛城に達する積りで王舍城を發せられた。優陀夷は直ちに空中を飛び行き淨飯王の前に現はれて世尊の徐々と來らせ給ふ由を言上した。大王喜ぶこと限りなく彼に食を供し同時に佛に奉るべき最上の食を盛れる鉢を彼に渡した。優陀夷は鉢を空中に投じたる後己れも亦空中高く昇り食の一分を取つて之を世尊に奉つた。

毎日長老は同じ様に食を齎した。彼はまた釋族等の面前で佛の偉大なる品格を頌揚することを忘れない、この功德行によりて世尊は彼をその同族を融和することを知れるものゝ第一位に

置かれた。

同時に釋種等はその親族を迎ふる爲め準備を調へ、世尊の近く來らせ給ふに及び、尼拘律園(Nigrodhārāma)にて出迎へ申した。傲慢なる彼等は世尊の前に平伏することを欲せなかつたが世尊の示されたる奇瑞(ひ)によつて彼等は自ら平伏した。王もこの奇瑞を見てその兒の前に身を屈した。これ王の第三の敬禮である。

時に世尊は空中より下つて驟雨を降らされたがこの雨は之を好めるものゝみを濡らして他の者は濡らさなかつた。驚駭せる群衆に對し世尊は「唯今雨は我が親族の上に降れるのみならず、先きにも曾てこの事ありき」と宣ひ、且つこの際『毘散多羅本生經』を語らせ給うた。

翌日如來は乞食に廻り歩く爲め迦毘羅衛城に入らせられた。羅睺羅の母は好奇心に動かされ先の夫を見んが爲め高殿より凝視して居て道服を著けたる世尊の曾て王子の風で居られしよりも更に威嚴あるを認めた。羅睺羅母は人獅世尊を讚歎し且つ大王にその兒の僧徒の服を著けて市中に食を乞ひつゝある由を語つた。淨飯王は世尊を出迎へて乞食は堂々たる王族の子孫たるものには不似合のことであると云ひ聞かさうとしたが兒は之に答へて「大王、大王の統は王者の統なれど我が統は燃燈佛(Dīpaṅkara)より迦葉佛(Kāśyapa)に至る諸佛の統なり。之等并に他

の諸佛は乞食によりて活くるを常とし給へり」と申された。次に佛は一の教訓偈を唱へられたが王はやがて初果を得した。第二偈にて淨飯王は第二果に達するに至り、後日『護法本生經』(Dharmapala-Jātaka)を聞いて第三果を得し、死ぬる間に阿羅漢果を得した。

初果の聖者となるや國王は世尊并に比丘衆等を宮殿中に導き、此で一同は美食の饗應を受けた。食終つて後婦人等は總て來り世尊を敬禮したが獨り羅睺羅の母のみは來なかつた。佛は舍利弗目犍連を脇侍とし羅睺羅母の室へ赴かせられた、世尊を見るや彼女は身をその足下に投じた。淨飯王の羅睺羅母を稱揚し其德行を委曲に述ぶるや、世尊は前にも身を護つたことある故その善行は異とすべきものでないと言ひ『忿怒緊那羅本生經』(Canda-Kinnara-Jātaka)を説かれた。

第二日には淨飯王と王妃憍曇彌との子なる難陀(Nanda)は立太子の式を擧げ國美(Janapada-Kalyāni)との結婚式を擧ぐべき筈であつた。佛は宮殿に入つて難陀を尼拘律園へと連れ去られた。難陀の新婦は堪へがたくその歸りを待ち詫びて居たが遂に效がなかつた。と云ふのは第三日目に難陀はその意に反して佛の爲めに無理に出家せしめられたのである。⁽¹¹¹⁾

第七日目に羅睺羅の母は佛の宮殿に入らせ給ふを見その兒に告げて云つた「見よ羅睺羅、彼

處なる出家は汝の父上なり、往いて汝の家産を請へ。兒はその父の所に往つて云うた「出家、我に家産を與へられよ」。されど如來は羅睺羅を精神的家産の嗣續者たらしめんと欲して舍利弗に命じ小童に沙彌戒 (Samanera bhajja) を授けしめられた。この事は濟んだが淨飯王は深く之を怨み是までのことを哀訴して以後何人も雙親の許諾なくしては出家せしむべからずと云ふ特典をその兒に求めて之を得た。

佛

世尊は迦毘羅衛城より王舍城へ歸られ寒林 (Sivana) 中に錫を駐められた。

傳

佛の迦毘羅衛城を發せられ王舍城に達せずして尙ほ末羅 (Malla) 國の阿菟比耶 (Amphya) に留らせらるゝ頃多くの歸依者が迦毘羅衛城に出來た。重なる歸依者は摩訶那摩 (Mahānāma) の弟なる阿那律 (Anuruddha)・跋提耶 (Bhadriya)・阿難陀 (Ananda)・跋婁 (Bhagu)・欽毘羅 (Kimbila)・提婆達多 (Devadatta) 等であつた。之等諸釋王種は出家の目的を以て理髮師の優波利 (Upali) を伴ひ阿菟比耶の方角を指して往つた。迦毘羅衛城から程遠き處で諸釋種はその美麗なる服具を脱ぎ棄て之を優波利に與へた、優波利は一旦之を受取つたが再び思ひ返して己れも諸釋種に從はんと心を決した。一同世尊の面前に來るや入團を許されんことを願ひ且つ己等の慢心を制せんが爲め理髮師に先づ得度を許されんことを求めて容れられた。

世尊の寒林中に御出の時給孤獨 (Anathapindika) の異名ある豪商善施 (Sudatta) と云ふもの含衛城 (Bravasti) から王舍城へ來つた。彼は一友人の宅に宿を取つて居たがその友人から佛世尊の世に出で給へることを聞いて感動し翌朝寒林へ赴いた。彼は世尊の法を説き給ふを聞いて預流の人となつた。翌日彼れ佛を上首とせる僧伽に一大施與をなし、その含衛城の地に來錫あらんことを求めた。

有がたい御迎の準備を調へんが爲め給孤獨は含衛城に歸り十八俱胝の金貨を以て祇陀 (Jetā) 太子から祇陀林 (Jetavana 祇園) を購うた。彼は此に壯大なる精舎を建立し、その中央には世尊の爲めに一丈室 (Gandhakuti) を建て、四周には長老比丘等の爲めに別室を建て、庵房その他のもので設けた。

世尊の含衛城に達せられた日には一大花行列を以て之を迎へ、精舎の境内に入らせらるゝや、給孤獨は世尊に「世尊、この精舎は之を如何に致すべきや」と伺うた。世尊は答へて「之を現當二世の僧伽に供養せよ」と仰せられた。給孤獨長者は佛の御手に水を濺いで檀施の式辭を述べた。世尊は謝してこの供養を受け且つ偈を以て精舎の利益を稱揚せられた。

當時含衛城は拘薩羅 (Kosala) 國の王にして頻毘娑羅王と姻族の關係ある波斯匿 (Prasenajit,

Pasenadi)王の居住せる所であつた。此に又有福なる一商人彌伽羅(Migāra)と云ふものも住んで居てその子の滿増(Pūṅgavaradhana, Pūṅgavadhana)と云ふは央伽(Aṅga)國の跋提耶より來れる財勝(Dhannajaya)及び善意(Sumana)の女にして淑徳の譽れ高かりし毘舍佉(Vishāka)の夫となつた。この女七歳の折世尊は其が佛教信者たるべき機根あることを認めて跋提耶に赴かせられたことがあつた。暫し時を経たる後毘舍佉の家族は沙祇多(Sāketā)へ移住し、彼女はその十六歳の時滿増の新婦として此處より舍衛城へ赴いた。結婚後毘舍佉は佛及び僧伽に對し大なる奉公をなした。その義父はもと裸形外道者那派の信者であつたのを彼女は之を佛教に引き入るゝ助手となつた爲め「彌伽羅の母」(鹿母)(Migāramātā)の異名を得るに至つた。彼女が積んだ今一つの功德は舍衛城に近く東園(Pūrārama, Pubbārama)を建立したことである、之はその壯麗なる點に於て唯彼の給孤獨長者が建てた精舎に劣るのみであつた。此に擧げた話は給孤獨長者の話の後數年にして起つたことに相違あるまいが此には簡短に説及した次第である。

(一)西藏の諸典據では此事件は尙後に置いてある、淨飯王は此知らせを拘薩羅王波斯匿から聞く。西藏佛傳一六頁、ロツクヒル五一頁

(二)Kaṇḍiyyā 北方文献では Kaṇḍiyyā 之は「正時に起き出づる」の意かも知れぬ

(三)西藏佛傳の話は少し違つて居る、王より其兒への手紙は確かに後日の作り事である。父子の對面は東方聖書一九卷二一八頁以下に出づ

(四)此計算は安居の期の三箇月なることを豫想せしめる。ナルダーズ參照、VASSO の條下を見よ

(五)涕羅偈陀五二七—五三六偈は本生物語序品八七頁に出せるやうに六十偈でなくして唯十偈である

(六)法句喻經三三四頁によれば世尊は空中に寶珠の道を作り出し其上に法を説きつゝ、彼方此方と歩かれた。本生物語序品八八頁では此で行はれた奇蹟は Gandamāha (健陀菴羅)樹の下で行はれた奇蹟と同じい。再び西藏佛傳二六三頁では稍々違つて居る。總てに必有の特色は空中を歩くことである

(七)世尊は大覺の後直ぐ之と同じことを考へて居られた、八二頁を見よ

(八)二偈は法句經一六八及一六九偈

(九)本生物語第四四七話、北傳では大事經二の七七にあり。之は羅睺羅受戒の後に起つた

(一〇)本生物語第四八五話、バルハト版畫二七の浮彫に表はしてある。前生の耶輸陀羅に關する他の本生物語は大事經二の六八―九四、一六六に出て居る、緊那利本生物語(九四―一五頁)は忿怒緊那羅本生物語とは違つて居るが要領はヂヴァーヴダーナ四四一頁以下、バドラカルバーヴダーナ二九、アヴダーナカルバラター六四と一致す

(一一)バドラカルバーヴダーナ三五には Nanda (難陀) 及 Nandika (難提迦) は Dhautodana (淨飯)の子とある、此名は Sudhodana と同義たるに相違ない

(一二)西藏佛傳二六五頁を参照せよ、此中には新婦は Sundarika (孫陀利迦)とある、ロツクヒル五五頁には Bhadrā (賢)とある。ピガンデー一卷一八七頁阿難陀の誘惑の話の中で國美は阿難陀の妻として擧げてある。話其物は西藏佛傳二六七頁にあるが之は難陀に關して居る、ハーデーの佛教概論二〇五頁でも亦其通り。バドラカルバーヴダーナ三五では Sundara と Sundarānanda とは Ananda と同義語のやうである。新婦は Janapada-Kalyāni 及 Rāpa-Nanda と同一人のやうである、法句經一五〇偈註、涕利偈陀八二偈及此女の物語勝義燈八〇頁以下参照

(一三)大品一篇五四、本生物語序品九一頁、西藏佛傳二六五頁参照

(一四)巴利では Sitavana 梵語ではまた冗長に Sitavana-smāṣṭina 墓地である、ヂヴァーヴダ

佛

傳

ーナ二六四頁二六八頁、西藏佛傳二五八頁

(一五)尙詳しくは小品七篇の一、法句經一三九頁以下に出づ。ハーデー佛教概論二二七頁以下、西藏佛傳二六四頁二六六頁、ロツクヒル五三頁以下参照。バドラカルバーヴダーナ三五参照。小品七篇の二からして見れば佛は阿菟比耶から憍賞彌へ行かれたやうである、併しピガンデー一卷の一八三頁は西藏傳説と一致する。梵名は Aniruddha, Mahānāman, Bhadraka, Bhṛgu であつて Kimbila はない

(一六)小品六篇の四、雜阿含一卷二一〇頁、本生物語序品九二頁、ポーヂヴンサ四二頁、ハーデー佛教概論二一八頁、西藏佛傳二五八頁、ロツクヒル四七頁、ビルル東方聖書一九卷二〇一頁二三〇頁。異名の北傳の形は Anāthapiṇḍaka である、バルハト彫刻二八版畫及五七版畫では Anāthapiṇḍika である。彫刻の下なる刻文はチルダーズ一八七四年の藝術學會報告書五八六頁六一二頁を見よ

(一七)小品六篇の一によれば同一偈文は他の場合、王舍城の一商人の六十の精舍を供養した時唱へられた

(一八)波斯匿に關せる彫刻はバルハト版畫一三なり、カニングム九〇頁参照

(一九)梵語では *Migama* デヴァーヴダーナ四四頁七七頁、西藏佛傳では誤つて *Migadhama* とす二七〇頁

(二〇)此所の名はデヴァーヴダーナでは *Bhadraṅkara* である、同書一二三頁以下。財勝の父 *Mudaka* (玫荼迦)も亦其徳の勝れたること、其全族の實際上勝れてる通りであつた。 *Mudaka* 或 *Mudhaka* の談は大品六篇の三四、デヴァーヴダーナの同所を見よ

(二一) *Dsaṅgim* (賢愚經)二八品では此女の名は毘舍法の次なる星 *Anuśāha* (阿菴羅陀)である西藏佛傳同所

(二二)更に詳しい物語は法句喻經二三〇頁以下、大品八篇の一五、デヴァーヴダーナ四四頁七七頁四六頁、ハーデー佛教概論二二〇頁以下、西藏佛傳二七〇頁、ロックヒル七〇頁以下。是れ以上の参照はエドワードミユレルの語彙(一八八八年の巴利原典刊行會誌) *Migamata* 及 *Visakha* の條下を見よ

佛

傳

第六章 菴婆波利・耆婆佛毘舍離に赴く・釋迦拘利兩族

間の争鬪・淨飯王の崩御・比丘尼入團の許可・識

摩の歸佛

曾て如來の安居期を王舍城に近き迦蘭陀迦尼婆波 (*Kalandakanivāpa*) 竹林中に過させ給うた時——之は第二第三或は更に後の安居であつたかも知れぬが——頻毘娑羅王は毘舍離 (*Vāśālī*) 城に菴婆波利 (*Amrapālī*, *Ambapālī*, *Ambapālīkā*) と呼べる名高き遊女の居る事を聞き知つた。その城市の繁昌を嫉み且つ之と競争したい考へからして頻王は藝能の上にて菴婆波利にも優れた遊女を己れの國にも置かうと決し、娑羅婆底 (*Sāvāthī*) と云ふ一少女を見附けて遊女に立てた。少時経つてからこの婦王子無畏 (*Abhaya*) の胤を宿して身重となつた。彼女は男兒を生み遊女の習に従つて之を棄て、置いたら偶然にも王子はその嬰兒を看附け之を己れの兒とは知らずながら宮殿へ連れ歸つて名を耆婆 (*Jivaka*) と命じ意を用ひて教育を施した。

耆婆は字して鳩摩羅跋遮 (*Konāra Bhacca*) と云ふ、物事を辨へる年齢に達してから徳叉尸羅 (*Takṣasīla*) へ往つて有名なる博士の下に醫學を修めた。七年間修業の後耆婆は醫術に熟達しそ

の師は又之を認めて暇を遣はした。追々と時を経るに従つてこの年少醫家は其の優れたる手腕を示すべき幾多の機會を得た。彼は——他の場合は擧げなくとも——優禪尼 (Ujjaini) の波羅殊提暴王并に頻毘婆羅王の病を治した。頻王は彼をその常任侍醫に任じた。

或日佛は便祕に惱まれたことがあつた。耆婆は招がれ、極めて軟かなる下劑を用ひて時の間に世尊の病を美事に治癒した。

耆婆が世尊に對して有用の身となつたのは當にこの手際よき治療の爲めばかりではない、耆婆は又波羅殊提王が耆婆の醫藥の功勞に對し謝意として贈つた二點の美事なる衣地を佛に獻じた。世尊はこの供養物を受け給ひ且つ比丘衆を集めて信者の獻する衣服を著ることを許された、併し又希望のものには襪褌の衣をも用ふることを許された。

第三の雨期中竹林精舎に駐まらせ給うた時毘舍離人はその代表者を送つて、世尊に彼等の國を荒したる恐ろしき疫癘を攘はせ給へと願うた。先きに彼等は六師外道 (Tirthiya) に頼つて救濟を求めたが効果がなかつたので今は佛に救ひを願ひ出たのである。佛は喜んで彼等の求めに應じ、王命によつて設けた道を辿つて恒河の南岸に進まれた。河の北岸にて離車 (Licchavi) の貴族等は極めて恭しく世尊を迎へた。世尊の足をその國に踏み入れ給ふやこの疫癘の源と爲つて居

佛

傳

た惡は去つて病者は健康を復した。城中に入つて如來は『寶經』(Ratana-Sutta)を誦せられ無數の人を度せられた。幾多信心の供養物を受けて後王舎城へと歸られた。

次の三雨期は世尊竹林中にて過させ給ひ、第五の雨期中世尊は毘舍離に近き大林の重閣講堂 (Kāṭāgāra) 中に留まらせ給うた。この頃釋迦 (Sakya) 拘利 (Koliya) 兩族間にローハニー (Rohini) 河の水に就いて紛争が起つた。この河水は非常なる旱魃の爲め兩岸の田地に灌ぐには足らなかつたのである。喧嘩は嵩じて遂に戦争ともなつたであらう、但佛は天眼を以てその成行きを見そなはされ空を飛んで兩黨將に戦はんとする所へ急ぎ來られ彼等を動かしてその武器を擲たしめられた。この際陳べられた能辯なる説教は大なる効果があつて數多の歸佛者が出來た。

この事件の後久しからずして佛は父王病危篤の報を得られたのでその從屬二三を率ゐ直ちに空を飛んで迦毘羅衛城に赴かれた。病王の前に來つて世尊は一切法の無常なることを説かれると淨飯王は第四果即ち阿羅漢果に達し、此に四度その兒を拜して涅槃に入られた。

主妃憍曇彌 (Gāndhāri) はその配淨飯王の崩後世を棄て、宗教的生活に入りたいたと云ふ希望を抱いた。夫で世尊の榕樹園中に留まらせ給ふ時世尊の所に往つて比丘尼となりたいたと願うた。佛は婦人の入團を許す心がなかつたので之を拒まれ毘舍離へと歸られた。

その意志を放擲するなど云ふ所でない、夫王を失へる女王及び他の婦人等はその髪を斷ち黄衣を纏うて徒步毘舍離へと赴いた。之等婦人の塵を浴び足を腫らし涙に浴びて重閣講堂に著した時、阿難陀尊者は彼等に接見しその旅行の目的を確めた後世尊の所へ往つて彼等の爲めに辯護した。初め佛は婦人を僧伽中に入れることを望まれんだが、阿難陀が憍曇彌の實母の如く世尊を庇くみしことを申し上げると世尊はこれに許諾を與られた。但し夫人は八箇條の服從 (sarradhama) の義務に服すべし、と云ふ條件を附せられた。憍曇彌は喜んで之等の義務に服すべしと約し、それで他の婦人等と共に比丘尼となつた。

假令阿難陀の哀願を許しはし給ひしもの、世尊は婦人の入團許可に伴ひ生すべき危険なる結果は何處までも承知された、世尊は阿難陀に「若し婦人の入團を許すことなかりせば、善法は一千年間世に立つべかりしを、今は貞潔と神聖とは永續すまじく、法は唯五百年間存するのみなるべし」と仰せられたが世尊の疑懼は次の如き出来事によつて眞なることが分つた。婦人連は憍曇彌の如きですら折々激昂し、後年世尊の舍衛城に居給ひし時、或比丘尼等は無慚恥の行を爲して公衆の憤を買つたこともある。

毘舍離から如來は舍衛城に赴き茲で第六夏を過し、夏の終りに王舍城へ移られた。世尊の竹

林園に留らせらるゝ中頻毘婆羅王の妃識摩 (Khemā) 歸佛のことが出来た。己れ的美貌を誇として識摩は世尊に見ゆることをしなかつたが、或日のこと妃が竹林園中にうさ晴しをして居た時、國王の劃策によつて妃は世尊の前に連れ出された。世尊は妃の慢心を矯めんが爲めにその神力を以て天より降れる天女の如き美婦を作り出された。妃がその化像を熟視して居る中に世尊は之に少年中年老年及死の四期を過ぎ行かせられた。この恐ろしい有様を見た爲め妃は世尊の教を聽かんと志し、世尊の偈を唱へらるゝを聞いて直ちに初果に達した。或は阿羅漢果を得たとも云ふ。その羅漢果を得る前、識摩は魔王の誘惑に逢うたが幸にして之に克つた。

(一) 北傳では Kalandaka-nivāpa 例之デヴァーワダーナ二六二頁、或 Kalandaka-nivāsa

(二) 彼女の身上話及其前の話は勝義燈二〇七頁以下に、彼女の作となる涕利偈陀二五二—二七〇の高尙なる詩句の註として擧げてある。ロツクヒル六四頁、西藏佛傳二五三頁參照、同書には此女を頻毘婆羅の配で無畏王子の母としてある。巴利の典據涕羅偈陀六四偈の註及勝義燈二〇七頁では彼女頻毘婆羅王との間に一子 Vimala-koṇḍañña (無垢憍陳如) 長老を有つて居る、前の方の文句では彼女の名は謎名 Dumavahya (樹稱)、王の名は Paṇḍaraketu (白旗) と擧げてあ

る。無畏王の歸佛は中阿含第五八に出づ。

(三)耆婆の話は小品八篇の一、中阿合一卷三六八頁以下に出づ。ロツクヒル及西藏佛傳二五三頁参照、此では耆婆は頻毘婆羅が私通して設けた子とある。

(四)之は梵語の *Kaunābhīya* に當る、併しデヴァーワダーナ二七〇頁及五〇六頁では *Kunārahīta* と同じる。ロツクヒルの西藏語で *Gdzon-nus-egsos* としたのは全くの思ひ付き、之等の語は明かに「子供の療治法」即ち *Kaunābhīya* を指す、ヤスケの西英辭典の其條下を見よ。

(五)縦合世尊は死と病との窮極の原因即ち無明を除いて以て之等に打勝たれたりと云へ、其前生の業の結果は全く盡されては居なかつた。されば世尊も人間の病氣は免れ得なかつた。

(六)ハーデー佛教概論二四九頁に據れば、之等のことは第二十年目に起つた。

(七)之等諸師に就いて更に詳しくは後に出づ。

(八)毘舍離へ御出のことは更に詳かに且つ幾らか違つて大事經一の二五三、ハーデー佛教概論二二六頁に出て居る。西藏佛傳二八五頁参照、同書では此事件は大變後で阿闍世王治世の時に置いてある。寶經(一八七〇年の王立亞細亞協會誌三一八頁チルダーズ刊行、フランクフルテル手引書八五頁)は大事經一卷二九〇以下 (*Sastayana-Gatha* 福行偈) に其對經を有つて居る。

(九)大事經に記載してある供養物の中に沙羅林がある。之は *Gosāngi* (牛角女) の献じたるもので、彼は佛を供養に招くに鸚鵡を送つた。同じ話は西藏佛傳に菴婆波利に就いても云つてある。

(一〇)佛の安居期を過ぎたと云つてある諸所の前後は違へて出している、吾々はビガンデーの順序による、實際の歴史的年表は問題外である。大林はビガンデー一卷二〇四頁には沙羅樹林と特記してある、之は牛角女の供養せし沙羅林と同一のものらしい。

(一一)法句喻經三五二頁、本生物語五篇四一二頁。ハーデー佛教概論三〇七頁参照。

(一二)橋曇彌に關して委細は勝義燈序文二頁のエドワードミユレルを見よ。

(一三)之等の義務及橋曇彌入團許可の話全體は小品一〇篇の一を見よ、ハーデー東方寺院組織一五七頁、佛教概論三一二頁、ロツクヒル六一頁参照。比丘尼團の設立は西藏佛傳二六八頁によれば第七年目にあつて、ビガンデーの年表と殆んど一致する。

(一四)不正行爲の例は小品一〇篇九一二七に述べてある。

(一五)勝義燈一三三頁六六―七〇偈、法句經三四七偈参照。

(一六)勝義燈一二六頁以下、其處に出せる阿波陀那の引用文を併せ見よ。法句喻經四一二頁参照。

(一七) 涕利偈陀一三九以下の美はしい偈、雜阿含五卷四の二以下を見よ、Caroline Foley の Women Leaders of the Buddhist Reformation (佛教的改革の婦人指導者)三一〇頁参照。同じ歸佛の話は難陀に就いて云つてある、同書二八頁。アヴダーナサタカ八の九にある波斯匿王の女兒識摩は異つた女なること明白である

第七章

諸外道師狼狽す・佛天界に上り摩耶夫人に
阿毘曇を説く・僧伽舍へ下降・戰遮・僧伽中の
軋轢・佛曠野中に棲む・歸還・稼人の喩話・其他
の事件・善覺の責罰

世尊の對敵の中で一番先きに立つたものは外道 (Tirthika, Tirthya, Tirthiya) 諸派の六上首即ち富蘭那迦葉 (Purupa Kassapa)・末伽黎拘舍羅 (Makkhali Gosāla)・阿耆陀翅舍欽婆黎 (Ajita Kesakambali)・波鳩陀迦多衍那 (Pakudha Kaccāyana)・尼乾陀若提子 (Nigantha Nataputta)・刪闍耶毘羅胝子 (Sañjaya Belatthiputta) 等であつた。之等の諸師は何れも無數の信者を擁して居たが尙ほ世尊——彼等の常に沙門瞿曇と呼びたる——の成功を嫉むを禁ずることが出来なかつた。その中の一人刪闍耶は舍利弗目犍連が佛の弟子となる前の師である。彼も他の外道輩も毘舍離國の惡疫に對しては共にその無力を證明したが佛は不思議にも之を退治された。

世尊の王舍城邊に留らせ給ひしうち、この地の一豪商旃檀木の一片を手に入れたことがあつた。彼はこの木片を以て鉢を刻ませ之を水平に懸けて幾本も接ぎ合せた竹竿の頂上に吊るし上

げて云つた「沙門婆羅門にして神通力を有するものあらば乞ふこの鉢を下ろせ」。六人の外道等神通力を持たぬことを自覺して代る／＼豪商の家に赴きこの鉢を我物にせんと試みたが彼は之を刎ね付けた。時に目隼連・賓頭盧波羅墮闍(Pindolabharadvāja)の二人この鉢を見て之を取り下さんことを互に勧め合つた。賓頭盧は空中高く昇り鉢を取つて三度城内を廻り公衆を驚かした。世尊この事を知り給ふに及び、賓頭盧が詰らぬ木鉢の爲めに神通を示したことを責められ「之は未歸依者の歸依の爲めにも已歸依者の増上の爲めにも利することなからん」と仰せられた。その結果として世尊は比丘の信者の面前に於て神變奇蹟を行つて神通力を現はすことを禁せられた。この禁制は世尊自ら奇蹟を行ふを罷めらるべしと云ふ意味ではなく、尙又佛弟子達として如何なる事情の下にも神通を現はしてはならぬと云ふものではなかつた。やがて頑迷なる外道輩を驚かす爲め世尊の神通力を大々的に示現し給ふべき必要あることが分るやうになるのである。

外道輩は自分等の計策に對し頻毘婆羅王より何等の策勵をも得なかつたので、更に大なる成功の望みを抱いて舍衛城なる波斯匿王の所に赴いた。佛は此にどんな事があつてゐるかを知り且つ舍衛城は所有ゆる往昔の佛の最大奇蹟を示された所であることを願うて、その首都へと旅行

し逝多林中に錫を留められた。著後數日にして世尊は波斯匿王・六師外道及び無數の群衆の面前で大神通示現を行はれた。世尊は空中に於て東西の地平線に亙つて一大通路を作り出され、自ら之に昇つて無類の奇瑞を示された。先づ赤光現はれ、次に黄金の如く光り輝く光明現はれ普く全世界に溢れ渡つた——之は世尊の大覺の座に昇られた時世人が見たのと同様の現象である。世尊はこの高座の上から有情の爲めに法を説かれ、之を聽聞せし輩は四諦の理を解するに至つた。

六師外道は困迷して全然力を喪つて了つた爲め世尊は「螢は太陽の照さる間は光を放てども、一旦大光明昇り出れば蟲はその光に壓せられ更に光を放つことなし」と告白されたが之は全く正當のことである。富蘭那迦葉曾て世尊の奇蹟や教誡の効を空じうせんと巧んだが之は全然不成功に歸した。失望の餘彼はその首に大なる瓶を結び付け河に身を投じて溺死しその業に隨つて最下の地獄阿鼻地(Avīci)に墮ちた。

大神通を行つて後三十三天に上ると云ふのは諸佛の定法である。如來は己れの影像を作り出した後此に消え失せ、その母摩耶夫人に阿毘曇を説かんが爲め天に昇られた。日々行乞の爲め地上を廻らねばならぬので世尊は自らその像を作られた。之が暫し留守の間續いて阿毘曇の

法を説いたのである。

世尊は三箇月間天界に留まれ將に下降せんとさるや、帝釋天は毘首羯磨天に命じて三層の梯子を造り、その足基を僧伽舍(Sanghaya)城の近くに据ゑさせた。梵天を右、帝釋天を左に脇侍として如來は下降せられ、僧伽舍城邊諸佛下天の際に足を著くべき所に降りて來られた。(七)この所に名高き一祠建立された。

僧伽舍より佛は舍衛城邊の逝多林へ赴かれた。諸外道輩は世尊の名聲の益々揚り自分等の利得の減ずるを見て愈々憤り、正直なる手段を用ひては果し得ぬことを今は讒謗を以て遂げんと試みた。この目的を果す爲め彼等は自教派の信者にして戰遮(Chinda)と名くる年少の一婦人を誘ひ瞿曇沙門は己れと不淨行を行つたと云つて世尊を誹毀せしめんとした。狡猾なる婦人は逝多林に頻々往問すると見せかけて巧みに世の疑念を惹起し且つ懷妊せる人のやうに見せかける爲め一種の手段を案出した。第九箇月目に及んで晡時この女は世尊の法を説かせらるゝ所に出て來た。此に參集せる群衆の面前に於て戰遮は佛をその懷妊の主であると云つて誹り、且つやがて來るべき分娩の場所を用意されよと迫つた。

如來はその説教を中止され轟く音聲を以て「妹、汝の語の眞なるや眞ならざるやは我と汝の

傳

佛

外知るものなし」と答へられた。不思議なる哉この瞬時。帝釋天は若き鼠に變身せる四天使を連れてその場に現はれ出た。糸を以て木球を結び懷胎せるやう見せかけて居たのであるが鼠がその糸を咬み切つた爲め球は地上に落ち奸邪なる戰遮の脚を碎いた。衆人は憤つて嘲罵し追跡した。すると同女は大地の奥から立ち上る火焰の中に消え失せ阿鼻地獄の底へと墮ちた。

第八安居は跋伽(Bhargha)國のブーサカラ(Bhesakalavana)林の鹿園中鱷山(Sinsimāragiri, Sinsimā)内に行はれた。この時王菩提(Bodhi)はコーカナダ(Kokanada)宮を建て上げて居たので幼年の一婆羅門を送つて世尊及び大衆を供養に招した。世尊はその招に應じ王宮に赴かせられた。王は宮殿の最下層に至るまで白色の布帛を敷かせ佛を迎ふる爲めに出で來つた。佛は進み寄られたが最下段に立ちて更に進むことをなし給はず、阿難陀に意味ある目示を爲し給ふと、阿難陀は王に「王この布帛を取り去らしめよ、世尊は脚に布片を踏ませ給ふことなし。是れ佛は極めて賤しきものに對しても慈念を抱き給ふが故なり」と云うた。布帛を取り去ると佛は殿中に入つて團衆と共に座に就いて供養を受けられた。食を終つて後世尊は法を説いて參會せる人々に法益を與へ、比丘の布帛を踏むを禁するの律を設けられた。世尊は跋伽國より舍衛城へ赴かせられた。

南方所傳の一傳説に據れば世尊は第九夏を憍賞彌の瞿史多(Chositarāma)園中に過された。佛の此に留まらせ給へる中、僧伽兄弟の間に悲しむべき軋轢が起つた。一人の比丘それと知らずに僧伽の規律を破り、爲めに他の一人より非難を蒙り、之に對して又抗議した。兄弟中或は前者に與みし或は後者に與みし爭論は一層烈しくなつた。佛は幾度となく之を宥めんと手を盡され、拘薩羅國長災王(Dighthi)の兒長壽王子(Dighayū)の美しき物語を話されたが、世尊の智慧も親切なる諫言も更にその効なかつた。この有様に對し世尊は終に厭氣を起され善良なる訓誡も斯かる愚人輩に對しては寸効なしと悟り、比丘の中に於て先づその場に應ずる偈數首を唱へ一同を後にして去られた。是れより世尊は隱遁生活にその身を委ねんが爲めパーラコロナカラ(Balakulopakāra)の村へ赴かれた。途中跋婁(Bhagu)長老に會し更に東竹園(Painnavamsidaya)に赴かれた。此處には阿那律・難提耶・欽毘羅等が全く一致和合の中に日を暮して居た。一同懇ろに世尊を迎へ世尊は一場の説法を以て彼等を利喜し更にパーリレーヤカ(Pāṭileyaka)へと進み行かれた。此處に所護林(Rakkhitavana)中跋陀羅(Bhadra)沙羅樹の下に住し獨居の樂を受けられた。此處に近く一頭の氣高い象が棲んで居たが、之はもとその同勢中の群衆から非常なる邪魔を受けた爲め、その群を離れて此處に來たのである。彼は世尊の所に來り飲食物を調べ、その閑

寂なる生活を樂んだ。是れは今まで己れに大なる迷惑を掛けた群衆と離れて暮して居るからである。佛はよくこの動物の思惑を解せられ偈を唱へて同情の意を洩された。

暫しパーリレーヤカに住はれた後世尊は舍衛城へと赴かれた。それと同時に憍賞彌で騒動を起した比丘達は同城内の信者連からして甚しい侮蔑を蒙つたので、舍衛城に赴き世尊の前でその問題を處決して貰はうと決した。相争へる兩黨は舍衛城に著して更にその事件を世尊の前に提起し、世尊は適法の判決を申渡して僧伽の和合を復せられた。

第十一雨期中如來は王舍城近く留まらせられた。一日世尊南山地方一芳村(Ekanāla)に居給うた時婆羅墮闍(Bharadvāja)婆羅門の自己の畑地で稼人等を指圖して居るのを見られた。佛を見るや否や、婆羅門は「汝沙門我は鋤き且つ蒔き、之にて我が衣食の料を得。汝も亦鋤き且つ蒔きて生活せよ」と申した。世尊之に答へて「婆羅門我亦鋤き且つ蒔き、之によりて我が食を得」と云はれた。婆羅門はこの答を聞いて驚き「敬すべき瞿曇、我は汝の軋・犁頭・刺針或は牛を有することを知らず、然るに如何ぞ汝は又稼人なりとは自稱するぞ」と云つた。次に世尊「信は我が蒔く種、專念は雨、謙卑は犁杆、心意は軋綱、正念は我が犁頭及び刺針なり。誠實は縛の法にして柔和は解脱の法なり。精進は我が聯獸と手にして樂地に導き退轉なくして無憂

畏の所に赴かしむるものなり」。

婆羅門はこの一場の噺話の爲めに深く心を動かされ歸佛者となりその信仰を自白した。

第十二夏中世尊は毘蘭闍市(Verulja)に近き所に留まらせ給うた。この時某婆羅門來つて世尊を訪ひその信者となつた。その婆羅門の招に應じて佛は毘蘭闍に夏中を過され解夏の後欸待措かざるこの新歸依者に別を告げ國內至る所徳叉尸羅に近きソレーヤ(Soreya)の邊まで旅行された。夫れより僧佉舍(Sankasya)・廟徳夷(Kanauj)・鉢邏耶伽(Prayaga)に及び此で恒河を渡り婆羅奈斯城に向はせられた。この城より毘舍離へ往つて此處なる重閣講堂中に居を定められた。

傳

佛

第十三夏は舍衛城及びチャリカー(Calica)にて行はれ、次の夏は逝多林で行はれた。この時羅睺羅は齡二十歳に達したので具足戒を受け、同年世尊は迦毘羅衛城を訪はれた。

榕樹園に留らせらるゝ中、佛は岳父善覺よりして非常なる侮辱を受けられた。或日のこと善覺は如來の行乞の爲め城内の某區を廻らせらるゝと云ふことを聞いて酒を飲み酩酊して出で行き街路の中央に突き立つて佛の通行を遮り且つ毒々しく佛を罵つた。世尊は徐に阿難陀に目示され、一週日の後善覺が生きながら大地に呑み込まらるゝだらうと云ふ豫言を述べられた。善

覺は豫言を聞いて之を一笑に附し去り、その週中宮殿の塔中に留まつて以て容易く身の敗滅を免れ得と信じた。併し善覺は地上如何なる所でも惡業を犯せるものは逃場のないことを悟らざるを得なかつた。その命數盡きたる日に大地は善覺の脚下より裂けて彼はその罪業の罰として深淵の中に落ち下阿鼻地獄の底へと沈んだ。

(一)北方文献ヂヴァーヴダーナ一二及大事經一の二五三では彼等の名は Purāṇa Kāśyapa 或 Kāśyapa Purāṇa, Maskarin Gosāliputra, Ajita Kesakambala, Kakula Kāśyāyana, Nirgrantha Jñātiputra, 及 Satjajin Vairatiputra である。彼等の教説は Sāmañaphala-Sutta (沙門果經、長阿含一卷第二、譯文ビュルヌーフ法華經四四八頁) に載せてある、ロツクヒル九九頁以下参照、支那文のものは南條博士目錄二五五頁、耆那の立脚地より見たる末伽黎拘舍羅の教理は Lehmann の書二四九頁を見よ

(二)小品五篇の八、譯文東方聖書二〇卷七八頁。ロツクヒル六九頁参照、同所にてこの人の名は Jyotiska である、多分法句噲經二二二頁の Jotiya であらう

(三)ヂヴァーヴダーナ三九九頁によれば、この人は阿輪迦治世の末年には尙生きて居た

(四) デヴァーヴダーナ二 (譯文ビュルヌーフ緒論一六二頁以下) ロックヒル七九頁、ビガンデー一卷二二六頁以下参照

(五) 法句喻經三三八頁の語参照、「諸外道は太陽の昇れる後の螢の如くなりき」

(六) ビガンデー一卷二二二頁以下。西藏佛傳二七二頁参照

(七) ビガンデー一卷二二五頁以下、デヴァーヴダーナ四〇一頁、西藏佛傳二七三頁、ロックヒル八一頁、法顯傳譯四七頁以下、玄奘傳記譯二卷二三七頁以下参照。この梯子はバルハト版畫一七には中央の仕切りに表はしてある

(八) *Circa-Māyikā* (少女戰遮)

(九) 法句喻經三三八頁、本生物語四篇一八七頁、法顯傳譯六〇頁。フェールの一八九五年亞細亞誌二〇〇頁以下参照

(一〇) 西藏佛傳では *Bhesakalā* の代り「*Bhayaṅkara* 夜叉の鹿苑」とあり、巴利の *Bhagga* に對し誤つて *Vagga* とある。ビガンデーでは第八の安居は舍衛城滯留の直ぐ後に來る、併し小品五篇二一では佛は毘舍離から來られる

(一一) *Sinsūmāra-giri* 巴利 *Sinsūmāra-giri Sinsūmāra* は *Kumbhila* と同じことである。

傳

佛

而して、この動物は足を有つて居るから梵語で之に當る語は確かに *Susūta* 一の二〇五にある *Delphinus Gangeticus* (恒河海豚) ではない

(一二) 小品五篇二二

(一三) ビガンデー一卷二三四頁

(一四) 即ち瞿史多の園。 *Ghosita* (北方原典では或 *Ghosila*) は跋蹉國の王優填那王 (*Udayana* 巴 *Udana*) の三大臣の一人で首都憍賞彌に居た。優填那は印度の物語では通俗の人物である。彼の物語の佛教傳のものは法句喻經一五五頁以下、デヴァーヴダーナ五二八頁以下、西藏佛傳二六九頁二七六頁を見よ、彼の三妃は *Samavati* (舍磨嚩底) *Vasudatta* (婆須羅達多) 及 *Magan-tiyā* 或 *dika* (摩建備迦) である、北傳では *Syamavati*、外道摩建備迦の女 *Anupama* (無比、明かに南方傳の *Māgandikā* と同じ) 及他の諸典據より知らるゝ *Vasavadattā* である。佛に園を獻じたのは瞿史多であつた。法句喻經一六七頁、法顯傳譯九六頁、茲でレツグの *Gochira* とせるは *Ghosila* でなくてはならぬ、ピール東方聖書一九卷二四五頁参照。北方諸典據に出てくる園の名は常に *Ghosāvatārāma* である、西藏佛傳二七六頁三一六頁。非信者摩建備迦に就いては彌蘭陀問經三三一頁、中阿含一卷五〇二頁以下、法句喻經一六二頁、須多尼波多一五七頁を

見よ

佛傳

- (一五) 大品一〇篇の二、本生物語三篇二二頁四八九頁、法句喻經一〇四頁以下
- (一六) 大品一〇篇の三、法句經三一六、三二八—三三〇偈、須多尼波多 *Khaggavisāṇa-Vutta* (犀經) 一一及一二偈参照。大事經一の三五七—三五九 *Khaggavisāṇa-Gāthā* (犀偈) 参照
- (一七) 橋賞彌に於ける不和の詳しき物語は大品一〇篇一—四、法句喻經一〇三頁以下に含まれて居る。本生物語三篇四八九頁参照。パーリレーヤ象のことは本生鬘一九、三六に記してある
- (一八) 大品一〇篇の五、幾分特色ある物語で大品中に出た居らぬものは法句喻經一〇七頁に出で、*ピガンデー* 一巻二二六頁と一致する
- (一九) 雜阿含七卷二の一、而して幾らか違つて須多尼波多第四、*リスデビツ* 教授の佛教一三四頁参照
- (二〇) 梵語ではこの都會は *Vairanti* と稱せられ、*Vairantiya* (巴利では *Verañjo*) は形容詞で、複數形 *Vairantis* は *アヴダーナカルバラター* 二七頁では國及人民の名稱である
- (二一) 須多毘崩伽一篇一及四
- (二二) *ピガンデー* 一巻二四〇頁ではこの通り。北方傳説では佛は第十二雨期を東園にて過さ

れ、十三雨期を逝多林に、第十四雨期を *Nadika* (那提迦) に近き *Minsapa* 林に過された、西藏佛傳三一五頁

(二三) 同様 *ハーデー* 佛教概論一五二頁三三九頁、併し極めて不思議なことには一三四頁には善覺は摩耶夫人の父と叫んであること西藏佛傳二三四頁同様

(二四) 法句經一二八偈

(二五) 善覺は佛或は佛弟子に對する極惡罪の爲めに斯の如く處罰された五人の一であつた、他の四人は提婆達多、難陀少年、難陀迦夜叉、及戰遮、彌蘭陀問經一〇一頁

第八章 アーラギー夜叉・阿難陀の選任・鴛鴦摩羅の

濟度・孫陀利殺害・給孤獨の女兒

世尊は迦毘羅衛城より祇園精舎へ歸らせ給うた。此處よりアーラギー(Alavi)と云ふ所へ進み茲に残忍なる夜叉があつてこの地の兒童を啖つて居たのを首尾よく濟度された。佛この怪鬼の前に出て來られると彼れ佛を侮り且つ脅迫した。されど漸々佛の柔和と忍辱とに化せられ、その胸中次第に柔しい情念の湧き出るを覺えて終には「沙門我は汝に數條の事を問ふべし。汝若し之を解くことを得ずば我は汝の心を裂き汝を恒河に投ずべし」と云うた。世尊は穩かに夜叉の問をなさんことを恕し直ちに之に答へて問者に満足を與へ給うた。夜叉は信者となつてその生を改めた。その後この事のあつた所に一精舎を建立した。

アーラギーから王舎城へ赴かれ此處で竹林園中に第十七夏を過ぎられた。夏期終るや世尊は再び國內至る所に法を説いて歩かれ、舍衛城に暫時留つて後又々アーラギーへ來著せられた。第十八夏はチャリカーに近き山上に過ぎされ次の夏は竹林園中、而して第二十夏は逝多林中で過ぎられた。阿難陀の釋尊侍者の選任を受けたのはこの年の事であつた。この頃のことです今一つ重要

なる出來事は拘薩羅國で名高き盜賊で人殺しなる鴛鴦摩羅(Angulimala)の歸佛である。色々悪い噂が立つたが臆せらるゝことなく世尊は林間なるこの盜賊の棲家へと赴きその平順心を以て首尾よく憐愍なる鴛鴦摩羅の兇暴を制せられた、彼は遂に歸佛者となりしのみならず暫時の間に阿羅漢果を得て大に僧伽中の兄弟を驚かした。併し世尊は一同に向ひ鴛鴦摩羅はその犯罪性を滅したので斯く速かに完果を成じたこと示された。

世尊の逝多林中に留らせらるゝ中、敵なる外道輩は再び世尊の盛名を汚さんと企てた。彼等は比丘尼孫陀利(Sundari)を殺さんが爲め數人の兇漢を雇うた。兇徒は殺害を行ひ孫陀利の死屍を逝多林精舎に近き森林中に放棄した。死屍の發見さるゝや外道等は此の罪を犯せるものは瞿曇に外ならずと噂して居たが偶然のことから實際の犯人發見され外道等は不面目な目を見た。

この頃のこと給孤獨はその女を央伽國なる知合の兒に娶はした。この知合と云ふのは裸形外道の信者であつたので長者はその女の信仰を惑亂されんことを恐れ、眞信を持続させんが爲め一群の婢女を附けてやつた、若婦人その新家庭に入るや義父は之に裸形道士に對し敬意を表せよと迫つた。之等外道の風體を見て嫌氣を起し少婦は之を見ることがすらも拒んだ。この事深く義父の憤りを買うたが婦は尙ほその信仰を堅く維持し佛及び僧伽の勝れたる徳を絶えず稱歎し

たので義母その他城内の婦人佛を見、佛の説法を聴聞したしと云ふ熱心なる希望を起すに至つた。

佛は早朝天眼通を以て閻浮提州中隈なく見渡され央伽國に起れるこの事を認めて、やがて五百の門弟子を伴ひ空を飛び來つてこの商家の庭園に降らせ給うた。その家にあるものは總て世尊及び弟子達を見て喜んだ。一同熱心に世尊の説法を聴聞し全家及びその他多くの人々共に佛の歸依者となつた。阿那律を央伽國に留めて轉教の業を成就せしめ佛は舍衛城へと還られた。

第二十夏中の出來事を語り終れば世尊の傳記上「殆んど全然空地」を生ずるに至るのである。二十三年の間と云ふものは——種々の小事故は或はこの間に入るやうにすることも出來やうが——佛の所行の概略をも窺ふことが出來ない。西藏の釋迦牟尼傳には事實を年代順に配列したやうなものがあるが、この中には南方の書によればずつと前の時代に屬することも少くない。

傳

佛

(一)吾々は婆羅門 Pokkharasādi の歸佛を多分この時代に著けねばならない、北方文書ではこの名を梵語化して Pankarasādi とせず誤つて Puskarasādi としてある。Ambattha-Sutta 及 Tevijja-Sutta (阿摩晝經及三明經、長阿含第三及第八)、須多尼波多一一二頁を見よ、ロックヒル

八二頁及特にデヅャーヴダーナ六一—六五九頁の興味ある Sandālavādāna (虎物語) 參照、ピユルヌーフ緒論二〇五頁以下

(二)この問答のことは雜阿含一〇卷一二、須多尼波多一の一〇を見よ。ピガンデー一卷二四六の話及ハーデー佛教概論二六一頁以下の不同を參照せよ

(三)Alavi は梵語の Alavi で西藏佛傳三一五頁に「林村」と名けてある所に相違ない、茲には一精舎があつて佛は二十九夏を過されたと云ふことである。之は拘薩羅と摩揭陀との中間に位して居た。この精舎は雜阿含八及小品六篇の一七にあるアーラギーに近き Aggālava の祠と同じいかも知れぬ、之等書中吾人は世尊のアーラギーより王舍城に赴かせられたことを讀むのである

(四)ピガンデー一卷二四八頁以下

(五)巴利で upatthāka 梵語佛教文書中では upasthāyaka 他の書では upasthāyin, upasthāyika, upasthākar ロックヒル八八頁參照

(六)ピガンデー一卷二五四頁、ハーデー佛教概論二四九頁以下に更に詳しい話出づ。法句喻經一四七頁三三七頁四三四頁、彌蘭陀問經四一〇頁參照。悉曇魔羅の物語はアーラヴカ夜叉の

物語と共通の特點を有すること多い故西藏佛傳三一五頁でアータギ—精舎の建立を鸯崛摩羅—
—之は西藏語の Tas-skyud (手列)で示してあるに相違ない——の仕事としてあるを見るは不思議ではない

(七) 嬪陀那四三頁、アワダーナカルバラター二七頁七〇頁、茲ではこの女を Parivajika (女遊行者)と稱してある。涕利偈陀三一—三三七偈はこの女の作としてある、その歴史は勝義燈二二八頁以下

(八) 彼れの二女 Mahasubhadda (大善賢) 及 Cullasubhadda (小善賢)は本生物語序品九三頁に擧げてある

(九) この物語の著しい北傳は西藏佛傳二八三頁中に出て居る、茲で給孤獨の女は Sumagadha と名けてある

(一〇) ビガンデー一卷二六〇頁

第九章 提婆達多と阿闍世・阿闍世の歸佛・釋迦族滅亡

紛亂事件の新時代は——その歴史的性質に就いて人の觀る所如何ならんとも——頻毘娑羅王が死し、その子にして父王を弑せし阿闍世 (Ajatasattu, Ajatasattu) が王位に昇つた時から初まると云ふことが出來やう。之は佛の齡七十二歳に達せられた時のことであつた。

(一) この時代よりもすつと前に提婆達多の胸中既に佛に對する敵意が萌して居た、佛の名譽と勢力の加はるにつけ猜忌の念に堪へなかつたのである。己れの神力を以て彼は太子阿闍世の寵を得、その有力なる保護によつて何時か比丘衆の首領たらんと望んだ。

(二) その後暫らく經つて世尊の竹林園中に留り、法を説かせられつゝある時、提婆達多は座を起つて恭しく、世尊は最早老年に渡らせらるれば比丘衆の首領株を己れ提婆達多に譲らせ給ふべしと發議した、三度繰返して之を願つたが彼は斷然刎付けられた。この時から提婆達多は世尊に對して惡意を構へた。

この事件によつて世尊は僧伽に令し提婆達多は不實の漢たることを證するもの且つその言行は佛法僧の三寶に由來せりと認めてはならぬものと公然擯斥せしめられた。

擯斥の沙汰は舍利弗數多の比丘を率ゐて之を行うた。提婆達多は憤りて韋提希子(Vaidelīpī-
 三三)阿闍世の所に往き頻毘婆羅を弑せよと唆かした。「汝は父を弑して王となれ我は世尊を弑し
 て佛とならん」と言つた。王子は逆徒の煽動に心を傾けその弑逆の計略を遂行せんとした時看
 破され國王の前に引出された。國王は寛仁の心を以て位を譲り國を阿闍世に渡した。

夫れから提婆達多は阿闍世の所に赴いた、是れ瞿曇の生命を奪はんとするその計略に對して
 王の援助を得んが爲めである。王の承諾を得たので逆徒は佛を殺害する爲め十六名の人を雇う
 た。之等の兇徒が佛を見た時、何者かに威壓されたやうな思がしたので佛の足下に平伏しその
 惡意を白狀して歸依者となつた。一人は提婆達多の所へ歸つて世尊の生命を取ることとは不可能
 であると申述べた。提婆達多はその罪意を果す爲め今は他の手段を執つた。彼は世尊の耆闍崛
 山(Gṛdhrakūṭa)の下で樹蔭を歩ませられつゝある時を見計らひ、その敵を粉碎せんが爲め一大
 石塊を投げ下した。併し兩山巔は寄つて來てその石を受け留めた爲め唯一破片が佛の足から血
 を流したのみである。時に佛は上を見て提婆達多に向ひ「汝愚人、大なる哉汝が己れの爲めに
 造りたる惡業」と宣ひ更に比丘衆に對して「提婆達多は此に極惡罪の一を犯せり。是れ即時に
 應報を齎すべきものなり」と仰せられた。

佛

傳

比丘衆提婆達多のこの兇圖のことを聞いた時、何れも大に感激し世尊を守護し奉らんが爲め
 に高聲に誦經した。併し世尊は「暴行を以て如來の生命を奪ひ奉らんこと得べからず。一切如
 來は正當自然の時期にありて滅に逢ふ」と仰せられて彼等の恐怖心を緩められた。

世尊の命を取らんとする最後の試しをするに提婆達多は那羅祇梨(Nālagiri)と云ふ象を用ひ
 た、この象を醉はしめ次に之を王舎城の車道に放した。暴れ狂ふ動物の世尊に目前に出で來る
 や佛體より發する慈悲の情に潤されてその鼻を垂れた。世尊數語の教訓を述べさせ給ふと象は
 全く馴れて了つて世尊の足から塵を取り上げ之をその頭上に振り撒き而して徐ろに退去した。

斯う云ふ事故の後提婆達多は僧伽中に不和合を起さんと計つたことがある。提婆達多はコー
 ー
 カリーカ(Kokūlika)・カタモラカチッサカ(Kāṭamora-kāṭhissaka)・カンダデーギブタ(Khaṇḍake-
 vipulka)及びサムダッタ(Samudattā)等を説き付けて己れも一緒に佛の所に赴き僧伽の全
 衆の爲め更に嚴肅なる苦行生活の制定されんことを要求した。苦行生活とは隱者の如く森林内
 に棲むこと・招待に應ずることなく一生乞食すること・棄てゝある襤褸衣を著ること・樹下に住
 止すること及び魚肉を絶つこと等である。世尊は之等の要求に應ずることを拒まれ、且つこん
 な風の生活をしやうと思ふものは隨意であるが之等の規則を總ての比丘衆に對して強制したく

はないと仰せられた。

提婆達多は必ず刎ね付けらるゝものと期待して居たので之を世尊に反して騒ぎを起すべき口實とした。毘舍離から來つて新たに教團に入り教律の事に暗き伐地(Vijñā)僧五百人をその黨に連れ込み一分派を造つた。之等の徒輩と共に象頭山に赴き説教を爲しつゝある中衆中に舍利弗目犍連の居るを認めた。二人もその黨に加入したものと誤想し、己れは疲れて眠たくなつたので舍利弗を招ぎ一座の説法を演べしめた。舍利弗目犍連は衆に向つて演説し五百の別派の徒の佛の所へ還るやうに説き付けて了つた。眠つて居た提婆達多はコーカーリカに起されこの出來た事を聞いた時熱血その口より迷つた。

提婆達多の奸黠は罰せられずには居らない。されば世尊はその弟子達に對し斯くの如く惡感情に支配されてるものは一劫の間苦痛責罰の姿にてあるべき定業を有するものと申された。而して彼提婆達多は地獄の最も深い所へ陥つて一劫の後アッチッサラ(Aññissara)又は他の云ふ所によれば提婆羅闍(Devārāja)と稱する辟支佛(Pratyekabuddha)となつて生れ出るのである。

阿闍世王はその父を弑して良心の苦痛を感じた。不安と疑念を抱いて世尊の對敵六師外道に教を求めたがその教ふる所は彼を失望せしめた。次に醫師耆婆の勸告によつて王は精神上の大

醫如來の所に來つたが世尊の口から聞いて智言によつて彼は眞信仰の歸依者となつた。

阿闍世王の治世中その第七年目に釋迦族は悲しむべき運命に遭遇した。拘薩羅國の波斯匿王には毘流離と呼ぶ一子があつたが之は迦毘羅衛城の淨飯王の相續者摩訶那摩が婢女の腹に設けた私生女兒婆沙婆(Vasabhā)と波斯匿との間に出來た兒である。その後この詭計看破され且つ毘流離の釋迦族の爲め侮辱せらるゝや彼は復讐を爲さうと決心した。軍帥デーガカラヤナ(Dighākārāyana)の援助に依てその父波斯匿王を廢した、王は舍衛城から逃れ去つたがその後間もなく死んで了つた。毘流離は今や迦毘羅衛城に向つて軍を進めたので同城の釋族は擧げて慶にされた。併し王自身も亦不意の洪水に逢うてその拘薩羅軍勢と共に悲惨なる死に方をした。北方傳の物語では毘流離はギルデーダカ(Vidādhaka)と呼ばれその母は勝鬘(Mālīkā)軍帥はデーラガチャラーヤナ(Dirghachārāyana)と稱せられて居る。他に不同の所もあるにはあるが話の本筋丈は同じい。

(一)提婆達多の加はる敵意その邪行及懲罰に就いて更に詳しい話は吾人は讀者の小品七篇一四、法句喻經一三九頁以下を参照せんことを望む。ハーデー佛教概論三一八頁以下。西藏佛

傳二七八頁、ロツクヒル八三頁以下參照。ビール東方聖書一九卷二四六頁以下。また雜阿含一卷一五四頁、增一阿含二卷七三頁—小品七篇二の五參照

(二) 西藏佛傳二七八頁によればこは二十五夏中に起つた。提婆達多自身は佛と同年であつたから、彼が佛の大變老いて居らるゝとを擧げた理由が目立つのである。賢者は一言にして足る

(三) 吾人は他の典據からして頻毘娑羅の阿闍世に弑せられたことを知る、長阿含一卷八五頁、ヂヴァアーワダーナ二八〇頁、ハーデー佛教概論三一八頁、西藏佛傳二八四頁、ロツクヒル八九—九一頁

(四) Anantariya 或 anantariya-kamma (五無間業) は abhithana (六逆罪) の五箇條と一致する。之は殺母、殺父、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧である、須多尼波多四〇頁、チルダーズ pañcānantariya-kammāni 及 abhithānaṃ の條下を見よ。Anantariyaṃ (五無間業) に對する梵名は翻譯名義大集一二二節に出してある、ワシリーフ佛教論二四〇頁には Anantariya とある。何人に限らず斯う云ふ罪のある人は戒を受くることはならず、若し僧侶であれば放逐されねばならない、大品一篇六四—六七

(五) 參照 ロツクヒル九三頁、ビール東方聖書一九卷二四七頁

(六) 破和合僧。この話——之が歴史的根據を有つて居ると假定して——は置場を間違へてある、何故と云へば提婆達多と世尊との關係は全く破れて居たから

(七) 之等は明かに西藏佛傳二六六頁の五釋種 Kōkalika, Katamoraga, Tisya, Khapḍadravya 及 Sagaradatta と同じ。Khapḍadevīputta の雜阿含一卷五、一〇、二卷三、四の Khapḍadeva と同一なるや否やは明瞭でない

(八) 往惡趣者、墮地獄者。惡趣は四つある、捺落迦(地獄、煖獄)、餓鬼界(幽鬼の世界)、阿修羅界(惡鬼の世界)、畜生界(獸類の状態)、チルダーズ各條下を見よ。普曜經二三八では惡趣の數は三である

(九) 彌蘭陀問經一一一頁、法句喻經一四八頁、ビールの東方聖書二四八頁、ロツクヒル一〇七頁、ハーデー佛教概頁三二八頁。法顯(傳六〇頁)は舍衛城で提婆達多が地獄に落ちたその所を見た。提婆達多が如何にして舍衛城に來たかは北方諸傳説には説明しないである、之等諸傳説には提婆達多は阿闍世歸佛の後も悪い巧みをなし續けて居ると示してある。Aññissara は「八(勿論十六藝中)の主」の意である

(一〇) 諸異傳の沙門果經、本篇七章の一の註(一〇七頁)參照。富蘭那迦葉は前既に死せるに

も拘らず茲に再び現はるゝも別段怪しむに及ばぬ。佛教の證權の斯る物語に附する歴史的價値の如何なるものなるやは、之等六外道師の那迦犀那及彌蘭陀王の頃舞臺面に再現する——已前の通り活動し且つ悪策を巧みつゝ——此事實が強く之を例示して居る、彌蘭陀問經四頁以下

(一一)本生物語四篇一四四頁以下、法句喻經二一六—二二五頁。ハーデー佛教概論二八三頁参照

(一二)シーフネル西藏佛傳二八七頁には Malini 西藏語の Phreng は梵語の mala に相應せるので Phreng-can を Malika 又 Malini としたのは共に許すべきである

(一三)西藏佛傳同所、ロツクヘル七五—七九頁、一一二—一二三頁。Malika(花女)——原典中では Malika と綴つてある——は波斯匿王妃の一人として巴利文書中にも知られないではない、併し毘流離の母ではない。この女の歴史は本生物語三篇四〇五頁以下を見よ。参照同四篇四三七頁、姫陀那五篇の一、彌蘭陀問經一一五頁二九一頁、雜阿含三卷一の八、法句喻經三一七頁、佛教概論二八五頁。今一人の Malika は Bandhula の配である、本生物語四篇一四八頁、法句喻經二一八頁。同一人物ではないが今一人之と似たものは Krim の女として再生せる Malini である、大事經一の三〇〇頁以下

第十章 最終年の事故・阿闍世王と伐地族・佛王舎城を

去る・波吒梨子城への旅行・恒河渡過・菴婆波利・世尊病に罹る・毘舍離城淹留・舍利弗目犍連入寂・准陀家の供養及び之より起れる病・拘尸那揭羅著・阿難陀の教誡・善賢の歸佛・涅槃・遺形火浴・舍利配分

世尊法壽七十九歳に達せられ王舎城に近き耆闍崛山中に留らせらるゝ時阿闍世王は毘舍離城なる伐地人に對し軍を起さんと圖つた。その計略を實行するに先ち阿闍世王は兩行(Vasakara)婆羅門を世尊の所に送り恭しく會釋せしめ且つその計畫の結果に就いて世尊の教へを得んことを求めしめた。使臣來つて世尊の前に出でその使命を傳ふるや、世尊は阿難陀に伐地人は互に相和して暮しつゝありや、伐地人はその行有徳にして信心ありやと問はれた。阿難陀が世尊の御思召し通りに答ふるや、世尊は兩行使臣に向つて「伐地人に斯く歎稱すべき行ある限りはその幸運は益々加はるべくして衰ふることなからん」と仰せられた。それから兩行は摩揭陀の王は

伐地人に對しては無力ならんとその信する所をはのめかしてその場を立ち去つた。

一日世尊弟子達の爲め戒定慧三學の功德を説いた後阿難陀に向つて「これ阿難陀、是れより菴婆羅致^(三)(Ambalathika)へ赴かん」と仰せられ、大勢の比丘と共にその處に赴かれた。此處に暫らく留らせられた後、世尊は那爛陀(Nalanda)へ進ませられ、此處なるパーヴァリカ(Pavārika)の菴羅林内に居を定め者闍崛山で教へた訓誡を復説された。

那爛陀から波陀梨村(Pataligrama)へ進ませられ、此處で休息所の中で在家の人の爲めに五戒の功德に就き一場の説教をされた。その村を去るに先ち世尊はこの村の何時か波陀梨子(Pataliputra)と云ふ盛大なる都城となり、同時に三大危難の落ち來るべきことを豫言された。

世尊恒河の邊に達せられた時河は溢れて居た。或者は船を求め或者は筏を求めて居ると、佛は消えて比丘衆一同と共に對岸上に立たれた。更に旅行を繼けて俱胝村(Kotigrama)次に那提迦(Nadika)に出られ、到る所に戒定慧の教を復説された。那提迦から毘舍離へ旅行を繼げ此處にその弟子達を教へ勵ましつゝ、菴婆波利の菴羅林中に留らせ給うた。

遊女菴婆波利世尊のその菴羅林に著せられ同處に留らせらるゝ由を聞くや仰山なる供廻りを連れ馬車に乗りて林園の入口まで來り、此處で馬車を棄て徒歩世尊の居させらるゝ所まで往つ

た。世尊の訓誡を聞いた後、菴婆波利は翌日世尊の大衆と共に供養を受けさせられんことを請ふと、世尊はその招に應せられた。この日離車の貴族等同様世尊を招ぎたい積りでやつて來たが、如來既に菴婆波利の招に應じたれば彼等の招に應ずる能はずと仰せらるゝと、彼等は遊女の爲めに先鞭を著けられたことを自白せざるを得なかつた。

翌日^(五)菴婆波利はその尊客を饗應し、供養後その林園を佛を上首とせる僧伽に獻上した。毘舍離から世尊は附近の一村落竹芳(Baliva)村に赴かれ此處に最終の夏を過された。此處で烈しき病に罹られたが強固なる意志の努力によつて間もなく平癒された。併し世尊は八十の高齡でその終焉の日の近づけることを覺られた。夏果て、後一日阿難陀と共にチャーパーラ祠(Chāpāra)へ往かれた。此處で世尊は弟子達に向ひ若も己れに意あれば己れの神力を以て一劫の間この同じ生に留まることが出來るとほのめかされた。併し阿難陀は心が魔の爲めに魅いられて居たので世尊の諷言が分らず、従つて世尊に一劫の間留らせらるゝやう願はなかつた。阿難陀ばかりでなく世尊も亦急ぎこの世を去るやうにと云ふ魔の誘惑を受けられた。如來はその法の確く定立するまでは死なじと答へらるゝと魔王は法は既に確定し廣く傳播したりと申し上げ、世尊は答へて「魔王意を安んせよ、如來の終末は久しからずして來るべし。今^(七)より三ヶ月の終りに如

來は世を去るべし」と答へられた。

阿難陀の爲め法に關する幾多の事を説きて其處に暫らく留らせられたる後、世尊は大林の重閣講堂へと進ませられた。此處にても亦弟子衆を教へ勵まして倦ませ給はず、この後の旅行中次ぎ／＼に留らせらるゝ所でも亦同様であつた。

若し北方所傳の傳説を信ずることが出来れば——舍利弗死しやがて目犍連の死んだのはこの時分のことであつた。南傳の話では二人の死んだのは世尊の竹芳村で夏を終へられた後一週目で殆んど同時となつて居る。他の北傳の話によれば二大聲聞は地獄に提婆達多を訪れて後間もなく死んだのである。

佛は波婆(Pava)に著せられ鍛工准陀(Cunda)の菴羅林に留らせ給うた。准陀は翌日世尊をその家に拜招し供養致したき旨申し上げた。世尊はこの招に應せられ、鍛工は米飯菓子豚肉の食事を準備した。世尊來つて座に著かるゝや自ら豚肉を取り弟子等には他の食物を薦められた。供養の後世尊は准陀に豚肉の残りは埋めて貰ひたいと仰せられた、是れ斯る食物はこの世で世尊の外何人も食ひこなすことの出来ぬからである。この後間もなく世尊は劇烈なる赤痢病に罹られた。拘尸那揭羅(Kushinagara)に赴く途中非常に弱られ、坐りたいと思つて阿難陀に法衣を

佛

傳

擴げ飲水を少し持つて來いと命せられた。阿難陀は河へ往つたが、河は丁度車が通つたので濁つて居たのが清く澄んだのを見て阿難陀は驚異の念に打たれた。彼は欣んで世尊の所へ歸り、世尊は水幾分を飲まれた。

この時偶々阿羅藍迦羅の弟子にしてブツクサ(Pulisa)と云ふ一年少末羅人拘尸那揭羅から波婆に通ずる路を通りかゝつた。世尊を見るや彼は進み寄つて、世を棄てた人の安靜無念の力に到達し得ること實に信じ難き程なることを阿羅藍は一度例證したと云つた。如來はこの話を聞いて己れの經驗の中から更に不思議なる事實を述べられた、爲めにブツクサは今や阿羅藍に對する信仰心を喪つたと云つて眞信仰の歸依者となつた。即刻彼は人に命じて二領の金布を取り來させた。之を取つて來るとブツクサは二領共之を世尊に捧げた、すると世尊は一領を自ら取り一領は阿難陀に賜はつた。

この事のあつた後世尊はカクッタ河(Kakutha)の邊りに進ませられ、此處で水浴をなされた。是より河を横つて所々法を説きつゝ菴羅林に進み、其處より尸賴拏伐底(Hiranyavati)の對岸なる末羅國の二林園拘尸那揭羅のウバブルタナ(Uvavartana)に入らせられた。此處で雙生せる沙羅樹の間に阿難陀は臥榻を按排し頭を北方に向けるやう場を設け、世尊は獅子の如く一足を一

足の上に置き右脇にして安臥された。

般涅槃前數時間を世尊は阿難陀の爲めに種々有用なる忠言訓誡を述べて過ぎられた。色々の御話しもあつたが、世尊は信心篤き歸依者の淨き恭敬の念を以て參詣すべき四箇道場のことをも話された、それは如來降誕の處・正覺を成せられたる處・初めて法を説かれたる處・及び最終入滅の處である。之等の場所を巡禮するの功德を委説し「之等所々に巡禮の途中に於て死するものは死後安樂なる天上界に往生すべし」と申された。

阿難陀世尊の滅後如何なる式を行ふべきやと問ひ奉ると、世尊は最高社會の信者が澤山居て轉輪聖王の遺身を敬重すると同じ法を以て世尊の遺身を敬重すべき故、弟子達は之に關し心を勞するの要なしと答へられた。而して世尊は阿難陀に轉輪聖王の死後行ふべき式を指示された。更に世尊は四種の人は塔婆を得るに堪ふ、如來・辟支佛・佛弟子・及び轉輪聖王之なりと云ひ足された。

之等訓誡の後阿難陀は刻々に迫る世尊と別れの時を思つて痛く心を動かし泣きつゝ、精舎の中へ往つた。併し世尊は彼を召び彼を慰め且つ兄弟の目前でその徳を稱せられた。

世尊その説教を終らせらるゝと阿難陀は如來の國の荒地に立てる一小都會で入滅し給ふはそ

佛

傳

の威嚴に應せず瞻波 (Campā)・王舍城 (Rājagṛha)・舍衛城 (Śāvatthī)・沙祇多 (Śāketā)・憍賞彌 (Kausāmbī)・婆羅奈斯 (Bārāṇasī) 等六大都城の一一こそ適當の所ならんと云ふ意見を述べた。されど世尊は阿難陀に拘尸那揭羅は往時拘舍婆底 (Kūśāvattī) の王都であつたから最も適せる所であると示された。その後世尊は阿難陀に拘尸那揭羅の末羅人の所へ往つてこの夜の最後分に於て如來の入滅あるべしと報じ、且つ彼等を招ぎて最後の刹那に如來を拜するの機を逸せしむる勿れと仰せられた。末羅人等この報に接するや急ぎ世尊の臥せらるゝ所に赴きその面前に出ることを許された。

この時此處に善賢 (Suhadā) と呼ぶ一人の外道僧が住んで居た。沙門瞿曇のこの夜の最後分に入滅すると聞いて切に佛を見たく思つた。阿難陀の所へ來つて許可を求めた。阿難陀は世尊を思ふの心からして之を拒んだが佛は善賢を許せと命せられた、善賢は佛を煩はす心から來たのでなく教を蒙むりたき心から來たのである。それで善賢は世尊の面前に出て徳化の教、特に八正道及び涅槃に達する四級の教を聞いて歸依者となつた。彼は世尊の自ら度せられた最後の弟子である。やがて善賢は涅槃に入つた。

如來最後の刹那も僧團の戒律を堅く守れとの教で通された、この戒律こそ滅後世尊の代りとして

なるものである。尙ほ世尊は弟子等の後日の行ひに關して指示を垂れ、且つ比丘衆の中にて佛法僧及び四諦に就いて疑ひ、腑に落ちざるものなきやと問はれた。斯る輩のなきことは世尊の前以て知られたる通りであつた。

時に如來はその衆に向つて「諸比丘、今我れ汝等に告ぐべきと唯合作のものは總て朽つべき法なりと云ふ事のあるのみ。精進して救度を求めよ」と云はれた。之が如來最後の言であつた。

それより世尊は初禪の定に入らせ給ひ、次第に第二三四禪に移らせ給うた。第四禪より空無邊處定に入り、それより識無邊處定、それより無所有處定、それより非想非々想處定、最後に滅盡定に入らせ給うた。

この時阿難陀阿那律に向ひ「阿那律、世尊滅し給へり」と云ふと「否阿難陀、世尊は未だ滅し給はず、世尊は今滅受想定に達し給へり」と答へた。

世尊は滅受想定から非想非々想處定に入り、それから無所有處定、それから識無邊處定、それから空無邊處定、更に四三二初禪を次第に經られた。次に再び二禪三禪次に四禪に入られた。間もなくその定を出て入滅せられた。

世尊の滅後地震雷鳴續いて起つた。娑婆世界の主たる梵天及び帝釋并に阿難陀阿那律共に相

應の偈を述べた。未だ情を脱せざる或比丘衆は歎き哀んで「世尊の滅し給ふこと早きに過ぐ、光の世に消ゆること早きに過ぐ」と云つたがその他の進歩せるものは思ひ諦めてその別離を忍んだ、是れ彼等は總て合作のものは永存せぬと知つて居たからである。その夜の明るる頃阿那律は阿難陀をやつて世尊入滅のことを末羅人等に報せしめた。末羅人等は丁度會議堂に集つて居たが、その報に接するや妻子等も諸共に深き悲哀に沈める姿であつた、而してその侍者等に命じ香花及び有らゆる類の樂器を拘尸那揭羅に集めしめた。悲泣せる群衆沙羅林中世尊の遺身の臥せる所へ來つて舞踏讚歌音樂の類を以て如來の遺身に恭敬の意を表しその日を過した。翌日も翌々日も同じことを繰返し遂に第七日目に遺體は八人の末羅の頭領之を擔ぎ天の曼陀羅華の降る中を天冠寺(Makutahandhana)と云ふ祠へと運んだ、此處で火葬堆を高く積み上げた。

四人の末羅の頭領その火葬堆に火を著けやうとしたが出来なかつた。意外の事に驚いて、その理由を阿那律に尋ねると、阿那律は大迦葉の來るまでは火は著かぬだらう、大迦葉は比丘の一群を率ゐて波婆から拘尸那揭羅へ通せる路を旅行して居るといつた。して實際彼は一邪命外道僧から沙門瞿曇の一週間前に死んだことを聞いたので歸りつゝあつた、この外道沙門は曼陀羅華を拾ひ取つたことがある。迦葉は火葬堆を積み上げてある所へ急いで往つて、此にその大

衆と共に恭しく堆を三匝し世尊の足下に稽首した。この敬禮が濟むと堆は自ら火が著いた。火の骨のみを残して如來の法體を焼き盡し雨の天より降り來つて焔を消すや末羅人等は歌舞音樂并に香花を以て舍利を供養した。

阿闍世王世尊この世を去り給へりと云ふ報導を聞くや急いで舍利の一部を得たいと請求して來た、毘舍離(Vaisali)の離車族(Licchavi)も自分達の爲めに同様の特典を求め、同じく迦毘羅衛(Kapilavastu)國の釋迦族(Sakya)・遮羅頗(Allakappa)の跋利族(Bali)・羅摩伽(Ramagrana)國の拘利族(Koliya)・波婆(Pava)國の末羅族(Malla)及び毗留提(Vehadipa)の婆羅門(Brahman)等皆舍利上に塔を建つることを誓つて之を得んことを求めた。初め拘尸那揭羅の末羅族は舍利は如何程たりとも他に與ふことを欲しなかつたが、婆羅門香姓(Drona, Dona)が感動すべき演説をやつて佛は常に堪忍を教へられしことを皆に注意したのと、舍利を八等分に分ければ佛塔は到る所に立ち佛の信仰は廣く擴がることを注意したので彼等は納得し、香姓婆羅門に舍利を八等分に分たんことを願つた。彼はその願の通り分けてやつて自分はその瓶を貰ひその上に一祠(三六)を建立した。

これが濟んでから畢波利林(Pippalivana)の孔雀族(Manyu)の使者來つて舍利の一分を求め

佛

傳

た。最早少分も残つて居なかつたので、孔雀族は炭を得て満足するより外はなかつた。彼等もその上に祠を建てた。

斯くて當時八箇の塔があつた、王舍城・毘舍離・迦毘羅衛・遮羅頗・羅摩伽・毗留提・波婆・拘尸那揭羅、この外香姓及び孔雀族の建てた祠があつた。

以上佛の物語的傳記中主要なる事實を追念した。その組織に論及する歴史的その他の要素の考究はこの小論の範圍外である、されば吾人は讀者に他の著述を推薦せざるを得ない。

(一)以下の物語の主なる典據はチルダーズの一八七四—一八七六年の王立亞細亞協會誌に刊行せる大般涅槃經である、リスデビツ教授の譯文は東方聖書一卷に出づ、同教授の序文三五頁には對等文句を集め三六頁以下には支那諸傳を擧げてある。西藏傳はロツクヘル一二三頁以下を見よ。ピール東方聖書一九卷二五〇頁以下参照。ピガンデー二卷一—七五頁。ハーデー佛敎概論三四三頁以下。Windisch 魔羅及佛陀四三—八六頁

(二)王舍城及那爛陀の中間、エドワードミュレル巴利原典刊行會誌同條下を見よ

(三)この際 Sumidha (梵語の Sumitha 善導に應ず)及雨舎は伐地を防ぐため砦を築いて居た。

大般涅槃經一篇二六、小品六篇二八、毘陀那八の六。ロックヒル一二七頁註參照

(四)大事經二の二九三に記してある Visuddhimagga (淨意) が菴婆波利の林園で世尊に物を問うたのはこの時代に著けても好からう

(五)小品六篇の三〇ではこの遊女の佛を招ぐ爲に來たのは Kotigāma (俱胝村) である。斯く地位の變れるは多分佛は本當は菴婆波利の林園を供養されて受取られない中は茲に住はるゝことが出來ぬと云ふ考に基く。ビール二五二頁參照。この林園は法顯傳譯七二頁に記してある

(六)小品六篇三一には佛の離車族の元師 *Siṅha* (獅子) と逢はれたこと及後者の歸佛を載する、併しこの出來事は前の時代に屬する、但ビール二五八頁では等しく佛の菴婆波利と會せられた後直ぐに出て來る、西藏佛傳二六八頁參照

(七)ヂグヤーヴダーナー七品の事項參照、茲には世尊彌猴池 (*Markatāhara*) の濱なる重閣講堂 (*Kāṭyāyāsālā*) に留まらせられたとしてある。ビール二六七頁、Windisch 參照

(八)西藏佛傳二八九頁

(九)ビガンデー二卷九一二六頁。この話には大變な混雜がある、茲の毘舍離城大林は舍衛國逝多林と讀むべきではあるまいか

(一〇)ロックヒル一〇頁

(一一)梵語 *Kuśinagara, Kuśinagarī, Kūśanagara* セントピーターズブルグ辭書同語の條

(一二)この説はハーデー佛教概論三五六頁、ビガンデー二卷三九頁、ロックヒル一三四頁に云へるやうに *Kakutthā* 或 *Kakutthā* であるや否やは疑はしい。吾人は後ほど佛の之に浴し給うたと云つてあるに出會する、毘陀那八の五參照。西藏佛傳二九一頁では佛の浴せられたのは尸賴拏伐底河とある

(一三)西藏佛傳二九一頁參照。「若い」末羅人とあるが、その師は四十五年前死んだのであるから、少くも六十五歳でなくてはならぬ

(一四)少し進んで原典の五二偈には佛は二衣とも自ら著けられたと云つてある、西藏佛傳二九一頁は之と一致する

(一五)之は佛の涅槃を表はす像の姿勢である。この文及次の文にはビール東方聖書一九卷二八六頁以下參照

(一六)増一阿含二卷一二〇頁

(一七)増一阿含一卷七七頁では唯二種の人、如來及轉輪聖王

佛

- (一八)茲にこの言葉で何を意味してあるやは明白でない
- (一九)六大城は名は擧げてないが西藏佛傳二九一頁にも出て居る。波膩尼(Pāṇini)註釋書八の四、四二にある *Saṅgauri* (六城) 參照
- (二〇)西藏佛傳にも亦善賢は阿羅漢果を得た後直ぐ死ぬると云つてある、玄奘記二卷三三九頁にもその通り。ロツクヘル一三八頁參照
- (二一)玄奘記一卷三四一頁には稍々違つて居る
- (二二)之等の階段は又ある無色の世界として示してある。西藏佛傳二九二頁參照
- (二三)ビガンデー二卷八八頁には佛足に關して委しいことを幾らか載せて居る、大事經一の六七頁參照、茲には佛足を「勝輪の相ある」と記してある
- (二四)北傳の一物語は大事經一の六四以下とよく一致する
- (二五)釋迦族民等は毘流離の爲に根斷やしにされた、併し佛教文書では死んだものでも、それが出て來る必要が生ずると何時でも再現すると云ふ風である。名高き六外道の復活も事情全く之と同様
- (二六)デヴァーワダーナ三八頁では頭羅那宰塔波(Dronasthpa)は阿闍世が建てる。この Dro-

傳

nasthpa と云ふ語が婆羅門 Drona を生み出したとも想像出來やう。ビュルヌーフ緒論三七二頁の註は違つた意見である

(二七)遺形の配分は北傳にも同じやうに澤山云つてある、ロツクヘルを見よ、またビール東方聖書一九卷三二五—三三四頁及法顯傳譯第二八節二九節及挿畫九參照

(二八)特にセナーの *Légende du Buddha* (佛陀物語傳) 及オルデンベルヒの *Buddha; his Life, his Doctrine, his Order* (佛陀、その傳、その法、その衆) (この中には全く議論のないほどには及ばぬが少くも餘程の巧妙と大なる學識とを以てこの問題を論じてある

第三編 佛の教法

第一章 根本原理

佛は圓覺の座を占有された時内心から二種の公式を展出された、この二式は爾後世尊の常に一切有情に啓示されたもので、その教の基礎的真理として示されて居るものである。その公式と云ふのは四聖諦(Āryasatya)及び十二緣起(Pratītyasamutpāda)である。

四聖諦即ち四公理又は四實理—概括して苦(Duḥkha)(苦痛)集(Samudaya)(原因)滅(Nirodha)(撲滅)及び道(Pratīpad or Marga)(行路)の四語を以て表はすべき—は世に苦あること、苦は必ず原因を有すること、害惡を撲滅せん爲めには人は正道を知らねばならぬこと、是れ丈はこれ否定し難きこと、示すのである。

之等四諦は瑜伽教(Yoga)に於けると全く同様、印度醫學の四要目を人類の精神的治療法に應用したものに外ならぬことは之を見ること困難ではない。四聖諦と醫學とのこの關係は佛教徒自ら之を知らぬことなかりしは明白である。なせと云ふに『梵文普曜經』四四八頁に二公式の發見を披陳してある後、頓がて吾人は左の意味深き語を見るからである、

明王生ぜり、一切苦より脱れしめ、涅槃の樂に安住せしめ、如來胎藏、如來大法王座に坐せる。

更に四五八頁には

長く苦しき、煩惱の病に惱める、有情世界に、明王、一切病苦を脱れしむる汝は出でたり。

第二式即ち因果の連鎖、十二重緣起、有因の成果は或は之を「十二因緣」(Nidānas)とも云ふ、之は害惡の根を發ばく爲めに仕組んだもので、その四諦との關係は病理學の醫學全體に對すると同様である。全系の名目は無明(Avidyā)(無智)行(Samskāras)(印象)識(Vijñāna)(明識)名色(Nāmarūpa)六處(Ṣaḍyatana)(六感官)觸(Spaśa)(感官と外物との接觸)受(vedanā)(感情)愛(Tṛṣṇā)(欲望)取(Upalāna)(執着、努力)有(Bhava)(生成、生存の初め)生(Jāti)(出生、生存)老死(Jarāmaraṇa)憂悲苦哀絶望(Soka-paridevanāhkhadāmanasopayāsā)である。

この全部の系統中には「この後」^{ポスト、ホフツ}「これが爲め」^{プロ、ホフツ}兩者間の差別を全然無視してあつて、之に相當する瑜伽説のやうに無明を苦の第一原因と説くから之は世界創造及び世界破壊、即ち日常現象の繼起的過程、光明の暗黒裏より現はれ世界の混沌中より出づるより始めて一日のその勞苦を終りて果つるに及ぶまで之を詩的に描寫したもので、或古代の世界開闢の神話を模倣又は改作したもの、やうである。數論派(Sāṅkhya)の緣造(Pratyaya-sarga)開闢説亦之と同じ改作である、

この名稱そのものが緣起法 (Pratītyasamutpāda) と幾らかの關係あることを偲はする。併しこの關係たるや佛教數論兩系は互に相依屬せりとの假定を保證する程のものではない、吾人は唯之等兩系は共に遠き共通の源泉から由來することを推量するに止めて置く。

この十二重の公式を世界開闢の概念に結び著けて見ると吾人は左の結論に達する。無明は不知即ち睡眠の状態である、人間のこの状態の暗喩は『梵文普曜經』四五八頁中にある、

久しく眠り暗陰に包まれたるこの世界、汝は般若の燈明を以て之を覺すことを得。

人は始めて目を覺すと半意識の状態となつて、その精神は明瞭なる意識状態に達する前、漠然たる印象(即ち行)の影響を蒙る。それから現象現はれ、感覺器官の活動起る。感官は外界(現實又は假想)の物體と接觸して感情又は感覺を生ずる。感情は欲しさうなものを得たいと云ふ欲に導き、この欲は段々増加して現在とは異つた事物の状態を作り出さうと云ふ強い執著と努力とを生ずる。斯くて一新状態生じ、生成遷轉の過程を経て直に一新存在發生する。この存在は初めを存するから随つて終りを有せねばならない。この終末は云はゞ有ゆる種類の患難に先導されて居るものである。

北方佛教徒はこの過程を説明する方法を幾らも知つて居る。今上に述べた解釋に近いもので

その次に來るものは業因派 (Kārmika school) に廣く用ふるそれである。それは左の式によつて示すことが出来る、僞智から迷妄印象生じ、迷妄印象から一般概念、一般概念から特殊概念、それから六處の感覺、それから接觸、それから確定感覺、それから欲望、それから胎内の存在、それから現實的有形の存在、それから有生物界有ゆる類及び種の區分、それからして衰朽死滅生ずる。他の説によると、この系統は「卵」又はそれよりも前から始まり、衰朽死滅に終る一の歴史で、人生の歴史を十二段に表はすものである。全體の根元は無明、即ち無常のものを常住と認むる誤謬である、誤謬から行即ち愛情及び愛好・憎惡・感溺(貪瞋癡)の如き一時的性向發生し、それから識即ち胎内初發の意識、これから名色、即ち受及び他の三蘊を含める名と色即ち形とより成れる痕跡身體が出て來る。これから六處即ち感覺器官生ずる、之等の感官名色と接合すれば此に觸起る。それから受即ち感情感覺次に愛(快感を繰返し苦痛なるものを避けたいと云ふ)欲念來る。これから取即ち努力動作の初め、有(正邪業の)状態現はる、それから生即ち五蘊の集合。生から衰朽死滅その他續生する。

アチャンタ (Ajanta) 窟の壁畫の中でこの頃の發見に係るものは十二因縁を具體形に描寫した畫を世に公にした。この畫をその西藏傳のものと喇嘛の説明とで以て補うて見ると之は間違ひ

なく人生の圖表を示して居る。「生命輪」の中に出て居る用語の轉譯上齟齬する所はあるが之はゴーベンダーナンドの主張する理論と一致して居る。吾人のこの中に「^(二五)最初の佛教哲學の絶對的立脚地から見たる人生の圓滿にして確實なる説明」を見るを得るや否やは尙ほ疑ふべき餘地のあるやうである。併しながら緣起説の目的は如何にして有ゆる害惡、死その他のものが畢竟無明から出て來るかを示すにあると云ふ、是れ丈のことは明白である。形式の上から之は瑜伽の公理の「無明は害惡全量の由つて生ずる種子なり」と云ふのと違はない。併しこの句の基礎をなせる情緒に至つては異なる所がある。何故と云へば瑜伽哲學者には常住を求むる慾がある、彼は常見家 (Svātavādin) である。されば總て無常にして變化あるものは彼に取つては害惡である、故に彼は眞正の智識、即ち神我 (Puruṣa) は自性 (Prakṛi) と合一しても實際影響を蒙ることなく、害惡悲哀の因たるものは唯無明即ちこの合一に對する誤れる概念であると云ふ正見を求むるのである。

二箇の根本的公式——これに諸法從緣起 (Ye dhammā hetuppabhavā) の偈も加へて好からう——は應報再生の信仰、業説を豫想するものではない、併し又確然之に反對する點も含まないのである。自我、我、靈魂、箇我、之に關する佛教々理に就ては斯うは云へない。

我に關する三種の重要な論争を簡潔且つ明瞭に説明したものが『^(二六)遍伽羅拏那抵』(Pīṅgalā-Paññatti)三八頁中に出て居る。それは常見説 (Sassatavāda)、斷見説 (Ucchedavāda) 及び佛の説である。第一説は靈魂は今生來生共に眞實存在すると主張し、第二説は靈魂は今生のみ眞實存在すると主張し、佛は靈魂は今生にても來生にても共に存在するに非ずと教へる。

我を斷然絶對的に否認するは靈魂存在の假定の上に築ける普通の印度教的業説と明かに抵觸して居る。されば佛教徒はこの理論に修正を加へないでは之を自説中に採用することが出來なかつた。この教義の佛教徒の手で作り出された形は^(二七)ナルダーズ^(二八)の歎稱して記する所「人が死ぬるとこの人を組成せる諸蘊は滅びるが、その業の力によつて新なる一連の蘊は直に生存に著手し一新生物は他の世界に現はれる。この新生物は異つた諸蘊異つた形體を有するものではあるが、その業が同じいからその實先きに死んだ人間と全く同一である。されば業は生物が輪廻界を經過する間に受くる無數の變化を貫きその同一性を維持する連環である」。

斯かる理論は人間理性の範圍を出て居ることは人の許す所であらう、併しこれはこれがこの教の根本組織中存するに適せぬと云ふ議論とはならぬ。何故と云ふに佛教は遍智不虛の教主の教旨の上に建てたる勝人 (Uttarimanussa) 法であるから合理的組織のものでないことは明白で

あつて、斯かる教理の上に秘密あるは許すべきことであるから、吾人若し「一切は無常なり」(Savah anityam)の金則をこの理論と調和しやうとすれば更に大なる困難が出て来る、なせかと云ふに若し一切無常ならば業は無窮に物を産出する筈がないから、併しこの文句たる、生物の繼起的過程を連結する觀念的連環を除き、他は總て變化あることを表はすの意を示す一方法に過ぎないと假定したらばこの困難は免るゝことが出来やう。これは戰遮(Chinca)その他のものに就いて述べてある責罰の例を辯明するには更に難かしいことである、彼等は總てその場に居合した人々の目の前で大地に呑み込まれ下地獄へ落ち降つたと説いてある。これは佛教の神話に屬するとしたものか。若し然りとすれば業説は何故に同一部門に屬してはならぬか。

斯かる困難を除かんとすればする程、吾人は原始佛教は聖典佛教の通りではなかつたのではないかと云ふ疑惑に陥らざるを得ない。若し僧伽創建者の教は神話や業説とは關係なきものと思像すれば吾人は此に了解も出来、前後の矛盾もなく、且つ高尙にして邪念なき孤獨脱俗的生活法によつて冥想的傾向の精神ある人物を靜樂の至幸なる状態に導くに足るべき一組織を得るのである、この状態こそ涅槃(Nirvana)と稱するものでこれに優れるものは、唯有ゆる苦痛を全然永久に斷滅する最後の涅槃即ち般涅槃(Parinirvana)あるのみである。

佛教本來の形に關する吾人の疑惑は如何であらうが、上述の教義の、聖典大部分の編成なるに先ち、全教系の一部となつて居たことは確かである。時の經つに従つて或成分は元來無關係であつた教條の中に併合されたものと云ふ假定は、之が根本的に變化したものと云ふ信仰を含むものではない。吾人の意見によれば佛教はその初めからして本質上吾人が三藏中見ることが如きもの、全く左の數語の中に擧げてあるやうなものであつた。「佛教は哲學としては唯心論的虛無説(Idealistic Nihilism)バーケレー(Berkeley)の唯心論(Idealism)のやうに「有ゆる迷謬の豊富なる源は外界の實在及び生存に對する根據なき信仰なる」こと、人間はその外何物をも知覺し得ず、且つ自己の爲めには感情の因となることを主張する一種の唯心論のやうである。知れて居るもの知り得べきものは總て意識的主觀に關するもので、唯自我(Ego)の產出物、自我の中に自我の爲めに自我の上に存在するものである。併しバーケレーの唯心論とは違つてこの智識の相對的にして有限なるを認識すること、及びその結果として來るべき現實としての世界の消滅すること、之等は智識を排斥するやうに見え、且つ行き懸り上創造者ばかりでなく絶對的實在者の存在まで否定するやうに見えて明かに虛無説に引き入れた」。

- (一)之は有ゆる佛の教ふる所である、例之涕羅偈陀四九二偈を見よ
- (二)この題目は五人の乞食僧の爲に述べられた第一の説教中に解釋してある、大品一篇六の一九、普曜經五四〇頁及他の文中、例之中阿合一卷四八頁
- (三)例之 Yogasātra (瑜伽經)二の一五註に「猶ほ病、病因、無病、藥と四種の形式ある醫道の如く、是の如くこの教も亦四形式あり、即ち輪廻、輪廻の因、解脱、解脱の方便と。茲に苦患多き輪廻界は捨つべく、勝因神我の接合は捨つべき因なり、捨離は極近の接合の休止なり、捨離の方便は正見是也」Sarvadarsana-Saṅgraha(一切見集)一八〇頁參照。それよりして Buddhi(覺)は Pradhāna(物、勝因)の開展として Prakṛt(自性)に屬するものであるが、その活動は接合の Nivṛti(休止)に息むものである。他の言を以て云へば Buddha(佛)は Nirvāṇa 又 Nivṛti(涅槃又は無爲)に終るものである(Nivṛti は故意に Nivṛti に代置したやうである)
- (四)即ち有ゆる物的並に心的現象、須多尼波多九五頁の *paññā*(表現)と同じく隨つて *māyā*(幻象)と同じい。佛教のやうな唯心的組織の上では現象は勿論實在ではない。總て人體は五蘊と云ふ物的並に心的元素の集合より成るものであるから斯う云ふ生物は *nāmarūpa*(名色)と名くることが出来る

- (五)中阿合一卷二六六頁にある定義は「諸受の上の歡喜是れ取なり」。四種の取のことは同書六六頁を見よ、五一頁及雜阿合一卷三三頁參照
 - (六)大品一篇一、普曜經四四二頁以下。佛譯法華經一〇九頁及チルダーズ *Pañcāsamūppāda* 條下の參照文及法集名數經四二の註を見よ
 - (七)瑜伽經の二の一五「差別する人には一切は苦也」之に註して「このその大苦集發生の種子は無明なり」、二の四「無明は續出するもの、田地なり」
 - (八)佛教及數論組織の間に部分的類似の看出さるゝは緣造説の上でなくして數論の世界創造の上である即ち下の通り、
- | | | | | | |
|----|------------------|--|--|--|--|
| 無明 | 勝因即自性 (Pradhāna) | | | | |
| 行 | 覺 (Buddhi) | | | | |
| 識 | 我慢 (Ahaṅkāra) | | | | |
| 名色 | 五唯 (Tanmātrāṇi) | | | | |
| 六入 | 十一根 (Indriyāṇi) | | | | |
- (九) *Upanāśa* また「薪」の意あり

- (一〇) 全く異つた翻譯と説明とは東方聖書一巻七五頁以下、リスデビツ、オルデンベルヒ及オルデンベルヒの佛陀(英譯二二六頁以下)、「Colebrokeの傳及論文」二卷四五三頁チルダズ、ピガンデー一巻九三頁を見よ。またピールの東方聖書一巻一六一頁参照
- (一一) ホチソン論文集七九頁。最初最終兩項を除きて Nidāna を十業(Karman)と名ける
- (一二) Govindananda の婆羅門經釋書五四九頁に記せる所である
- (一三) ホチソン同所に「是より、組織されて確然たれど尙ほ原型的なる形體出で来る、これその意識の依止處なり」
- (一四) ワツデル之を發見す、讀者の一八九四年の王立亞細亞協會誌三六七頁に出せる同人の文 Buddha's Secret from a sixth century Pictorial commentar yand Tibetan Tradition (第六世紀の一繪畫註釋及西藏傳説より取れる佛の祕密) 及喇嘛教一〇五—一二二頁を参照せんとを望む
- (一五) ワツデル同書三七〇頁。不思議なるは Dhava の解釋である。之は「結婚する婦人で畫示してある、而して喇嘛はこの婦人は人間一生の歴史の辿り得らるゝ者の妻であると云つて此の畫を説明する」。雜阿含一巻三七頁「愛は人を生む」と云ふ句を参照せよ。之は或程度までは sañjanāni 及 janika 梵語の janika (普曜經五四一頁) 即ち「自然の衝動」は法僧伽一〇五九の tanha

- (愛)と殆ど同意義なることを説明する、併し Dhava は茲では一三二二から推量さるゝやうに現實的即ち物質的意義には取つてない、一三二二では Dhavataha を「諸有に於ける有欲」而して一三二三では bhavaditthi を「自我もあり世界もあり等、斯の如きの見」と説明してある
- (一六) 「無常なるは總て苦なり」とはまた佛教的文句なり、例之雜阿含二卷二四四頁
- (一七) 上七二頁
- (一八) 參照長阿合一巻一二頁以下三五頁以下及雜阿含三卷二〇五頁
- (一九) チルダズ「nocheloの條下を見よ」には下の如き言あり「この教理は佛教の精神及び組織全體と直接反對して居るので佛教徒の大に忌み嫌ふ所であつた」。之は極めて明瞭でない。若し今生ばかりでも靈魂の存在を許す斷見説が輪廻説の根柢を攻撃するとなれば靈魂の存在を全然否認する佛教は二重の勢を以て之を攻撃するものである
- (二〇) 同辭書 khando の條下を見よ
- (二一) この理論の煩瑣的説明は彌蘭陀問經四〇頁以下を見よ。ハーデー佛教概論三九六頁以下參照
- (二二) 即ち upādisesa-或 sa-upādisesa-Nirvāṇa (有餘涅槃) 印度教徒の jīvanmukti (命解脱) で

ある、之に對し最終の涅槃は *anupādisesa* である、チルダード同項を見よ。伊帝目多迦三八頁に出せる定義は間違つて居て、同處なる偈中の語「然るに無餘(涅槃)とは人の未來の生有の總て斷滅するなり」と甚だしく衝突する

(二三)ワシローフ佛教論九四頁參照

(二四)ワツデル同書三八四頁

(二五)之は吠檀多である

(二六)虛無説は須多尼波多二〇三頁には簡潔に「内にも外にも何物もなしと見る」と之を云つてある、一九四頁の「無しと、之に依りて瀑流を渡れ」の句參照

第二章 生體の要素業解脱の道

總て有生物は名(Nāman)と色(Rūpa)との二より成る。前者は總て精神的即ち内部の現象を表はし、後者は總て物質的即ち外部の現象を表はすものである。^(一)名は大概五蘊中の四を含む、即ち受(Vedanā)(感情)想(Sañña)(概念)行(Saṅkhāra)(心的傾向)及び識(Vijñāna)(明識、辨別力)である。色は四大(Mahabhūta)を攝する、即ち地水火風及び之等より生ずる有ゆる形質。

斯う列擧して見れば名色と五蘊とは同延名辭のやうに見える。心的諸蘊の定義は、名辭が概して曖昧であるのと且つ之を用ふる方法の漠然たるのとで非常なる困難の伴ふものである。巴利語の原典丈のことを云ふときは想(Sañña)即ち概念又は第一知覺、及び受(Vedanā)即ち感情又は感覺は各々箇々の蘊を形成し且つ同時に行蘊の二小分として出て來ることが分る。之は假令非論理的なるにしても、若し吾人がスペンスハーデーのやうに行に「辨別力」の意味を與へさへしなければ説明の出來ぬことはない。五十二種の行の第一は觸(接觸)である。反之、恐怖、喜悅、羞恥等の如き情操も等しく行である。之は併しこの語が若しハーデーが當てたやうな意義を有つて居るとすれば出來難いことである。行は吾人の意見によれば經過的印象、智的愛情と

情操とを共に含める心的傾向である。是れからして行の列中第一に來るものは觸(Phassa)、第二は受(Verana)(感情)、第三想(Sañña)(概念、例之異なる色彩のその如き)、思(Cetana)(思想、意志)、作意(Manasikara)(注意)、命根(Jivindriyan)(活力)、心一境性(Cittakaggata)(精神の集中)、尋(Vitakka)(思量)、伺(Vicāra)(熟慮)等。

識即ち明識には八十九の小分があつて見聞嗅味觸及び第六感覺等の器官で傳達するものを明瞭に意識し尙ほ善惡及び非善非惡なるものを明瞭に意識し辨別する等、之等をも含むものである。後の場合ではこの名辭は自發的即ち本能的道德上の辨別力を表はす。

北方佛教の四種の心的蘊に與ふる定義は之を簡短に式示すれば左の通りである。識は吾人の内部に進行しつゝあるものを明瞭に意識することである。之が色蘊と連結するより受即ち樂苦その他のものに對する感情が生ずる。想は物體の明確なる概念である、之によつて吾人は物體を認識することが出来る。行は愛情、愛の上に動機を有する一時の心的或は道德的意向である、貪瞋等の如き煩惱(Kilesa)(汚情)慢憍等の如き小煩惱(Upakilesa)(隨煩惱)信不信之に屬する。

五蘊集つて人即ち吾人が個體(Puggala, Puggala)と呼ぶものを組織する、併し佛教の唯心的組織の中では生物は實際の個性はないものである。諸蘊は人を組織して居るけれども諸蘊は分

離集合何れにしても人でないことは明白に斷言されて居る所である。

蘊の集合即ち出生再生の原因は業(Karman)である。されば「再生するは名色なり」と云つてある。吾人は既に名色は五蘊と同延なることを見た。存在繼續中の路程即ち轉生は輪廻(Samsāra)と云ふ通名を有つて居る。

業は初めを有しないと思はれて居るが終りを有することは出来る。その終りに達するの手段、業の働きを破壊する手段は、世尊のその第一の説法中に指示し給ひし通り八正道である。

人が解脱涅槃に越く途中達する程度に應じて四種の區別がある。この四段の聖路を踏みつつあるものは、夫々預流(Sotāpanna, Sotāpanna)、一來(Sakadāgāmi, Sakadāgāmi)、不還(Anāgāmi, Anāgāmi)、阿羅漢(Arahāt, Araha)と稱せられ、通じて聲聞弟子の名を有する。階段即ち道分は各々向(mārga, magga)及びその果(phala)と上下兩段に再別されて居る。

預流家と云ふは第一段に入れる新發意である。初めの三結(samyojana)を脱れたものは責罰趣即ち三惡道(Āpāya)に入ることはない。

一來家と名くるはこの人々間世界に今一度生れ出て來るからである。この人は初めの三結を脱れたばかりでなく、之に加ふるに貪(rāga)(愛情)、瞋(dveṣa, dosa)(憎惡)、癡(moha)(惑溺)

を極々微細なものにした。

不還家とは初めの五種即ち下等の結(五下分結) (avarambhāgiya, orambhāgiya) より脱れたるもの而して地上又は欲界(Kāmaloka)には生れて來ず唯梵天(Brahmaloka)のみに生るゝ人である。

阿羅漢とは道德的(二六)の病毒の素因を盡くし不淨分子を洗ひ去り煩惱(二七)を排ひてその業を成就し重擔を抛ち有ゆる纏結(二八)を除き四種の神通力(二九)を得た人の謂ひである。阿羅漢(三〇)は再び生れ出ることがない。

初向に入らないで直に(三十一)聖化(三十二)を始むべき條件を獲得せる人は之を種好地(Gotrāhīti)と云ふ。聖淨(三十三)の中庭とも稱すべきこの前段は北方佛教徒の Gotrahīmi の名を以て知れる所である。

最上の安樂を得んが爲に四種の道を行つて居る人は俗輩凡夫(Prthagjana)と區別して眞實聖者の列に加はれりとする。その力は遙に普通生物に優つて居る。神通力は人間の達し得るものと云ふ、之は印度諸教の間には有力なる考へであつたから斯う思ふのも不思議はない。特に彼の瑜伽行者(Yogi)は凡俗者流の解する所によると奇蹟のやり手であつた。後段に至つて吾人は再びこの問題に復るべき時機を有するであらう。

聖者の目的は涅槃(Nirvāna)に達するにある。この問題に關して述べた意見を總て此に陳ぬるは小範圍内に能くし得べきことではない。之は一部の書を成すに足るであらう。されば吾人は唯主要なる點を擧ぐるに止めたい。

先づ吾人は隨涅槃(The secondary Nirvāna)と最後即ち絶對的涅槃(The absolute Nirvāna)との區別を附けねばならない。前者は阿羅漢のこの生で得べきもので實際吠檀多家(Vedāntin)の命解脱(Jīvanmukti)と同じいものである。巴利語では upāhisesa 又は sa-upāhisesa を加へて之を辨別してある。北方佛教徒の有質(upāhisesa)即ち本質の殘分ある涅槃に當る。

第二即ち最終絶對的涅槃、佛の場合では常に般涅槃と稱するものは唯死後に至つて達すべきものである。之と同時に苦惱は全部滅して永久起ることがない。是れ丈でも幸福なる状態且つ不滅(amita, amata)のものとして稱揚することが出來やう。之は意識全滅の意をも含んで居やうか。吾人若しこの教條の基礎をなせる根本原理から論理的斷案を下す時は勿論この意味をも含んで居る。併し誰でも論理的推斷をすると云ふ譯のものではない、而して僧伽衆の胸中にあつてすらこの論點に關して幾らか不審の蟠つて居たやうである。こは別段不思議ではないのである。比丘等は佛のその前生中起つたことを意識せりと説かせらるゝを幾度も聞いたので、或

者は知らず識らず記憶即ち意識の死後殘存することを信するやうになつて了つた。比丘等の中には無益の論争を起したことがある、佛は之を制せんが爲め「如來 (Tathagata) は死後存在するや存在せざるや」と云ふ問題は無用のものとして抛棄すべく且つ答辯せずに置くべき一問題である云ふ規律を設けられたは何故かと云ふことが解らう。

實際涅槃と云ふは再生の恐れのない幸福なる死滅の意である。若し然りとすれば佛は魔羅に勝つたと云ふことが如何して出来るか。之は佛は實際有形の死に勝つたのではなくして卑しむべき死の恐怖に勝つたからである。この結果に達する手段は死を極めて多幸なるものとして示すにある。

(一) Satapatha-Brahmana 一四篇一一の四の三

(二) 大品一篇六の三六。法僧伽一三〇九は第五大即ち無爲大 (asankhata dham) を加へて居る。雜阿含二卷三頁で四蘊は受、想、觸、作意である。五蘊の普通北方の別名は色、受、想、行、識である、ピユルヌーフ緒論五一頁を見よ、併し婆羅門經二篇二の一八商羯羅の註、法集名數經二二、一切見集二〇頁は異つた順序に従つて居る、之は之等の語の定義の相違と連關

する一事情である。二十八種の色蘊の煩瑣的列名は淨道論に出て居る、チルダーズ *Chulavāṇīya* の條を見よ。十八界、原物體の本源及性質に就いては法集名數經二五及同所の參照文を見よ。之等十八界の五蘊の一々と如何に關係し關係せざるやは陀兜迦他論二頁を見、五一頁五二頁參照

(三) 翻譯名義大集一〇四節では觸等は單に *cattasīka dharmas* (心法、心的狀態) と呼んで居る

(四) 彌蘭陀問經六〇頁以下では稍異つて居る

(五) 法僧伽二九五頁參照

(六) 全系はチルダーズの辭書四五五頁に引ける *Abhidhamma-Saṅgaha* 法僧伽三三八。名辭及び順序の上の些瑣な違ひは注意せずに措いても好からう。翻譯名義大集同所の表は九十四名辭を含んで居る、ハーデー佛敎概論四〇四頁以下參照。法集名數經は其數四十ある心相應行を十二の心相應行と辨別して居る、三〇及三一

(七) ハーデーの佛敎概論四一九頁以下に小分の列名あり。チルダーズ五七七頁に出せる淨道論及阿毘曇集の拔萃參照。之より大變短い表は翻譯名義大集一〇五節

(八) 一切見集二〇頁

(九) 法集名數經六六註

(一〇)法集名數經六九に出せる數は二十四である、他の典據遍伽羅拏那抵二篇一―九の如きは唯二十を出す、法集名數經同所の註を見よ

(一一)彌蘭陀問經二五頁以下、六一頁參照、同所に *ekacco puggalo* とある言葉は拙く「或者」と譯されぬでもあるまいが、併し唯心的即ち虛無的意味である

(一二)再生の次第は如何に進み行くやは彌蘭陀問經四三頁七二頁七七頁に詳に説明してある

(一三)上七七頁を見よ。巴利語及梵語の對照を擧ぐれば

一 正見	<i>Sammā-ditthi</i>	<i>Samyag-dṛṣṭi</i>
二 正思惟	<i>sāhikappa</i>	<i>sāhikāpa</i>
三 正語	<i>-vācā</i>	<i>-vāc</i>
四 正業	<i>-kammantā</i>	<i>-karmānta</i>
五 正命	<i>-ājīva</i>	<i>-ajiva</i>
六 正精進	<i>-vāyāma</i>	<i>-vāyāma</i>
七 正念	<i>-sati</i>	<i>-smṛti</i>
八 正定	<i>-samāhi</i>	<i>-samādhi</i>

佛の教の法

定義は法僧伽二九七―三〇四、ピュルヌーフ緒論五一九頁參照。*pañcāhiko maggo*(五種道)とは上記八道中一二六七八の五を含む、法僧伽二一頁

(一四)チルダーズ *maggo* 及び *phalan* の條下を見よ、ピガンデー一卷一五三頁參照。四聖者及びその特質に就いては翻譯名義大集四六、四八兩節を見、ピール佛教の連鎖一九一頁を參照せよ、ミナエフ佛教の研究一卷二一七頁以下參照、同所には宗派的諸意見も記してある

(一五)即ち見即ち身見(邪見即ち我の邪見)疑(懷疑)戒禁取(迷信的儀式を奉ずること)。増一阿含二卷二三八頁、法僧伽一〇〇二―一〇〇五、法集名數經六八。預流家には種々の類がある、最も下なるは一番多くて七度再生するもので極多七生と呼ぶ、翻譯名義大集四六節、チルダーズ *paramo* の條を見よ、家々とは二度又は三度再生するものである、遍伽羅拏那抵一六頁、増一阿含二二三頁、翻譯名義大集同所、法集名數經一〇三註參照

(一六)一來家と同意義の語は *Ekabijja* (一種子家)である、梵語では轉訛して *Ekavṛteika* (一間家)となつて居る、遍伽羅拏那抵一六頁、増一阿含一卷二三三頁以下、翻譯名義大集四六節、(一七)即ち上に擧げた三(身見疑戒禁取)に *kamarāga*(貪欲)及 *Tatīṣṭha*(瞋恚)を加へたもの、中阿含一卷四三二頁、増一阿含二卷二三八頁、法僧伽一四六〇では幾らか違つて居る。ヂグヤ

一ウダーナ五三三、五五三、翻譯名義大集一〇九節参照。五類の不還家は遍伽羅扮那抵一六頁一七頁、翻譯名義大集四六節に擧げてある、ナルダーズ *anāgāmi* の條下参照

(一八) *āstava* 巴利語では *āstava*(漏)。その數三 *kāma*(欲) *dhava*(有) *avijā*(無明)、或は之に邪見の一を加へて四ともする、ピユルヌーフ緒論八二三頁、ナルダーズ *āstava* の條参照

(一九) 不斷出で來る精神の惡傾向、その數十、法僧伽一五四八に列擧してある、幾らか違へては普曜經五九頁(此處で *rogo* とあるは *raḥo* と讀まねばならない)、三四八頁(此處では正しく *raḥo* とあり且つ *mrakṣa*(覆)を加へてある)三四九頁

(二〇) 下分許りでなく上分 (*ūrdhva bhāgiya* 巴利 *uddhambhāgiya*) をも盡した、ナルダーズ *saṅvojana* の條下を見よ、法僧伽一四六〇に示せる表は違ふ。翻譯名義大集一〇九節参照

(二一) *paṭisambhida* (無碍解)この語に就て更に詳しくは後段出

(二三) 聖者の四種階段の性質及特點は彌蘭陀問經一〇二頁以下に記しある。翻譯名義大集四六節参照。瑜伽家の四分は

- 一 *Prāthamakalpaika* 初劫地
- 二 *Madhubbhūmika* 蜜地地

三 *Prajñāvyotis* 智光地

四 *Atikrāntabhāvanīya* 超有地

瑜伽經三篇五〇註

(二三) 遍伽羅扮那抵一三頁以下、ナルダーズ同語の條を見よ

(二四) *ワシリーフ* 佛教論二三九頁

(二五) 之と同義の語は *Nirvṛti*, *Nibhuti*, (無爲) *Amṛta*, *Amata* (不死)その他である。之等の語はまたその意味を極少し違へて他の印度宗派にも用ひてある。瑜伽派で通用の語は *Kaivalya* (獨存)、吠檀多では *Mukti* 又 *Mokṣa* (解脱) 尼夜耶では *Apavarga* (離脫)、溼婆僧の派では *Dukh-ānta* (苦盡)。Caraka 四の五には「最終の休息」と同じとして *sānti* (寂靜) *amṛta* (不死) *Brahman* (梵) *nirvāṇa* (涅槃)を出してある

(二六) 翻譯名義大集九五節、ピユルヌーフ緒論五九〇頁、ナルダーズ *nyādisso* の條下を見よ、茲にこの著者の *nirvāṇa* は南方佛教家に取りては阿羅漢獨特の形容語であると云へる言は同著者の *upādhi* の條に云へる所「*nirvāṇa* はまた無餘涅槃に達して存在せざるに至れる人にも適用し得、之と結び著けねばならない。偕て北方佛教家は *nirvāṇa* を全く後の意味に用ひ而

も同著者に難せらるゝ。伊帝目多迦三〇頁の混同のことは上一五二頁を見よ。

(二七)吾人はチルダーズ辭書中 *nibhāna* と題し餘蘊なく巧みに述べ盡した文章を参照する、
 d'Alwis の *Buddhist Nirvāna* (佛教涅槃)、フランクフルテルの *Buddhist Nirvāna and the Noble Eightfold Path* (佛教涅槃及八正道) 一八八〇年の王立亞細亞協會誌、リスデビツ佛教一四頁參照。大乘教家にとつては涅槃の觀念は唯一種の妄念であること後段に至つて吾人が分る通り
 (二八)中阿含一卷四二六頁以下及四八四頁、雜阿含二卷二二二頁、彌蘭陀問經一四五頁。この不可知論は雜阿含二卷二二二頁に如來の述べられた語「死後泥犁(地獄)に出生する衆生を見る」とは詭辭を用ふるでなければ調和することが出来ない。而してまた他の文雜阿含三卷一〇九頁には「漏盡の人は滅盡し死後存することなし」、この理論を邪見として排斥してあるが如何にして之を辯解すべきぞ

第三章 精神練習

涅槃に達する爲めの努力には精神的練習即ち總て印度の入定者の些し許りづゝ違へて實行するやうな冥想靜觀を絶えず大に實修するの必要がある。

修 (*bhāvanā*) 即ち慈 (*maitrī*) (慈愛)・悲 (*karuṇā*) (憐愍)・喜 (*mudita*) (欣喜)・捨 (*upekṣā*) (無記・平心) の情操を修養育成するは思想の高い境界に飛翔するの準備であると思はなければならぬ。之等四種の修はその名稱も性質も共に總ての瑜伽家のそれ等と同じく、或は之を梵住 (*brahmanvāhāra*) 即ち靈界住とも名ける、巴利語では *appamaññā* 梵語では *apramāṇa* (無量心) である。時によると之等四種の梵住に第五の修を加へることがある、第五修とは不淨修 (*asubhābhāvanā*) 即ち肉身嫌惡の實感である。併しこの場合修とは概念、實感の意で、これと同義の語は不淨想 (*asubhasañña*) 及び不淨觀 (*asubhāpratyavekṣā*) である。之は十種あつて死屍の冥觀より來る觀念である、その名稱は脹臃 (*uddhūmatāka*)・青瘀 (*vinīlaka*)・膿爛 (*vipūbhakā*)・壞 (*vicchīdatāka*)・獸噉 (*vīkṣhāyitaka*)・離散 (*vīkṣhitaka*)・傷散 (*hatavīkṣhitaka*)・血 (*lohita*)・蟲蝨 (*pulavāka*) 及び白骨 (*atīhika*)。

十不淨想並に四梵住は四十種の哲學的作業即ち業處(Kammaṭṭhāna)に屬する。之等の作業は十種の遍(Kasiṇa)即ち一種の祕密修を含んで居る。之等作業の間注意力を定著すべき十種の對象は地水火風青黃赤白光及び空である。北方佛教徒も同じ式禮を行じ之を遍處(Kāśāyātana)・遍體又は遍基と名くる。作業の十種の方法は左の順序に擧げてある。青(nīla-)黄(pīta-)赤(lo-hita-)白(avadāta-)地(pīṭhvi-)水(ap-)火(tejas-)風(vāyu-)空(ākāśa-)及び識(vijñāna-)遍處。四十種の作業は更に十種の念(ānasmṛti, ānussati)を含む。十念とは佛法僧戒施天死身入出息法及び靜を憶念不斷思惟することである。

入出息念(ānāpānasmṛti)の行は、或定つた省察の問題に關聯して只管精神を己れの呼吸に定著すること、之は非常に貴い一種の三昧(Samāhi)定である。

四種類の業處を無色定(Aruppa)と稱する、之は四種無形色の梵天界に屬するものである。空無邊處(Akāśānānīyātana, Akāśanānīyātana) (空間無限の處)・識無邊處(Vijñānanīyātana, Viññānanīyātana) (明識無限の處)・無所有處(Akiñcanyātana, Akiñcanīyātana) (空無の處)・非想非々想處(Nāivasaññā-nāsaññīyātana, Nevasaññā-nāsaññīyātana) (非意識非々意識の處)。定的靜觀の力によつて之等の境界に飛翔する人は極めて高い地點に達したもので、之に勝れる

ものとは唯一つ滅受想定(Sañjāvedayitanirodha, Sañña-) (意識斷絶)のあるのみであつて、彼等は之に該當する勝解(vinoksa, vinokkha)即ち解脱の高き状態に達達したものである。勿論この組織中には別段佛教的のものとは多くはない。何故と云へば吾人は阿羅藍迦羅は無所有處定の老手であり、鬱頭藍は非想非々想處定の熟練家であつたことを知つて居るから。唯佛は滅受想定に達して彼等に超越された。

上に述べたことからして四段の禪那(Dhyāna, Thāna)即ち抽象的冥觀は、名義上業處の組織から除かれて居るが、之は四種の程度の定に過ぎぬと云ふことになつて來る。禪那の練習は佛教から見ると明かに古いから吾人は「^(一四)チルダーズ」の趣味ある記事から左の一節を抜き出して自ら満足する。「僧侶はその精神を或單一の思想の上に集中する。次第にその靈魂は超自然喜悅及び靜穩に満ちて來るが、その精神は尙ほ靜觀の目的で選んだ問題を推理穿鑿する、之が初禪である。尙ほその思想を同じ問題上に定著して次にその精神を推理穿鑿から離す、而して喜悅及び靜穩は元のまゝである、之が第二禪である。次にその思想は尙ほ元の通りに定著させて置いて、行者は喜悅の樂を享け第三禪に達する、是れ平安なる靜穩の状態である。最後に彼れ第四禪に達する、此ではその精神向上し淨化して有ゆる情緒に對し無感覺であり、快樂苦痛に對し

て同感である。初め三禪は一々之を劣觀中觀勝觀の三段に再別し、初禪に達達すれば神通奇蹟 (iddhi, iddhi) を行ふの力を得る。概して諸禪は十六色梵界の入路を得るので諸種の界は達し得た定の度に從つて定まるものである。從つて四禪は四無色定よりも低い程度の定的靜觀を現はして居ることは明白である。

時によると五種禪 (pañcāṅgikāni jhānaṇi) の問題の起ることがある。之では第二禪が二段に分れてゐるのだから根本の點に於て四禪と異なる所はない。

禪を云ふの因みに吾人は三昧(定)に就いて述べねばならない、之は本來極めて熱烈なる凝念專心の状態であるが、佛教文書中では更に廣義の語である。定には異つた組合せがある。三定と云ふのは有尋有伺 (Savitakka-savicāra)・無尋唯伺 (Avitakka-vicharamhita) 及び無尋無伺 (Avitakka-avicāra) である。他の三定は空 (Suññata) (虚無)・無相 (Animitta) (無根據・無理由)・無願 (Appaññita) (目的不定) で三種の解脫の状態は之に應じて居る。四定の二組は離棄に達する順退分 (hānabhāgiya) (堅意に達する順住分 (phītibhāgiya))、特異に達する順勝進分 (visesabhāgiya))、及び最勝に達する順決擇分 (nibbedhabhāgiya) である。

三昧の上で或人は之を二段を分ける、下位を思惟三昧 (Upeccārasamādhī) と云ひ上段を正受

三昧 (Appanāsamādhī) と云ふ、即ち初位の定と透徹一切把捉の定とである。

三昧本來の意義から云へば何に限らず、幽玄篤信の冥想は總てこの項目の下に入れることが出来るものである。儀式的傾向を有する大乘教徒の多少感興的名目にて莊嚴されながらも明確なる意義のない一連の定を案出したのは不思議なことではない。般若波羅蜜多經には一百八種と云ふ多數を擧げてある。

理論上から云へば三昧と同数の三摩鉢地 (Samāpatti) (等至) が無くしてはならない。何故と云へば進行中の手順の仕上りと變らないと同様、定と等至とは變りがないからである。實際八種の等至があつて、四の劣種の定即ち四禪及び四の無色業處と符合することは明かに云つてある所である。第九の滅盡等至 (Nirodhasamāpatti) は滅受想定に該當する。

再び業處に戻つて吾人は食不可樂想 (Aharaṇapātikkālasañña) 即ち有形食不淨の意識に出會する。この表の最後に出るは四大決定 (Catuhātu-vavathāna) である。

四十作業以外、この表に含まれて居らなくて業處と稱する練習の出て來ることが度々ある、例之空業處の如き、併し之は空と觀する定の一名に過ぎぬことは明白である。

觀念の基礎即ち實體、及び冥想の對象となる、さう云ふものを境 (ārambhaṇa ārammaṇa) と

名ける。

以上吾々は種々の理想的世界、有形無形の梵天界を擧ぐべき機会を有つた。之等の世界と之と同類の世界とは宇宙の諸部を形成するかのやうに云つてある。佛教徒は理想家であるから^{三七七}觀察に基ける宇宙間の事實と想像から作り出したものとの間に何等の著しい差異をも附せない、前者も後者もその宇宙系に屬する、吾人は之に就いて簡短なる説明を試みたいのである。

(一) 定義は瑜伽經一篇三三にあり

(二) 増一阿含二卷一三〇頁、須多尼波多八九頁、翻譯名義大集七二節、普曜經三五頁三七一頁、本生鬘三二二。ナルダーズのこの語を *appamāna* から來れりとせるの正しきことは須多尼波多同所の文 *mettan cittān bhāvanān appamāyān (無量慈心修)*、増一阿合一卷二二六頁に *appamāyasamādhī (無量定)* の *appamāhī (無量心)* と同一と見、二卷五四頁に *appamānanā ceto-samāhīn (無量心定)* の語ある等より知らるゝ通り、中阿合一卷二八三頁參照。須多尼波多二六頁には *aparimāna (不定、無量)* の語もある

(三) 中阿合一卷四二四頁、翻譯名義大集五二節表題、普曜經三六頁、ナルダーズ *asubho* の條

(四) 法僧伽二六四。翻譯名義大集五二節の之に對する語は

脹腫	<i>vyādhmātaka-</i>	離散	<i>viksīptaka-</i>
青瘀	<i>vinīlaka-</i>	傷散	缺
膿爛	<i>vipūyaka-</i>	血	<i>vilohitaka-</i>
壞	<i>vidagdhaka-</i>	蟲蝨	<i>vipadamaka-</i>
獸噉	<i>vikhāditaka-</i>	白骨	<i>asthi-sānjā-</i>

この表に算ふる名辭は巴利の不淨想よりも一つ少い、巴利不淨想に就いて詳しい話はハーデーの東方寺院組織二六八頁を見よ

(五) チルダーズは同語の條に淨道論より取つて列擧して居る。之等は普曜經三四頁以下には百八法燈門と云ふ廣き列中に含めてある

(六) チルダーズ *kasino* の條下を看よ。中阿合一卷四二二頁では五原素地水火風空を *pañca-visamā bhāvanā* (地に同するの修) の對象等とせるを吾人は見る。この五原素は識を併せて六大を爲す、法集名數經五八の註を見よ。その次なる修は慈悲喜捨修、次に不淨、次に無常觀、最後に入出息念

(七) 翻譯名義大集七二節。巴利の大典據 *Saṅgīti-sutta* (會誦經) には *aloka-* (明遍處) の代りに *vijāna-* (識遍處) を擧げてある、更に詳しい記事は *チルダーズ* 同語の條及 *ハーデー* 東方寺院組織二五二頁以下を見よ

(八) 増一阿含一卷四二頁。之等十の中 *チルダーズ* は初めの六を擧ぐ、*anussati* の條、普曜經三四頁、翻譯名義大集五一節、法集名數經五四の註

(九) この秘密事に就いて詳しくは中阿含一卷四二五頁、修多毘崩伽一卷七〇頁、翻譯名義大集五三節(茲ではこの語を *anādana bhāvanāvihāri* としてある)、*ハーデー* 東方寺院組織二六七頁以下を参照す。ワシリーフ佛敎論一三九頁参照

(一〇) 翻譯名義大集六八節一一九節、*ビュルヌーフ* 佛譯法華經八一頁、*ハーデー* 同書二六一頁。中阿含一卷四五五頁参照

(一一) 中阿含一卷四五六頁、二九六頁、翻譯名義大集七〇節、法集名數經五九參照、*Saṅhāvādayataniroha* なる形は大事經一の二二六頁。或箇所では四種の *cetovimutti* (心解脱)、即ち *appamāṇā* (無量) *akincañhā* (無所有) *sañhātā* (空) *animittā* (無相) に出會する、中阿含一卷二九七頁、増一阿含一卷四頁、他の箇所では五種である、*チルダーズ* *vimutti* の條。瑜伽の *citta-*

vimukti (心勝解) は三である、瑜伽經二篇二七の註

(一二) 中阿含一卷一六五頁、普曜經二九五頁三〇六頁、佛所行讚一二品六三偈八三偈

(一三) 例之本生物語一篇五八頁、大事經一の二二八頁、普曜經一四七頁、佛所行讚一二品四九偈を見よ。瑜伽經三篇の二參照

(一四) 辭書一六九頁。原典、例之中阿含一卷二二頁一一七頁四五五頁、普曜經一四七頁四三九頁、大事經一卷二二八頁、翻譯名義大集六七節。佛所行讚一二品四九偈以下參照

(一五) 之等諸世界の名は後出

(一六) 法僧伽八三頁にては、段は *vitakka* (尋) *vicāra* (伺) *pīti* (喜) *sukha* (樂) *cittas'ekaggatā* (心一境性) である

(一七) 彌蘭陀問經三八頁、瑜伽經三篇の三、一切見集一六四頁

(一八) 増一阿含一卷二九九頁、彌蘭陀問經三三七頁、茲には六定は佛の七寶の一と定めてある。瑜伽經一篇一七、一八

(一九) 法句經九二偈及註、*チルダーズ* 辭書二七〇頁。翻譯名義大集七三節に出せる三 *Vimokṣa* 或 *Vimukti* (勝解) は空無相無願である。法集名數經七二註參照

- (二一〇) 翻譯名義大集五節 usmṅgata (煖) mūrtihāna (頂) ksānti (忍) Jaukikāgradhama (世第一法) と同意義の Nirvedhalahāṅgīga (順決擇分)。煖等はワシリーフ佛教論一三九頁二四六頁參照。巴利 usmṅgata は samanāteja (沙門火) に同じい、本生物語五篇二〇八頁。中阿合一卷一三二頁では usmṅkata は極めて熟練なる、顯著なるの意
- (二一一) ハーデー東方寺院組織二五七頁。同じ区分は業處にも當てはまる
- (二一二) 翻譯名義大集二一節に列挙してある
- (二一三) 遍伽羅扮那抵二〇頁、雜阿合一卷二一六頁(九次第定)、翻譯名義大集六八節、ビユルヌーフ佛譯法華經三四八頁七八九頁、ワシリーフ佛教論一四〇頁二四〇頁。瑜伽經一篇四二一四八參照
- (二一四) ハーデー東方寺院組織九六頁淨道論より引用
- (二一五) 増一阿合一卷二九九頁
- (二一六) 八千頌般若經所々、例之一三八頁二六九頁、翻譯名義大集二一節では ārambhāna チャンドーギヤウバニシヤツド二の九 anārambhāna 參照。されど瑜伽經一篇一〇、三八、四二の註には ārambhāna

(二七) 唯心的組織の上では絶對的實在に對する餘地がない、全世界は想像の産物である、他の言にて言へば、世界は禪那によつて創造されるから。ホデソン論文集二八頁、ビール支那佛教聖典の連鎖一二四頁參照

第四章 宇宙組織・生物の分類

宇宙は無数の圓體即ち鐵圍山 (Cakravāla) から成り立ち、圓體は各々その地日月天國及び地獄を有つて居る。之等圓體と圓體との中間には地獄があつて之を世界中間 (Lokantarika) と名ける。吾々の大地の中點は迷盧 (Meru) (又は須彌樓 Sumeru, Sineru と云ふ) 山の占有する所で、その周圍に重なる山即ち七金山 (Kūṭācala) があり、七金山の外に四大洲 (Mahādīpa) 即ち北俱盧州 (Utārakuru)、北方淨土人の國、瞻部洲 (Jambudīpa) 即ち印度、之は須彌樓山の南に當り、西牛貨州 (Aparagolāna, Aparagolāniya, Aparagoyāna) は西、東毘提訶州 (Purvavideha, Publa-) は東に當る。

圓體は一々三の界 (Avacara) より成立して居る、界は又路迦 (Loka) (世界) 或は駄都 (Dhātu) (層階) と云ふ、その最下階は欲 (Kāma) (肉慾) 界、之よりも高いのは色 (Rūpa) (有形) 界で四段の禪に分れ最も高いのは無色 (Arūpa) (無形) 界である。

最下界は六種の天人の所住處である (一) 四王天 (Cāturmahārājika) (二) 三十三天 (Trayastrīmsat) (三) 夜摩天 (Svayama) (四) 兜率天 (Tusita) (五) 樂變化天 (Nirṃāṇarati) (六) 他化自在天 (Pa-

raṇimīta-vaśavartin)。之等六種の天界は人間 (Manuṣya) 阿修羅 (Asura) 餓鬼 (Preta) 等の世界、畜生界 (Tiryagyonī) 及び地獄 (Niraya) と合して十一欲界を組成する。

第二の區界即ち色界 (Rūpa) 或は更に正確に云ふ時は、色梵天界 (Rūpabrahmaloka) ——と云ふのは色界は廣い意味では欲界をも含んで居るから——は十六部に分れ、欲より離れたる諸天人十六種の所住處である。下から始めて (一) 梵衆天 (Brahmapārisajja) (二) 梵輔天 (Brahmapurohita) (三) 大梵天 (Mahābrahma) (四) 少光天 (Paritābha) (五) 無量光天 (Appamāṇābha) (六) 極光天 (Abhassara) (七) 少淨天 (Paritasubha) (八) 無量淨天 (Appamāṇasubha) (九) 徧淨天 (Subhaktiṇa) (十) 廣果天 (Velapphala) (十一) 無想天 (Asaññasata) (十二) 無煩天 (Avīha) (十三) 無熱天 (Atappa) (十四) 善見天 (Sudassa) (十五) 善現天 (Sutassi) (十六) 色究竟天 (Akaniṭṭha)。一から三までの所居は三段の初禪を別々に練習する人の達する所である。次の三は第二禪に熟する人の達すべき所、次の三は第三禪に練熟せる人の達すべき所である、十一及び十二は第四禪に當てゝあり、残り五天は不還果の人に當てゝある。

北傳の經典は殆んど之と同様の名目を有つて居る。第一班は梵身 (Brahmakāyika)・梵衆 (Brahmapārisajja)・梵輔 (Brahmapurohita)・大梵 (Mahābrahma) の諸天より成り、第二班は少光

(Paritabha)・無量光 (Apramāṇībha)・極光 (Abhāsvara)・第三班は少淨 (Paritasubha)・無量淨 (Apramāṇasubha)・徧淨 (Subhaktira)・第四班は無雲 (Anabhraka)・福生 (Puṅgavaprasava)及び廣果 (Vihāphala)・最後の五は無煩 (Avra)・無熱 (Atapa)・善見 (Sudṛṣa)・善現 (Sudarsana)及び色究竟天 (Akaniṣṭha)である。⁽¹¹⁾ 〇

色梵界よりも高きは無色梵界であつて四段に分れ無色業處と同一の名目を有つて居る。有情の所居三十一の中で一番下層にあるものは地獄即ち責罰の場所 (捺落迦 naraka・泥梨 niraya) である。主なる地獄はその數八あつて等活 (Sañjīva)・黑繩 (Kālasūtra)・衆合 (Saṅghāta)・號叫 (Rāvaṇa)・大號叫 (Mahārāvaṇa)・炎熱 (Tapana)・極熱 (Pratāpana)及び最も深きは無間 (Avīci) の名で知られて居る。之等の外既に擧げた通り世界中間地獄があり、更に多數の小地獄がある。北方佛教の古い組織によると、今上に列擧した八熱地獄の外同數の寒冷地獄がある、阿部陀 (Arbuda)・尼刺部陀 (Nirarbuda)・阿吒々 (Apta)・囉々婆 (Hahava)・虎々婆 (Huhava)・嗔鉢羅 (Uṣṭala)・鉢特摩 (Padma)・摩訶鉢特摩 (Mahāpadma)。巴利聖典では吾人は之等の外更に數地獄を看出するのである、阿吒々 (Apta)・阿部陀 (Abhuda)・尼刺部陀 (Nirabhuda)・阿訶々 (Ahalā)・阿婆々 (Ababa)・拘勿頭 (Kumuda)・嗔鉢羅 (Uṣṭalaka)・須臾提 (Sogandhika)・芬陀利 (Puṅdarika)

及び鉢特摩 (Padma) である。後に出來た北方⁽¹²⁾の書では地獄の數は更に多くなつて居る。

畜生道即ち畜類有情は地獄の上に置いてある。この概念の上では吾々は古い神話の殘存するを見なければならぬやうである、何故と云へば實際の動物は吾々の遊星即ち人間の世界に棲んで居るから。動物界よりも高いのは餓鬼・迷魂・魔鬼の居所である、併し之等の有情は世界中間の地獄にも置いてある。更に高きは兇鬼阿修羅の領土で、その中で一番上に位するものは羅睺 (Rāhu)即ち日月蝕を人格化するものである。地獄を次の三世界と合すれば四惡趣⁽¹³⁾受苦の處が出來、之等に人間界を加ふれば五趣となる。

斯う云ふ理論が如何程まで眞面目なる信仰の事柄であつたか之を知るは吾々に取つて困難である。南北雙方其聖典の中で吾々は數々世尊の嚴かに且つ何處までも眞面目な調子で諸天界その他の處に自分が往つたことを談せらるゝを聞くのである。梵天界に往かれたことは『梵請經』 (Brahmanimantajika-Sūtra)中に世尊の明かに記せらるゝ所である。他の文中には娑婆界主梵天王から來問を受けたことを確言して居らるゝ。佛陀の歴史中、諸天神特に梵天 (Brahmā)及び帝釋 (Indra)の如來自身と同様現實的に描寫され役者となつて現はるゝ、斯う云ふ文句は擧げて言はずとも、上に云つたやうな言明は無數である。世尊は來世に於ける人々の運命に關する一

切のを知り、且つ同時に明白に——而かも不思議に——他の教師連のやうに貪慾の心から或は世人を欺かんが爲めにその勝智を用ひないと云つて、誰某は何處其處に生るべしと忌憚なく豫言された。

吾人は總て之等のことからして何を推斷すべきであるか。聖典を集成した人々の確信や目的は何であつたらうとも僧俗兩者の間で信者の大多數は今日に至るまでその聖典の内容を全然信用し來つたことは殆んど疑ひなきことであらう。

三十一世界及びその所住者を斯く組織する外に今一つの組織がある、これでは有情はその精神的特長の高下によつて區別される、之は一時的の性質の差違と云はなければならぬ。何故と云へば等級の上で一番低い有情でも業の力によつて一番高い位に上ることが出来、定んで最後の涅槃に達すべき佛・辟支佛及び阿羅漢を除き、一番高く生れたものでも下ることのあるからである。

この分類法によれば一番高いものは(一)最上佛(the Supreme Buddha)であり次に來るは(二)辟支佛(Pratyekabuddha) (三)阿羅漢(Arhat) (四)天(Deva) (五)梵天(Brahmā) (六)天上の樂師、乾闥婆(Gandharva) (七)羽翼ある生物で雷の如く空中を飛び翔る伽樓羅(Garuda) (八)蛇

のやうな生物で雲に類する龍(Nāga) (九)夜叉(Yakṣa) (十)妖鬼鳩槃荼(Kumbhāṅḍa) (十一)兎鬼阿修羅(Asura) (十二)巨漢怪鬼羅刹(Rākṣasa) (十三)迷魂魔鬼餓鬼(Preta) (十四)地獄の住者(Nairāyika)。

總て之等の中で吾々の手を要するは初めの三である、他は別段言を爲すの要を見ない。況んや之等は一般印度神話に屬するに於てをやである。

(一)詳細はチルダーズ satatoka の條下を看よ、ハーデー佛教概論一頁以下、傳奇物語八〇頁以下、ビュルヌーフ緒論五九九頁以下、ワツデル西藏の佛教七七—一〇四頁

(二)法集名數經一二五註

(三)翻譯名義大集一五四節、普曜經一七〇頁、ヂヅヤーワダーナ二二三頁以下

(四)翻譯名義大集一五五節 kāma-(欲) rāpa-(色) arpa-dhātu(無色界)

(五)普曜經一七〇頁、ヂヅアーワダーナ二〇〇頁、ビュルヌーフ緒論二一二頁。諸天神は dighāvika(長壽)ではあるが、不滅ではない、増一阿含二卷三三三頁。同一の意見は印度教徒の間にも極めて普通である、例之 Yājñavalkya Dharmasūtra 三篇一〇、瑜伽經二篇五の註

- (六) 翻譯名義大集一五六節には唯八、即ち六種の天人世界、地居衆生世界及虚空住者の世界
- (七) 中阿含一卷三二九頁には六より十に至る群出で *Abhiha* (優勝) その後に來る、同所三二七頁參照
- (八) *Chaldäer* *Jhannin* の條下を看よ
- (九) 翻譯名義大集一五七節亦然り、第二の名稱は *ビュルヌーフ* 緒論二一二頁には出でず。茲には名目は唯三あるべきであるから *Brahmakāyika* は巴利に於けると同様、本當は全班を包容する名目であるらしい、*Chaldäer* 辭書四八六頁を見よ。法集名數經一二八參照
- (一〇) 普曜經一七一頁には *Asūjhisatvas* (無想天人) を加ふ、巴利の *Asūjisatvas* に應ず、法集名數經同所を看よ
- (一一) *Atapas* (無熱天) 普曜經同所には出でず。翻譯名義大集二六一節には *Asūjisatvas* 及 *Mahāmahāśvārāyatana* (摩訶大自在所) を加へてある
- (一二) 空無邊處その他に住む諸天子の實際の壽量の話は増一阿含一卷二六七頁に出で居る
- (一三) 之等地獄の詳しい記事は例之増一阿含一卷一四一頁以下、大事經一卷七頁以下に出で居る。翻譯名義大集二二四節參照

- (一四) *ビュルヌーフ* 緒論二〇一頁、翻譯名義大集二一五頁、*ヂヴァーヴダーナ* 六七頁。稍々異なるは法集名數經一二二、茲の *Apapa* は巴利の *Ababa* に同じ
- (一五) 須多尼波多一二三頁。之等の語はまた高い數をも表はす
- (一六) 例之 *Karanda-Vyūha* 中。フエールの *L'enfer indien* (印度の地獄) 一八九二年及三年の亞細亞誌參照
- (一七) 幽鬼物語書卑多事中的物語及 *Chaldäer* *peo* の條參照
- (一八) *Chaldäer* *asuro* の條及翻譯名義大集一七一節
- (一九) 普曜經二二六頁にはその名を明記せずして三惡趣と擧げてある
- (二〇) 阿修羅道を加ふれば六、*ビュルヌーフ* 佛譯法華經三〇九頁、法集名數經五七の註
- (二一) 中阿合一卷三二六頁
- (二二) 増一阿含二卷二〇頁、中阿合一卷四五八頁
- (二三) 中阿合一卷四六四頁
- (二四) 一方には後代の大乘教又は密教の書に、遍通せる懷疑思想の例あるに會することは否定出來ない。 *Vajramāyā Dharaṇī* (金剛場陀羅尼) で佛は「文殊師利よ、地獄は無智にして愚か